# 第八章　長薩和解の端緒

小田村素太郎阪本龍馬の邂逅○阪本の來藩○土方の來藩○桂阪本等の會談○石川清之助の來藩○高杉井上伊藤の參畫○國家統一論○銃砲汽船の購入策○薩藩の意向○小松帶刀と岩國○融和の開卷

長薩の和解は此時機に於て其端緒に就けり此年五月上旬小田村素太郎の命を奉じて長府藩士時田少輔と共に太宰府に赴き五卿の起居を候問するや阪本龍馬偶〻鹿兒島より太宰府に至り二人に面して薩藩の事情を陳べ長薩相輔くるの利を說く蓋し土藩浪士阪本龍馬石川清之助（中岡慎太郎）は長薩兩雄相爭ふの大局に利ならざるを察し之れが和解を冀ふに切なり龍馬の太宰府に至るや先づ此意を五卿に陳べ小田村等に邂逅して其意を漏したるなり閏五月朔坂本龍馬安藝守衛馬關に來り人を介して桂小五郎に面せんことを請ふ桂因て同僚と謀る所あり命を受けて馬關に赴き便宜將に太宰府に赴むかんとす會〻土方楠左衛門京坂より太宰府に歸らんとし桂に邂逅し上國將に變動あらんとし在京の薩藩士使を鹿兒島に下し西鄕吉之助を迎へて東上せしめ將に汽船に駕し不日馬關を過ぎんとすることを陳べ之れと馬關に相見んことを勸む桂乃ち筑前行を停め馬關に留まる而して西鄕は汽船上國に直行して遂に來らず桂は屢〻山口政府員より促され遂に月末に至り後事を伊藤等に托し山口に歸る阪本の馬關に來るや居ること旬餘日にして石川誠之助鹿兒島より上京の途次道を枉げて亦來る因て互に時務を談論す阪本等の言ふ所桂意既に之れを贊す高杉井上伊藤實に其議に與る（馬關論の主腦は桂にして高杉井上伊藤は實に其股肱たり唯高杉井上は桂に後れて歸關せしに因り其參畫の何日に始まりしや未だ詳ならず）然れども長人の薩人に銜む所あるや久し當時和解の事桂等亦未だ容易に他人に發言することを得ざりしなり諸隊の壯士に對して殊に然りとす獨り壯士のみならず政府の職員と雖ども薩と和解は逡巡の狀なきに非らざりしなり（章末に掲ぐる廣澤の書翰は其一證なり）始め桂の歸國して伊藤村田等と相謀るや伊藤等以爲らく方今の大計開國の方針を取るに非ざれば皇國の維持蓋し難し然れども政刑の統一を內に謀らざれば安んぞ國威を外に伸ぶることを得

ん朝廷と幕府とは併び立つことを得ざるなり此統一の宏謨は防長の武力を悉し死生以て事に從はざる可らざるなりと桂之れを賛し共に藩國に盡瘁することを誓ふ而して銃砲汽船の購入は當時の急須たり乃ち相謀て將に其事を遂行せんとし政府員亦之れを賛す而も未だ之れを果さず會、阪本等至る伊藤井上等乃ち阪本等と謀り薩藩に托し其名義を假るの策を建てたり是れ當時に在りては實に一石二禽を打つの案たり銃砲汽船購入の便路を得る是れ其一なり薩藩にして果して此等の勞を取らば以て其我と相親まんとするの眞意を表するに足り我が壯士等を誘導して怨を薩に解かしむるの便路を得べし是れ其二なり而して阪本は海援隊の首領にして當時既に一團の同志と共に薩藩と結托し薩藩をして汽船數隻を購入せしめ而して之れが操縱の委囑を受けたる者なれば阪本等は長薩の間に立ちて此等の事を斡旋するに恰當の人なりしなり但し銃砲は當時既に青木群平命を受けて長崎に赴き裝條銃千挺を買得するの手段中なりしを以て井上伊藤は事二途に渉るを避け獨り汽船購入の事を以て阪本石川に謀る二人爲めに在京の



薩邸に謀り報告すべきを約し去て上國に赴きたり

左の諸文書は當時の事情を見るに足るものなり

（桂への藩命）

右御用有之赤馬關へ被差越趣に寄筑前太宰府迄被差越候事（閏五月三日）

（時田の書翰）

一筆拜啓仕候爾來彌御勇健可被成御在山奉拜賀候扨追々御聞及にも可有之過日小田村君御一同筑前行之節宰府表にて相對致候土藩人阪本良馬近日薩國より歸筑同國之情態相心得居小生共へも荒方相洩申候勿論公卿方拜謁も被仰付候其次第に於ては小田村君委細に御承知之儀に御座候然處右同人且安藝守衛兩人昨夕馬關へ着仕候先生へ御面話之儀兼て相願居候段噂も致居候事に付其積にて渡海に及候儀と推察仕候乍御苦勞早々御出關被成下事情御探索有之度所祈候右良馬事は先生之御世話に相成候儀も有之由申居候先生御面談相成候はゞ何も薩國之情態相分可申と奉存候小田村先生へも及御報知置候間被仰合

早々御出關吳々奉待候其内不都合之儀無之樣爲取扱可申候何分別人にては密事相洩兼候樣相見申候先は右之段御報知迄不取敢以一使申上候書外委細之儀は御出關之刻萬々可得拜話候多忙中取紛草細御海涵奉希候恐惶敬白

閏五月二日

木圭大先生　　時田少輔

（直目付林良輔の書）

呈寸楮候時田よりの呈書奉完璧候御落手可被下候馬關へ御越一條申上候處貴兄御越之儀に付萬端深重無御疎事と被思食別段御直に被仰聞候儀に不能との御事に付篤と御含被成無御疎御盡力可被成候彌明朝御發靱可被成辰下御自重爲國奉專禱候恐々頓首

閏五月初三

小五郎樣　　良輔

（桂の書翰抄）

各位御揃御壯榮御精勤奉恐賀候弟も昨夕着關折柄條公御附土方楠左衛門なるもの上國より下り掛け罷越上國の模樣も甚不面白乍恐朝廷も御微力にて今日御一定と申邊之思召も不被相窺諸藩々征長のとゞめも今日征長と申事にては條理不相立一應從朝廷至當の御處置被仰出其上服從不致節は罪をならし天下へ公然と號令を下し征討有之度などゝ申位の事にて其處置と申說もどの口より傳承致し候ても何れも決して不被折合事而已どの道行詰は進か守かの二ッに有之候處元より輕易には不被相進候得共兎に角今一應屹と大難は來り候覺悟に無之ては不相叶何れ一大變動にはどの道可立至樣に付薩上國詰のものも甚掛念の趣に付今度急に歸國大島等へ早々上國を促し候次第に付大島來十日前後蒸氣船にて來關致し弟に面會致し度に付是非馬關へ出浮吳候樣との事に付土方も長府迄出掛弟出關の趣を聞於馬關相待居候次第に付筑行は一先見合來關之上は大島へも可疑之ヶ條を擧げ屹度督責仕見度肥後も中々手を盡し是非征討無之ては不相濟との決談に付餘程力も盡し彼横井なども手を廻し居

候趣彼等も雖姦元より尋常人には無之事に付油斷も不相成何分にも對敵の說は御決定有之定て昨今には岩公も御出山と奉存候然る上は早急御三末樣にも御出浮被爲在片時も速に御決議被爲遊候て御家來中諸隊へは不及申御國內へ布告肅然と覺悟相定め御指揮を相待候樣御處置有之度左候て岩國御出浮之上は姦魁の御處置迅速に御手被下進退事等も早々相運び何卒御國內の人心惑を解き方向相定り候御處置偏に奉祈候自然萬一も岩國御出山の機を失し候ては百事瓦解御盡力之程是非々々奉仰候彌岩國も御出山に相成候得ば御三末方へも速に御出浮被爲在候樣被仰進度奉存候

上國之次第も前條之通に付御手當事何分にも速に御運に相成候樣奉祈候小銃も早速手に入れ候事無覺束長崎に長きミネー千挺程は有之歟之由左候得ば差向此分丈け御求に相成候ては如何哉先日御決定に相成居候丈之分は相詳置候はゞ何れの日歟參り可申候長崎有合之分丈けは御拂下げに相成候ても速に八ケ可申歟と奉存候（閏五月五日夜）

（政府員の答書）

御表書奉拜見候彌以御剛健被成御滯關奉珍壽候土方楠左衛門此度上國より下り掛御相對相成候趣委曲承知仕候薩藩大島事明十日前後蒸氣船にて上京之砌其御地罷越老兄へ致御面會度念願有之由にて太宰府行は一先御見合相成り右御相對之上彼藩可疑事件屹度御督責被成候上彌可信趣に候はゞ此內預御示談置候通程克御應接可被成置申も疎に奉存候岩公にも過る六日御出山被爲在未だ爲何御議論も承知不仕孰れ以往待敵其外御處置振確乎御不動有之度就ては御三末樣にも御一同御評議相成候樣との御事にて既に君側より御使被差越決して近々御出山と一統相待居候今日御國內御手煩之根基は如命姦魁之御處置にて實に差急事と相考無疎詮議仕候小銃之事は此內村田藏六より靑木群平其外迄申越候通不取敢長裝條銃千挺崎陽に於て御買入相成度其餘之處も何卒早々御手に入候樣是祈候大島へ御相對相濟候得ば薩筑國論上國邊以往之形勢も略相知可申事と相考何邊早々御歸山奉待候右爲御答如斯御座候恐惶謹言（閏

月九日）

（村田藏六の書翰抄）

筒一件此間長岡精介へ相託し青木群平を長崎へ遣し裝條銃千挺丈け差當り取寄尙又引續て買得可仕候樣申談相成候尋常手銃之儀は和蘭へ直に注文不仕候ては山背香港邊にはとても無之と存候（閏五月十日）

（伊藤の書翰抄）

良馬誠之助兩人上京之節蒸氣船買求之儀及談判候處何邊盡力仕候て被行候事に候へば良馬歸關可仕と約束仕置候（傍書に（蒸氣船買入に付名を借り候て相求候等の事は狂介も至極同意仕居申候）最上京直樣及示談一左右爲報知兵庫邊より船一隻雇候て事情精敷可申越に付其節船賃等當地にて拂渡吳候樣申事に付右之義も約束仕置申候書狀は賢臺と私へ當差送可申と申居候（六月二日）

（木戸の自叙の要旨）

歸國して見れば前日敵視せしものり薩な今や五卿を保護し長州は怨を懷て孤立す長州今日一致して我主公を戴く五卿にして苟も其起居に安んぜざるあらば全國の力を盡して之れを長州に迎へざるを得ず因て衆に謀り後藤深藏に托し一書を條公に呈し安危を問ふ（後藤は土州人にして當時遊擊軍の軍監なり）條公の答に薩藩の近情前日に異なるものあり彼れ善を爲すも曲て之れを疑惑する時は却て前途の事に困難多からん但し我等の志は彼れの向背によりて變せざるは固よりなり降心すべしとの意を示さる因て漸く安心せしも猶甚だ疑ふもの少からず其後土州人阪本龍馬石川誠之助等も長州に來り桂等に薩長和解の事を促す前年天王山の役兵士弓銃刀槍を混用し其大不利を知れるを以て今や機に乘じ兵制を一變せんと欲し其利害を參政山田宇右衛門にも謀り大村益次郎を拔擢し軍事を改正せしむるの際にして小銃一萬餘挺を買求するの要あり因て龍馬等に說くに現狀を以てし長州四境皆敵而して薩州天下の爲め我を容れんとすと云ふ兄等の言果して眞ならば薩名を假り小銃を長崎に求めんと欲す如何と龍馬等之れを諾す終に井上聞多伊藤俊輔を長崎に遣り小銃七千挺蒸氣船一隻を買得した

り

顧て薩藩の意向如何を察するに長州再征は其贊せざる所にして尾藩と相和して之れに反對し幕府の既に事を共にすべからざるを看破し別に旗幟を建て王事に勤めんとし嘗て西郷等と稍〻其趣を異にし寧ろ佐幕に傾きし大久保市藏まで此方面に進路を取るに至れり隨て小松以下諸首領は長藩と舊怨を解かんとするの傾向を生ぜり此年三月朔日薩藩士吉田清右衛門岩國に至り在京の老臣小松帶刀の書を吉川氏に呈し再征の擧は尾薩の贊せざる所なることを告げ兼て上國の形勢を詳報す是れより先き吉川氏は二月二十二日家臣横道八郎治森脇一郎右衛門を京攝に派す三月五日横道等伏見に着し薩藩士高崎兵部に面し告るに宗藩内訌鎮定の狀を以てし寛典の處分を斡旋せんことを請ふ高崎語るに上國の形勢を以てし再征は薩藩の贊せざる所にして毛利氏の爲めに盡す所あらんとするの意を陳ぶること略吉田清右衛門の云ふ所と同じ當時高崎は横道等に示すに將軍上洛の勅諚を以てす横道等其謄本を携へ其月十九日岩國に歸り之れを報ず四月に入



り幕府の再征の師を起し將軍の進發を布告するや在京の薩藩士吉井幸輔稅所長藏等之れを藩地に報じ西郷吉之助大久保市藏等の上京を促す五月二十三日大久保先づ發し閏五月九日京都に着す大久保の着京に先ち京都の薩邸は五月下旬岩下佐次右衛門をして大坂より汽船蝴蝶丸に駕して國に歸り西郷等の上京を促さしむ偶〻入京して邸内に潛伏せる石川誠之助土方楠左衛門之れに伴ふ土方は將に太宰府に歸らんとし其途次閏五月三日彥島の福浦に上陸し馬關に來る將に桂に面會して時情を報じ相謀る所あらんとせしなり是れ恰も阪本龍馬が太宰府より馬關に至り均しく桂に面せんとしたる際とす土方の桂に面するや西郷等の此月十日前後汽船馬關を過ぐべきを告げ止りて會見せんことを勸む桂之れを諾す岩下等は月六日鹿兒島に着し使命を傳へ其十五日西郷と共に鹿兒島を發し馬關海峽を過ぎずして日向海より海路直ちに上國に向ひ石川獨り佐賀の關より別れ一たび馬關に來り桂等と會見し尋て阪本と共に亦上國に向へり（西郷傳及び同天實記參照石川は昨年の京變には我軍に加はり其後五卿に附隨し京坂にも赴き形勢視察等我が爲めに盡す所少からず因て旅費等時に我より補助せしことと書輸類中に散見す）阪本至り土方至り石

川至り均しく薩藩の事情を漏らす而して桂高杉井上伊藤等之れと晤談す兩藩融和の端緒は實に此時に掀まり銃砲汽船購入の議は實に之れが實行の開卷たりしなり

（小松帶刀の書翰）

一書拜呈仕候餘寒未退兼候得共先々御勇健被爲成御座奉雀躍候然ば此内は浪華迄兩君御差出御懇志之御挨拶等被成下誠以恐縮之至り奉存候乍延曳深く奉謝候且御宗藩御處置之儀は兼て盡力の形行は追々申上候通り安心罷居候處計らずも此節關東表にて存外なる御達に相成驚入次第に御座候併此儀は御誓約も申上候通にて精々盡力仕候て天下之爲人心居合之御處置無之ては不相濟事に御座候間既に御達しには相成候へ共總督府にても第一御不承知御申立之儀も有之候に付迚も此節之御達通り被行候儀は有御座間敷候へ共自然御傳聞に相成候ては如何思召も不被量其上御一統人心紛擾之程も如何と奉存候付一先形行申上候間吉田清右衛門へ事件申含差上候間御聞取被下候て可然御盡力可被下候先は此旨早々爲可申上呈愚札候尚追々之模樣可申上候誠惶頓首

二月二十一日

小松帶刀

呈

岩國賢公閣下

（廣澤の書翰）

芳翰奉謹讀候彌以御壯健被成御起居奉賀候扨如命薩周旋一件に付ては則左之通四境相迫るに隨ひ兎角畏縮より出る說ならんか

薩州小松帶刀西鄕吉兵衛等御當家之儀に付周旋盡力仕候樣子に御座候處是迄岩公より御内々御賴に相成り御手を被就置候得共此御方情實委細通じ兼居候樣に相見へ申候付兩君公御内慮之處岩公より小松西鄕等へ改て被仰入被下候樣被成御賴尙又小松西鄕も萬一内輪において嫌疑共有之候ては難堪次第に付御彼方君公迄徹上仕置候得ば小松西鄕等も内輪掛念無之公然盡力可相成歟との書面侍御史より政府へ持出其節十分に老兄にも御同意之樣相咄節角如何之

事に候哉被相考候得共先達條公へ御呈の趣も承知仕居多分意味不通にて可有之兎に角薩へ兩君公より改て御賴被申筋は不可然當今彼藩種々之取沙汰も有之候得共實否不分明にて手を下し還て情實齟齬仕又候如何體之御國害出來も難計何分にも御差止可然と斷然相決置候薩迚も實に神州之御爲盡力仕候得ば我藩においても私怨を以十口申筋無之段は勿論之事と相考候得共卽今之艱難を相凌んため手を下候樣には決て相成申間敷矢張是迄之御親因之處を以御附合相成り可然事と奉存候尤彌皇國之御爲周旋仕事に候はゞ其節に至り御取計振も可有之其内之處は行形之通岩公より之御賴之筋にて可然奉存候併如命岩公よりは何と歟御挨拶振有之度老兄御書面之趣を以兼て御議論之侍御史迄篤と相達御彼方御用人へなり共氣を附候樣旁可及示談候先は略貴答迄に如此他は拜青萬可申上候頓首

五月二十八日

桂小五郎殿

廣澤藤右衛門

（石川誠之助より板垣退助に寄せたる書翰抄）

兩藩（著者曰く薩長を謂ふ）實地に運び候は全く戰爭の功にして卓見家の事業如此自今以後天下を興さん者は必す薩長兩藩なるべし吾思ふに天下近日之内に二藩の命に從ふこと鏡に掛けて見るが如し他日國體を立て外夷の輕侮を絶つも亦此二藩に本づくなるべし

## 要略一覽

官制改革後（五月七日以降）より翌年の四境戰爭（六月七日）に至るまでの職員を列記し以て參照に便にず

國政方引請

毛利筑　前丑五、七、任

鈴尾駒之進（丑閏五、四見習）

國用方引請

志道安房（丑五、七任丑十廿一、免）

毛利筑前（丑十、廿一、兼）

用談役

桂小五郎（丑五、廿七、（心得）丑六、廿四、任）

手元役

山田宇右衛門 丑五、九任
玉木文之進 丑、六、十四兼 寅二、十二免

藏元役

玉木文之進 丑五、七任 寅二、四免
山縣彌八 丑五、七任
北條新左衛門（始め北條溜兵衛）丑、五九
柿並市太 丑五廿三任
國重德次郎 丑五、廿九、任
高杉和介 丑九、廿三、兼
前原彥太郎（佐世八十郎）丑十二、十四兼

玉木文之進 丑五、十一、兼十、二八免
北條新左衛門 寅二、（寅四、二三八任（伊勢と改姓）
渡邊伊兵衛 丑、八、三、參 寅四、二轉
兼重讓藏 丑六、十四、參
山田宇右衛門 丑九、二四任十、二八免
山縣九右衛門 丑五、七任
正木市太郎 丑五、七任
中島市郎兵衛 丑五、九任 寅六、二轉
久保松太郎 丑五、廿三、任
桂小五郎 丑九、廿四兼
山田七兵衛 寅正、廿八、現除任



用所役

山田宇右衛門 丑五、七任
兼重讓藏 丑五、六任 六、十四兼
廣澤藤右衛門（兵助）丑五、六任
前原彥太郎 丑五、六任
中村誠一 丑五、九、任
藤田與二右衛門 丑五、九、添任
馬屋原右兵衛 丑五、十三添（軍政） 寅四、二、轉
上領九郎兵衛 丑五、十三添（軍政） 丑六、九轉
村田藏六（大村益次郎）丑五、廿七（軍政） 寅四、二、現除
渡邊伊兵衛 丑六、十三兼 寅四、二轉
秋村十藏 丑六、十三兼 丑八、廿八免
中村文右衛門 丑閏五、七兼 寅四、二轉

渡邊伊兵衛 丑五、七、任 四寅、二轉
秋村十藏 丑五、九、任 六、廿八、免
中村文右衛門 丑閏五、七任 寅四、二轉
兼重讓藏 丑六、十四、任 丑九、廿六轉

太田市之進丑九、四任
石川小五郎（河瀬安四郎）丑九六任
高杉和介丑九、六任
野村彌右衛門丑九、九漆
國貞直人丑九、二六任
桂小五郎丑九、廿四兼
兼常剛之助寅四、二任
赤川又太郎寅四、十八任

直目附

杉孫七郎（德輔）　竹中織部丑六、廿二免
柏村數馬　木梨彦右衛門（椙原治人）
林良輔丑五、廿八命

## 第九章　慶應元年秋期の大勢

支藩主召致の頓挫○防長士民の歎願書○將軍上京○征長勅許に關する諸侯諸卿の意見○將軍參内○大久保一藏○征長の奏聞○勅答○外國艦隊の兵庫入港○外國使臣の要求○有司の應接○會津藩士の激昂○一橋慶喜の下坂○大坂城中の會議○一橋の歸京○福山松前二閣老の免職○大坂城の再會議○將軍辭職の決議

幕府既に毛利淡路守吉川監物に上坂の命を下し八月十八日更に藝藩をして二人若し病を以て命に應ずること能はざるときは毛利左京亮毛利讃岐守をして宗藩老臣と共に九月二十七日を期して上坂せしむべきの旨を傳達せしむ爾後二人上坂を辭するの書及び長藩老臣幷士民の歎願書大坂に達し支藩主を召致するの難きこと分明にして九月二十七日の期亦既に切迫し加ふるに外國軍艦將に兵庫に集合し重大の要求を爲さんとするの狀あり是に於て幕府は先づ長藩再征の勅許

を得んと欲し九月十二日所司代松平越中守定敬をして奏せしむるに先きに防長の處置に關し奏請する所ありしを以て近日將軍上洛し親しく天機を候すべきの旨を以てせしめ十五日將軍大坂を發し淀河を溯り其夜伏見に次し翌日京都に入る然れども直ちに二條城に入り疾と稱して朝せず蓋し將軍征長の勅許を得んが爲め上京せんとするの報京都に達するや近衛内府忠熙正親町三條卿實愛等は再征を以て非と爲し又一橋慶喜松平肥後守容保松平越中守は二條關白富敬尹宮朝彦親王に依り將軍の奏請は盡く勅許あらんことを請ひ其事未だ決せざるが爲めなり而して十四日の朝議將軍參内の日直ちに奏疏を天皇に上り關白以下兩傳奏小御所に於て將軍及び一橋慶喜松平肥後守松平越中守諸閣老に會して討議すべきに決せり既にして二十日再び朝議を開くや一橋慶喜松平肥後守松平越中守亦參内して再征の兵を長藩の境上に進むることを主張す反對の諸公卿之れを拒み兵を動かすは國家の大事なるを以て宜く諸侯を京都に召集し其可否を議せしめ衆議之れを可とするを待ち將軍に賜ふに節刀を以てし天下と共に兵を進むべきなりと論ず慶喜等固く執て從はず今將軍既に再征の師を興し自ら進發するの日に於て諸侯を召集し更に其可否を議すべきに非ず且衆議若し之れを非とせば將軍は唯空しく歸東の途に就かんのみ將軍一旦歸東せば今後朝廷自ら長藩を處分せざるべからず果して然らば朝廷は其措置を如何せんとするやと廷議之れを奈何ともすること能はず遂に幕意を容るゝに決すと云ふ是に於て翌二十一日將軍參内す薩藩大久保一藏尹宮に謁して曰く再征の擧たる其名明かならず諸侯概ね之れに反し尾越津薩四藩の如きは嘗て既に此意を以て幕府に建言せしも幕府斥けて用ひず以て今日に至れり今にして强て兵を進めんと欲するも諸侯誰か命に應ぜん四藩の如き固より一兵をも出すこと能はざるなり朝廷若し幕府の請を容れ將軍の進軍を許さば勢必ず異議の諸侯に負はしむるに朝敵の名を以てせざるを得ざるに至らん事誠に重大なり今日の奏請斷じて勅許ある可らずと一藏又關白に謁し更に其意を陳し言論頗る激切にして容易に退かず是を以て關白の參内大に遲延し將軍は空しく施藥院に在りて之れを待ち慶喜以下三侯は使を關白に馳せ其參内

を促せり一藏尚關白の邸に在り使者障を隔て其談論を聞くと云ふ關白遂に一藏の說を容れ參內して進軍の非なるを言ふ慶喜之れを聞き大に憤りて曰く將軍參內の日に當り一夫の議論を聞くが爲めに參內の時刻を愆り且其劫す所と爲り輕しく朝議を變するが如きことある可らず誠に斯くの如くならば將軍以下皆其職を辭するの一途あるのみと關白沮むこと能はず爲めに議遂に將軍の奏請を容るゝに決せりと云ふ（續再夢記事參照）將軍乃ち天皇に謁し再征の事を奏す奏疏に曰く

防長處置の儀に付ては兼て奏聞仕候通り條理順序を追ひ不審之件々篤と糺問之上夫々處置可仕と奉存毛利淡路吉川監物大坂表へ早々罷登候樣申達候處登坂及延引候に付自然兩人差支候はゞ外末家幷大膳家老共之內申合當月二十七日迄に無相違出坂候樣重て申達候得共今以登坂之模樣も無之此上彌背命に及候はゞ最早寬宥之取計も難仕候に付無餘儀旌旗を進め罪狀相糺可申と奉存候尤兵機緩急其外篤と熟考之上遺算無之樣處置可仕と奉存候此段奏聞仕候以上

家　茂

天皇乃ち勅答を下し將軍に賜ふに天盃幷に太刀陣羽織地を以てす勅答に曰く

言上之趣被聞食乃賜御暇候猶長州一擧相濟候はゞ御用之儀有之に付早速上京之事兼て被仰出候

二十二日將軍京都を發し大坂に歸る二十五日大坂より急使を京都に馳せ將軍の親書（國家重大危急存亡之事件差起り候間下坂可被致候とあり）及び閣老の書（事實絕言語候間傳奏衆へ屆之儘御下坂可被成候事とあり）を一橋慶喜に傳へ重大事件あるを說き之れをして速に大坂に來らしむ所謂重大事件とは外國軍艦攝海に入り條約勅許兵庫先期開港海關稅改正の事を要求せしもの是れなり

安政五年の江戶條約は千八百五十九年七月四日（安政六年六月）を以て神奈川長崎箱館を開き千八百六十年一月一日（萬延元年十一月）より新潟或は之れに相當する西海岸の一港を開き千八百六十三年一月一日（文久二年十二月）より兵庫を開き又外國人居留の爲め千八百六十二年一月一日より江戶を開き千八百六十三年一月一日より大坂を開くことを規定せしに其後攘夷論の盛なるを以て文久二年幕府は使節を外國に差遣し告ぐるに兩都兩港開市の延期を以てし其承諾を得兩都兩港は千八百六十三年

一月一日以後五ヶ年を延期し千八百六十八年一月一日慶應三年十二月を以て開くべきに決せしも英佛二國は當時の覺書に於て各〻要求の條件あり且つ幕府若し條約の規定を確守せざれは直ちに以上の延期を廢消すべきことを約せり既にして幕府は鎖港談判使節を歐洲に派遣せりと雖ども其事固より行はるべきに非らず馬關戰爭後に至りては英佛米蘭公使等は横濱に會合し幕府に告ぐるに將軍の爲めに謀るに條約勅許を京都に請ふの好時機は今日に在りと云ふの意を以てせりと云ふ幾も無く新任英國公使パークス來任せりパークスは英佛聯合軍支那進入に關して其名を顯はし上海領事より本邦駐劄公使に榮轉し上海より直ちに來任せり彼れは本國政府より日本にして若し大坂兵庫開市開港の期を短縮し條約に勅許を得及び百分五を標準として海關稅率を改定せば馬關償金は其三分二を寬恕せんとの訓令を受けたり彼れ資性慧敏にして勇邁の氣に富めり彼は我國と外國との條約關係をして荏苒舊形に彷徨せしむることを欲せず而して又支那に人と成り漢文を解し東洋の事情に通じ日本の主權は天皇に在りて幕府は其實天皇の屬臣たるに過ぎざることを看破せり隨て其眼光は寧ろ京都に注げり（パークス以前の外國使臣と雖ども亦既に稍〻之れを悟りし者なきに非ずと雖ともパークスに至りて殊に能く之れを洞看し此見地よりして其外交手段の活用を試みたり將軍に對するに陛下の稱を以てせしを改めて殿下とせしは實にパークスより始まると云ふ）且つ長薩中反て開國論者あるを見て長薩反て相共に謀るべしとの念を發せり彼れは條約勅許を幕府に迫り幕府にして之れを得ること能はずんば直ちに之れを京都に請ふべしとの說を爲し頻りに佛米蘭使臣に說けり佛國公使ロッシオン、ロッセは寧ろ意を幕府に寄するの人なり佛帝拿破翁三世の意亦此に在りしなり然れども通交貿易上の利害は則ち英國と異なる所なし故を以て佛國公使亦英國公使に贊同し米國公使蘭總領事之れに加はり遂に將軍の大坂に在るに際し艦隊を率ゐて大坂に赴き英國政府訓令の趣旨を以て幕府に迫るに決し九月十三日軍艦九隻（英五佛三蘭一）舳艫相接して横濱を發し十六日大坂灣に入り錨を兵庫附近に投じ翌十七日書を閣老に寄せ條約勅許兵庫開港海關稅改定の事を要求し幕府にして之れを果さずんば上京して朝廷に請ふべしとの意をも記し一週日を以て決答の期と爲す幕府大に驚く是れよりして幕府の有司英佛使臣等との間往復織るが

如く幕府は辭を設けて一時の急を遁れんとし使臣は此機を逸せずして其志を果さんとし英公使最も急迫す在京の一橋卿松平肥後守の俄に下坂を命ぜられしは之れが爲なり外國軍艦來迫の報京都に達するや會津藩士は陸續大坂に入り外臣の要請誓て允す可らず彼若し京都に暴進せば死力以て之れを防止すべしと主張せり蓋し會藩は防長に對し幕府と其執る所を同くするも外交に關しては攘夷の氣熾にして幕閣の爲す所を屑しとせざりしなり一橋は二十六日暇を關白に請ひ肥後守は暇を賜はらず京都を發し道にして復た大坂の急使に接す曰く德川玄同小笠原壹岐守等上京して陳述する所あるべきを以て下坂を要せずと一橋事體の容易ならざるを察し且つ既に途に在るを以て其行を止めず翌平明大坂に入る時に大坂に在りては有司外國使臣の急迫に堪へず其請を允すに決せり一橋の至るや有司其實を告げ且つ曰く勅許は容易に得べからず而して外使の要求は急激なり會藩士人は激昂せり速に事を決せずんば事態の變測るべからざるものあらんとす故に遽に此議を定め一面玄同壹岐守の二人を京に遣り之れを奏請せしめ一面松前閣老をして之れを使臣等に傳へしめんとせりと一橋聞て大に驚き以爲らく是れ戊午の覆轍を履むものなりと直ちに玄同壹岐守を途中より召還し再び閣老以下諸有司を城中に會し大に議する所あり一面外國公使等に對しては決答更に十日間を猶豫せしめ一面將軍自ら入京して勅許を請ふに決し而して一橋先づ自ら入京して之れが素地を爲すに力むることを約し二十九日慶喜京都に歸り關白に告ぐるに事の顛末を以てし且國事掛諸卿に事情を陳す幕府有司の爲す所京都に聞ゆるや朝紳の憤慨殊に深く此日朝議閣老阿部豐後守松平伊豆守の官位を褫き歸藩謹慎せしむべきの命を幕府に下せり其擅斷を咎むるなり在坂閣老命を得て大に驚き諸有司を會し將軍の前に議す說を爲す者あり曰く朝命を以て閣老を貶黜するは未だ曾て有らざる所にして今始めて之れあり事既に此に至る將軍の職權を褫くと何ぞ異ならん天下の事豈復た爲すべけんや將軍唯宜く速に其職を辭し東歸すべきのみと衆之れを贊し將軍其議を容る是れ實に防長に在りては支藩主大坂召致の幕命を辭し井原主計宍戸備後助が將に大坂に至らんとして其途に上りし時なりき

# 第十章　慶應元年秋期の毛利氏

德山侯吉川監物上坂の幕命○四末家の山口集會○幕命拒辭の藩議○德山侯吉川監物上坂辭退の陳情○宍戸備前の藝州行○諸隊士の陳情○清末侯の國境巡見○世子の德地室積巡見○長清二侯及び老臣の大坂召致の幕命○德岩兩家歎願書の却下○太田高杉桂伊藤等の進退○長清二侯上坂の辭退○井原主計上坂の命○財政軍制の改革○待敵準備○馬關統一論○雜事

慶應元年七月德山侯及び吉川監物上坂の幕命既に藝藩に達し其二日藝藩先づ密に植田乙次郎を岩國に遣り之れを告げしめ其九日更に使者を岩國德山に遣り幕命を傳へしむ報山口に達す公幕命に對する藩議を一定せんと欲し再び三支侯及び吉川監物を山口に召す

浦日記當日の條に廉書と題し左の記事あり蓋し當時の藩議ならん

廉書

今般待敵の御處置に於ては陸軍を以戰守被仰付候條兼て其覺悟可致置候事

賊兵四境に相迫り候時彼使を遣し詰問致候得ば條理明白辨解するは勿論之事に候然ば彼不承服御國内に攻入候節は無二念決戰候事

彼若し詰問に不及直に攻來り候共於御國外戰爭之儀は嚴禁候事

戰端相開候後は應兵之利不利を以和議之論談等嚴誡之事

戰爭相始り候より御親藩之使來り候時は御國境にて先應接し速に其旨趣申出づべし尤疑敷者は直に相斷候て不苦候事

十四日岩國の使者今田靱負鹽谷鼎助山口に來り述ぶるに吉川監物が長府清末の二支侯を措きて上坂するを欲せず之れを辭せんと欲するの意を以てす公更に監物を促して速に山口に來らしむ清末侯は二十日德山侯及び吉川監物は二十二日を以て山口に來る長府侯疾を以て來會すること能はず嗣子宗五郎公子をして代り來らしむ公子二十日を以て既に山口に着す二十三日二支侯吉川監物及び宗五郎公子共に公及び世子に謁す公幕命に對し意見を問ひ公の意支侯及び吉川監物

召致の命は之れを辭するに在ることを示す

（吉川周旋記）

大膳樣より被仰聞候趣は此度之幕命不容易次第にて爾來色々勘考候得共所詮治定も難出來大に致苦心候何分にも其方共の了簡振如何可有之哉無遠慮可申聞樣にと被仰聞候處淡路樣御答に誠に此度之儀は重大無此上御事件にて私共治定難出來殊に不才の私中々以罷出御辨解仕候儀は實に其器に無御座と恐入罷在候萬々一も御召通り被差出候御治定に相成候はゞ申も疎に御座候得共御辨解之廉々無御腹藏被仰聞巨細承知不仕候ては彌難罷出奉存候と被仰上候處監物には如何と御尋に付殿樣御答に實に重大之御事にて定て諸藩よりも此度は如何之御受に相成候哉と致注目居候事故御正義御名分相立候樣之御治定第一之御事と奉存候御達後も夫のみ憂慮仕居候迄にて何も御思召を遵奉し進退仕候心得に御座候と御答被仰上候處大膳樣被仰候は此方存付可申聞と有之仰に此度御召之儀は幕之不條理にて中々上坂は致し苦敷譯と父子に於ては致決



心居候と被仰聞候に付殿樣被仰上候は御思召御尤に奉存候得共折角御召出之處遮て御斷被申上候ては御條理如何可有御座哉何分此度之儀は御名分相立諸藩も感服仕候樣御處置第一と奉存候樣被仰上候處一々尤に候此處大に苦心致居候何分一統篤と熟考之上可致再議と被仰聞云々

二十四日德清二侯吉川監物宗五郎公子德山侯の旅館に會す監物議して曰く幕命に對しては唯公と世子との意を遵奉し敢て別意を挿まずと雖ども而も若し順逆の理を以てせば先づ命に應じて上坂し飽まで事理を詳悉し藩情を辯明せしむるに若かず唯其人は則ち予輩の敢て當る所に非ず宜く適材を選ぶべしと乃ち此意を書し翌二十五日之れを公に上る二十六日公世子と共に特に監物を召見し公の意は監物等の上坂を辭するに在ることを告げ監物の意見を徵す監物答ふるに別に見る所なきを以てす

（吉川周旋記に記する所當日談話の狀況）

御見込之所御書面にて被差出於父子も大に致滿足候乍去書外定て深き了簡も

可有之候間何卒無遠慮被申聞候樣にと被仰聞候處殿樣先達て以來申上候通何ぞ了簡も有之事機分明に見据候事に候得ば仰迄も無御座可申上儀は勿論に御座候得共此度之事件は實に御思召を遵奉仕候外愚存更に無御座候處書面にて可差出と被仰聞候故差向見渡候處を書認候迄にて實以見込無御座候と被仰上候得ば大膳樣仰に此度之儀は何も監物之了簡に有之事にて罷出候方可然と被存候得ば隨分可差出候得共於父子は差出候ては如何にも不安心に相考夫のみならず此度再討を被仰出候儀は兩國一統疑惑を生じ居候事故若上坂被申時は其方家中は不及申兩國人民擧て相氣遣決て不折合之事にて必三四萬人位は脫走にて致警固候樣にも可立至其期に臨み候ては於父子迚も取押等も難出來遂には又々如何樣之變動を釀出候哉も難計夫にては兩國は不及申第一皇國之御爲にも不相成候得ば此度之所は何卒兩國人心精々致鎭定候上にて罷出候間夫迄之所暫御猶豫被申候樣にとの大旨を書面にして御斷申出候ては如何可有之哉尤監物之了簡次第にて外に良策も有之候はゞ兎も角も委任可致と被仰聞候に付殿樣只管御恐懼之御挨拶被仰上御思召之程偏に遵奉可仕候迫々御書面拜見仕り何ぞ愚存も御座候はゞ可申上猶御意之趣長德淸へも被仰聞候樣にと被仰上候得ば大膳樣仰に何れ三末へも可申聞候得共其內爲勘考申聞置候間篤と三思を被加候樣にと被仰聞候事

二十七日德淸二侯吉川監物宗五郎公子共に公館に上り執政老臣と議する所あり尋て相携て公と世子とに謁し所見を陳述し遂に上坂の幕命は之れを辭し藝侯に賴りて幕府に陳情するに決す

（執政老臣の書）

今般御尋之趣被爲在大坂表被召寄候段藝州樣より御取次を以て御達に相成候就ては早速御上坂可被爲在御事に奉存候然る處去秋京師に於て三家老之者御父子樣兼ての御申付に背令暴動奉對天幕誠以不一形奉恐入候次第に付御父子樣不被知召御事とは乍申兼ての御示方御不行屆にも被爲當候付屹度御恭順被爲盡御官位御稱號等被召上儀をも尖に御請被仰上猶又益田右衞門介を始三老

臣幷參謀之者夫々被處嚴科御詫被仰上就ては尾州大納言樣御陣拂をも被仰渡御國內一統難有鎭靜罷在候處其後役方之者不取計よりして少々爭鬪にも立至り候付早速御父子樣を初被仰合精々御鎭撫被爲在漸一和之方に向ひ候得共直に御指揮不被爲成候はでは御主意徹底仕兼候儀も有之不被爲得止御蟄居中ながら御巡撫之爲御廻郡をも被爲成山口は御領內へ指揮方便利もよろしき場所に付暫御滯在被成其節早速御屆をも被仰上置候通り畢竟御父子樣御恭順之御誠意被爲貫度思召より差起り候事に御座候尤も前段爭鬪之次第は全以外向へ相拘り候儀に無之に付此餘は疾御寬大之御沙汰可被爲在御事と而已只管奉渴望居候處先達て以來仄に承り候得ば不容易企有之との御事にて御進發被仰出候御樣子右根源は何等之事件より事起り候哉と闔國驚愕苦心罷在候折柄此度御達之趣に付ては彌以人心疑惑安堵不仕素より御尋之儀は條理明白御辯解も可被爲就候得共唯今之形勢にては急速御上坂と相成候時は御國內如何程事體出來も難計誠以不容易心配罷居申候就ては萬々奉恐入候儀には候得共前斷無據譯柄被聞召分於藝州方何とか御取扱振共は有之間敷哉一先御役方樣へ御周旋方御依賴被爲就度此段於私共一統奉懇願候

案ずるに當時八木龍藏石川誠之助が京坂より桂小五郎に送りし書は長藩の議と暗合せり六月二十七日發八木龍藏の書に曰く抑此度橋會が腹中を察候に幕府最初の如く暴に致し候得ば直を御國に歸し曲は我に在て天下不服(中略)幕府の衰滅眼前に候間一橋深く姦計を廻らし兩御別封を召上し否とならば曲を御國に歸し諸侯に令して再討可致御上坂に相成候得ば十方溫言を以てたぶらかし自然御國の內和を破り英氣を挫くの策にて候(中略)右之模樣に候間何卒深く御勘考被成御別封方御上坂は如何樣とも名分を被成御立候はゞ御止に相成橋會が姦計を打破りて幕府の水火中に不落入御策略皇國の御爲願敷存上候云々其翌日發石川淸之助の書に曰く或人察して曰此令を出して聞かざれば天命を請ひ諸藩の兵を募て討つなるべし其時は如何西鄕吉之助曰恐るゝに足らず此の處にてうかと上坂しては必ず幕の逆威に被壓正論腹に在れども口に出だす事不能若し口に出せば直に罰あり如何にしても失策なるべし且つ又藝州を中に入れたと云ふが宜い事に付之を媒として談判を御濟し被成候方可然云々と此後誠之助は八月七日山口に來り世子に謁し上國の形勢を陳ず世子其勞を慰し之れに金幣を賜へり

八月朔日宍戸備前に命じ陳情の爲め藝藩に使せしめ松原音三小田村素太郎等に隨行を命ず三日諸老臣の請に因り二支侯吉川監物宗五郎公子共に公子の旅館に會す諸老臣二通の議案を出し其意見を問ふ要は幕命を辭し藩志を固くし兵器を整へ以て非常に備ふべしと謂ふに在り支侯以下皆之れを贊す議案に曰く

(其一)

此度御上坂急速難被爲成原由は闔國人心疑惑より差起り人心疑惑之原由は再討風聞中御召寄に付ては糺問之上廢立削封等被仰出候も難測との極意に有之候廢削等被仰出候ては御兩家に於て素より御請は被爲在間敷候處御請無之候得ば必然大坂表御拘留にも可立至候に付國中之紛擾は眼前に御座候左樣候得ば豫じめ右等之幕議を未發に打消候樣精々遂心配徐々幕府の御處置策略之次第をも熟察不仕ては容易に御進退難相成御事に御座候尤尋之儀御書付又は御使等にて被仰出候節は右條件に當り御答振明瞭可被爲成は勿論に候處此御度上坂猶豫之御願等に付ては御促し之御達も有之べく候得共前條之通幕府御處置振凡之見込相付不申内は何れ迄も何と歟御申譯を以御延引相成候外御手段は有之間敷億萬一幕府御處置暴斷に被爲出廢削等被仰渡候節は御支藩方は素より闔國一致幾重にも押返し歎願可仕候得共台聽蔽塞情實難通節は最早一同決死及防戰候外手段無之と私共一同談決仕候間尊慮之程奉伺置度に付何卒被仰聞被下候樣奉願候

（其二）

此度御兩家樣御登坂御猶豫之儀御願書被差出候付宗藩より宍戸備前爲演說藝行被仰付候就ては長府樣清末樣よりも同樣藝州へ御使者被差遣度御意に候

一右樣相成候得ば彌以御兩國御混和之御儀目出度被思召候御一和之事は御父子樣精々被仰聞候通にて以後は何も無御腹藏御政事向御氣付次第被仰上候樣一統御願申上候

一此度上方之模樣如何相成哉難測候得共何れ割據之形勢とは被察候左候得ば武備充實外其侮を禦候儀專要之御事と奉存候御支藩樣にも申上迄も無之候得共器械彈藥之御吟味處々關門之御取締士人町農兵に至迄調練御引立等第一緊要之御事と奉存候

公又親く清末侯に托するに石州方面の國境巡見の事を以てし手書を賜ふ其意有事の日侯を以て石州口の總督と爲すに在り

（手書）

異變之節石州境手當向諸事致委任候に付此度直樣彼地邊御巡見被成度候御陣屋地等の儀は後に遂詮議候樣役人共へ申付置候

同日毛利幾之進を以て遊擊隊總督とす（内訌後諸隊の大なるものには總管の外更に總督を置き門閥家を以て之れに任せり）時に對幕の藩議已に定るを以て德山侯吉川監物は四日山口を發し其邑に歸り清末侯は五日石州境巡見の途に上る九日清水美作の退隱を起し再び其家を督せしめ從前の老中資格に復す十一日德山侯の使者福間式部吉川氏の使者吉川采女等上坂猶豫の陳情書を藝藩に致す其文に曰く

今般御尋之趣被爲在候付登坂之儀御使者を以被仰渡候付ては早速發程可仕筈に御座候處尾州總督御陣拂後も恭順を旨とし謹で御寬大之御沙汰を而已奉待居候折柄不計御進發被仰出候哉之風聞有之士民共虛實をも不相辨驚愕不一方別て登坂之儀を承り候ては闔境之衆心安堵不仕一統抱疑惑候て只今強て發程仕候はゞ士民掛念之餘紛擾も難計と深痛心罷在候且年來痔疾幷癪氣不相勝候處此節別て相募難儀仕候旁に付ては千萬奉恐入候得共無據譯柄に付進退相窮候次第御垂憐被成下此節登坂之儀一先延引仕候ても不苦候樣程能御取成可被下候樣偏に奉懇願候以上

八月　毛利淡路

今般御尋之儀被爲在大坂表可被召出御沙汰之旨被仰達就ては早々登坂可仕筈に御座候處申談有之本家罷越候段先達て御屆申出置候通に御座候處此度御再討被仰出候風聞仄に傳承仕如何の御次第に可有御座哉と人心安堵不仕只今之形勢にて急速登坂仕候時は自然紛擾に立至るも難計左候ては却て奉恐入候次第にも成行可申哉と誠以て恐懼不過之憂苦之至に御座候加之秋暑之砌病中押て本家罷越候處爾來病勢相加はり難澁彌增に付彼此節發足難仕奉存候就ては萬々奉恐入候得共鎭靜之實効相立猶容體少々にても快方差向候迄は發足之儀御猶豫被仰付被下候樣奉願候右之次第何卒御汲取被成下可然御執成之程偏に奉懇願候以上

八月　吉川監物

宍戸備前亦七日を以て山口を發し十二日を以て廣島に着し上城して陳情の旨趣を陳ぶ其演說の手控と稱するものに曰く

今般御尋之儀有之毛利淡路吉川監物登坂仕候樣被仰出早速罷出御尋之趣拜承可仕儀は勿論に御座候然處先達て私共より末家中迄歎願仕置候趣定て御承知可被爲在不容易企有之との御事にて御再討被仰出候段仄に傳承仕實以驚愕之至只管苦心罷在候折柄兩人御召寄之儀御沙汰被爲在闔國之人心疑惑を生じ大膳父子日夜不安寢食謹慎中再び紛擾ヶ間敷事件自然差起り候ては天朝幕府へ奉對恐懼痛心此事に御座候素より御尋之趣は條理明白御答可申上候得共只今之形勢にて急速登坂と相成候時は國內之動搖無覺束御斷申出候ては彌以不相濟彼是苦心之至に御座候右人心疑惑之原由を申上候得ば昨年來父子謹慎恭順を盡し官位御稱號等被召上候儀をも尖に御請申上猶又益田右衛門介を始三老臣幷參謀之者夫々處嚴科御詫申上微衷聊貫徹仕候哉尾州前大納言樣を始御陣拂に相成其後無間於領內爭鬪之儀も有之候得共外向へ係り候譯にては無之爾來も彌謹罷在不遠御寬大之御沙汰可被仰出と奉待候處不圖も此度御進發の御樣子に付ては士民一統泣血悲歎に不堪固より僻境頑固之風習にて鎭靜方行屆兼畢竟不肖之私共不當其任慚愧之至に御座候得共右等之情實篤と御亮察被成下御隣藩御交誼不被爲捨置何と歟可然樣御周旋被成下度偏に奉懇願候尙淡路監物兩人よりも可申上候以上

八月

是時に當り諸隊は益〻激昂し防長士民の名を以て嘆願書を作り梅田三郎（石川小五郎）野村靖之助南木狂介吉田家祐中川文吾小野虎之允山田宇三郎森政茂三郎松本鼎三石光德三郎等俱に宍戸備前に先ち國を出で、廣島に至りて之れを藝藩に致し既にして山口に歸り謹濱して越境の罪を待つ政府其心事を察し特に謹慎を免す

（士民の歎願書）

寡君父子癸丑甲寅以來人心不折合上已上元等之儀種々出來此餘之禍變も不可

測儀と皇國之御爲深不堪掛念遂に建白をも仕り辱くも微志徹底件々不被捨置
御採用に相成彌增勉勵人心を鼓舞し抛身家御奉公申上候覺悟に有之候處不圖
も去る亥八月以來上京をも被差留候次第實に以其由る處を不知闔國之士民日
夜泣涕罷在候然處血氣壯年之者慨歎之餘り自から疑惑を生じ乍恐從來之叡慮
一定不拔之處奉窺上度尙寡君父子多年之心事哀訴嘆願爲可仕去秋に至り遂に
國內を脫走し恐多くも闕下近く罷出候者不少寡君父子不堪驚愕迅速鎭靜とし
て益田右衞門介其外差登し候處指揮不行屆よりして歎願之趣は通徹不仕却て
妄動に立至り天幕え之忠敬も殆ど堙滅之姿と相成東西藩邸をも被相毀官位等
被召放候と之御沙汰も有之闔國一統臣子之至情痛憤激切之至に不堪罷在候然
る處昨冬尾州老公御下向父子無他心事に御洞見右衞門介其外萬事御所置被爲
在御解散に相成仍之寡君父子積年之誠意も天朝幕府え明瞭徹上乍恐皇國大義
名分も判然相立遐陲僻壤に至る迄徹底仕最早平常之御沙汰可有之哉と上下一
統奉渴望居候處豈圖んや寡君父子外夷と密謀不容易儀相企候哉之事を以て再

び征長之兵浪華え屯集大樹公御上洛之由相聞闔國擧て思ひよらざる儀甚以奉
怨望候事に有之右樣之次第素より一朝一夕之事にあらず闔國人民日夜不堪憂
悶候折柄今般德山岩國へ御尋之趣有之大坂罷登り候樣閣下より御知達被爲在
候由に御座候處元來去秋京師變動よりして尾老公御下向夫々御所置被爲濟候
段閣下既に詳に御傳知も被爲在候御事にて其餘又候今般之御沙汰被仰出軍陣
旌旗之御場所へ御召出有之候就ては馬角之難責如何樣之御取扱も難計と人心
疑惑益增長臣子至情彌切迫萬一も右兩家登坂致候樣相成候とも國內一統物議
沸騰不可得止事に可有之左候ては天幕へ奉對殊に奉恐入候次第且父子誠意も
更に貫徹不仕候樣立至可申と恐懼此事に奉存候伏願は閣下上は皇國の御爲下
は隣交之情誼を以一片之微衷御垂憐を賜り前條之次第天朝幕府へ明瞭御辨解
被成下速に邦家安堵之御沙汰被仰出候樣御盡力被成下度闔國擧て不堪切願之
至候誠恐誠惶頓首再拜

丑七月

防長士民

十四日佐々木男也を以て右筆役とし現勤を除き南園隊總管を命ず同日清末侯石州境上巡見より歸て山口に至る翌十五日公之れを湯田別業に招き宴して其勞を慰す十九日世子山口を發し德地室積地方巡見の途に上る時に藝藩は既に宍戸備前幷に防長士民の嘆願書を得此日老臣野村帶刀をして之れを齎らし廣島を發して大坂に赴かしむ（帶刀は二十四日を以て大坂に着す）會藝藩士寺尾生十郎は閣老松前伊豆守（崇廣）より十八日を以て下付せられたる幕命を齎らし大坂より急行して廣島に歸る（二十三日）要は德山侯吉川監物若し疾を以て上坂すること能はずんば九月二十七日を期し長府清末二侯之れに代り別に老臣中相謀り之れと共に上坂せしむべしと謂ふに在り

（幕命）

毛利淡路吉川監物出坂之儀兼て相達置候處若病氣にて押ても難罷出節は毛利左京毛利讃岐幷大膳家老共之内申合來る九月二十七日迄大坂表罷出候樣其方より可被申達候

二十五日藝藩先づ寺尾生十郎をして密に岩國に來り之れを報ぜしむ二十九日經費節減の令を布く九月朔日世子巡見を終り山口に歸る藝藩の使者久保田某西川某岩國德山を經て此日山口に着す幕命を傳ふるなり四日久保田等客館に上り幕命を傳ふ老臣毛利筑前毛利伊賀直目付柏村數馬藏元役松原音三等出でゝ之れに接し幕命を受け畢りて使者を饗し各〻銀三枚を贈る同日藝藩の使者津田某深町某岩國に來り曩きに德岩兩家より藝藩に致せし嘆願書は幕府之れを採用せざるの旨を報ず（八月二十二日老中阿部豐後守は藝藩留守居福永助左衛門を召し告ぐるに此旨を以て し且書中に國内紛擾の恐ありとの語あれども毛利氏は宜く之れを鎮定し德岩二氏をして命に應じ上坂せしむべしとの意を傳へたり）是れより先き此月二日記錄所役を奥番頭座に併せ尚煩文省略の法を議せしむ四日太田市之進を以て用所役と爲し國政方の事務を聞き御楯隊總管を兼ねしめ六日高杉晋作を以て用所役と爲し内用掛を命じ國政方の事務を聞かしめ石川小五郎を以て用所役と爲し國政方引請所勤務を命じ遊擊隊總管を兼ねしむ是れ政府と諸隊との間に於て益〻密接の關係を保たしむるが爲なるべし又伊藤春輔を以て國政方内用役人と爲し赤間關に駐在せしむ八日松原音三

を藝藩に遣はし書を以て長府清末二侯亦疾あり俄に進退を決し難きの意を告しむ

今般從大坂表御達之旨以御使者被仰下致承知候早速長府清末へも申越候得共左京儀は先達より氣分不相勝讃岐儀も時々不快之樣子に相聞へ兩人幷淡路監物共登坂難相成趣は此内宍戸備前を以委曲申上置候通に付野村帶刀殿被差登御周旋御模樣振相分り候迄は進退不相決候間上坂期限も有之儀に付其内不都合不相成樣程能御執成置被下度致御賴候委細此者より御聞取可被下候

九日松原音三山口を發し十九日を以て廣島に至り使命を致す藝藩乃ち立野一郎をして上坂し書を幕府に上り期限猶豫を請はしむ是時に當り藝藩野村帶刀既に大坂に着し八月二十七日上城し宍戸備前の演說書及び防長士民の嘆願書を幕府に呈す九月十六日に至り幕府帶刀を召し其書に附箋して之れを斥く（附箋に曰く差出候書面之儀に付彼是申聞候趣は候得共取用候廉も無之候間差戻申候事）其二十日報廣島に達せしを以て松原音三之れを得て越て二十二日廣島を發し國に歸る二十七日再び松原音三に命じ公より長清二支侯も亦上坂の命に應ずる能はざるを以て猶豫を請ふの書を藝藩に致さしむ其文に曰く

毛利淡路吉川監物登坂仕候樣御達御座候處若病氣にて押ても難罷出節は毛利左京毛利讃岐幷大膳家老共之内申合九月二十七日迄大坂表罷出候樣御沙汰之旨奉得其意候然處左京讃岐兩人共病氣に付銘々より委細御屆申上候通りに御座候然處最前淡路監物御呼登御達之節右兩人幷本家々老共より申上候次第も有之且左京儀生來弱體之上病症相加讃岐儀も持病之脚氣差發兩人共急に發途仕體無御座就ては千萬奉恐入候得共右無據譯柄にて進退相窮候次第御汲取被成下此節登坂之儀一先延引仕候てもの不苦樣程能御取成被成下候樣偏に奉懇願候以上

九月　　毛利大膳

長清二侯も亦別に使者を藝藩に遣はし疾の故に上坂を辭するの書を致せり三支侯吉川監物悉く上坂を辭すること此くの如しと雖とも八月十八日の幕命は二支

侯の外仍他の家老の上坂を命ずるを以て公は井原主計が曩きに奉勅始末の事を以て上坂の經歷あるが爲め再び主計をして幕命に應じ大坂に至り備さに國情を辯明せしめんと欲し九月七日直目付柏村數馬をして親書を齎らさしめ主計の采邑熊毛郡三輪村に赴き之れに告ぐるに其意を以てし且急に山口に來るべきことを命ず（公の親書に曰く此度從大坂表御達之旨有之依て其方事上坂申付度委細數馬へ申含差越候間急速出山有之候樣存候也）會、諸隊中には國論既に必死防戰に決せるの日に當り老臣をして上坂せしむるは徒らに之れを死地に陷るゝものと爲し上疏して其非を陳する者あり二十三日公諸隊會議所員森清藏時山直八野村靖之助を召し親く旨を授け之れを諸隊に告示せしむ其文に曰く

今般御家老之内上坂被仰付との御内決被爲在候に付御親兵中氣付筋之儀建白有之候處昨日森清藏時山直八野村靖之助御前被召出今般御親兵中氣付筋之儀爲國家申立候段神妙之事一通り允に被思召候然る處先般御家老方御連名御本家へ當り最寄々々之諸侯へ從來御寃抂之御辯解天幕へ御申立被下度段御願に相成居候處折角此度幕府より直樣相尋度申越候て一人も不被差出候ては以前御賴有之候諸侯へ被爲對候ても何歟御不都合之次第も有之尙今般被差登候上は御兩國中彌以必戰之覺悟相決條理に於て一點之御損失も不被爲在安堵之決戰可相成事候間旁之御次第を以て御内決之旨今般御變換難被遊思召候就ては前條之儀一楯之者へ申聞爾後別て心志を勵し可遂御奉公段可申傳との御事に有之候右に付ては思召之旨一楯之者へ申聞尙又熟考可仕且此度申出候は御親兵中之事に候根本隊よりも夫々氣付之筋又々申出候も難計段申上候處以後氣付之事候はゞ何時も罷出可申上との御意被爲遊候間此段御承知可被成候就ては此餘之處尙も御熟考有之御所存之趣早速會議所へ御申出可被成候依て廻達如此に御座候以上

九月二十四日

諸隊會議所

二十八日井原主計召に應じて山口に來り公に謁す公親く内諭を授く又其家格を陞して鈴尾駒之進（福原家）の次に班す主計悚懼之れを辭す公聽さず更に太刀作の

刀（關兼清（兼清三代あり延文に一人應永に一人永正に一人是れ蓋し延文ならんと云ふ）及び脇差（備前長船祐定）一口を賜ふ此月十七日集義隊をして佐々並に轉陣せしむ十八日遊撃隊書を上り二小隊を以て山口を守衛せんと請ふ尋て之れを許す二十四日用談役桂小五郎をして用所役藏元役の事務を兼ねしめ二十六日高杉和輔（晋作）に馬關駐在應接方越荷方對州物産取組駈引を命じ又藏元役の事務を聞かしめ兼重讓藏を以て遠近方と爲し軍政方を兼ぬること故の如くせしむ是れより先き八月上旬桂小五郎馬關に在り滞在中應接方越荷方對州産物取組等の事務を兼ねしむ是に至り高杉亦此命あり桂と共に其事に從はしむ同日又桂高杉二人に海軍興隆用掛を兼理せしむ是れ皆銃艦購入長薩和解事件と相關聯せるの措置に出づ（事は別章に詳なり）二十九日瀧彌太郎をして日々政事堂に出務せしむ同日干城隊一中隊を花岡に萩居住の士一中隊を船木に出衛せしめ椙杜駿河を以て船木出衛の總管と爲し兒玉糺を以て其軍監と爲し小笠原彌右衛門を以て花岡干城隊の總管と爲す時に防長二州は恰も非常戒嚴の狀あり而して政府は頻りに軍制の改革に勉め維れ日も足らず九月十三日特に地方官に令し郡村人民亦防戰の用意に力むべきの意を示す其文に曰く

先般御軍制御改正兩國一般の規則被仰出就ては追々銃隊數十大隊其外砲隊等取建被仰付攻撃守備救援等御手組相成候處兩國手廣之儀郡々に當り他之救援を不借獨立にして大敵を引請防戰持久相成候樣には御手も不被爲屆候付地下人共憤發之餘爲御手當献金等相願且在來之火繩銃其外地雷火之類相用候ては如何と問出候向も不少候火繩銃は一統廢止之筋に候得共切迫之時勢憤發之氣を挫候樣有之候ては不可然且夫々之利有之事に付御軍制に不拘御代官所以下に於て相用狙撃等之手組相調置地雷火其外何にても相用防戰之手段を盡し地下一統心を安じ候樣丈け之豫備有之度事に付先達て御代官中被召呼授被仰付候趣を以精々遂心遣候樣被仰付候事

附御代官役之儀は孝悌力田を勸るを以職務と致し候儀勿論に候得共卽今之時勢にては軍務之事切緊之儀に付只管平常民政のみ相勤其職を盡し候樣心得候ては不相濟候付其郡に相應嚴重防戰之手組肝要に候就ては下役幷手子

等へも心得違無之樣右に應じ諸事駈引被仰付候事

此時廣澤藤右衛門（波多野金吾）待敵の準備に關し建議する所あり公之れを可とし命じて順次之れを施行せしむ其建議に曰く

一兩君夫人興丸公子は速に山口に遷移あるべし（著者曰く是時萩にあり）是則國内人心の方向を定むる根底なり

一慈芳夫人禎之允公子は避災所を美禰郡大田の勘場其他寺院へ構設し事變に際し速に輕裝移居の豫備を爲すべし

一萩地の靈社神儀は事變に際し山口遙拜所へ遷すべし

一寺院の靈牌も同しく山口興國寺へ遷すべし

一各地屯駐の諸隊中より山口の親衛として若干の兵を出成せしめたるものは悉く本營屯所に遷し戰守の準備を爲さしむべし

一第一大隊第四大隊は十月朔日より後二ヶ月山口表へ屯集せしめ樞要の兵に備ふべし

一第二第三第五大隊は異變に際し急に山口へ出衛すべし

一砲隊も之に準ず

一山口在留の干城隊司令を除き總員は隊伍に編す

一山口三田尻兩郡住居の諸士現員を調査し兩君夫人の守衛に充つ

一牙軍に編する諸士卒は急變の際山口に馳集り指揮を待たしむ

一諸士官の補缺員を精選し同前

一鴻城隊山口大隊（農兵市）同砲隊の屯所を定む

一山口に於て寺院等を選び諸兵の屯所を豫設す

一於萩新兵半大隊を急に建設すべし

一萩在留の干城隊鍾秀隊の隊伍編制を定む

一萩地及當島部内居住の諸士號令を聞直に屯所へ集り隊伍を編して戰地へ出す準備の事

一家祿千石以上其家兵を以一部の戰備を爲すものは各其采邑へ兵を聚め敵情

によりて支藩及各地の總奉行或は諸隊等へ應援の戰備を爲すべし

一各郡居住の諸士は變報を聞き勘場近傍の屯所に集り代官役と謀り戰守に從事すべし

一各郡の緩急により代官役へ助役を付する時は豫しめ政府に於て人選し之れを命ずべし

一美彌郡居住の諸士は慈芳夫人其他公族の守衛に充つべし

又別條

一急報を猥りにして衆聽を驚かすを禁ずべし

一大小銃應用の彈藥を急に調製する事

一諸兵の給養を豫講する事

一諸軍監を人選する事

一德地々方へ陣營を豫備する事

當時海防方面漸く其趣を變し南海防備亦頗る緊要に赴けるを以て九月二十四日令を發して警備を嚴にす其文に曰く

昔年海寇御手當に付ては北海第一に被仰付要衝之地へは浦究役として大組一人宛被差出置南海之儀は出入津見糺而已にて御番所役として無給通一人宛被差出置候處近年海防御手當に付ては總て南北之無差別嚴重に被仰付候就ては以來右浦究役御番所役等之儀も一統要衝不要衝に寄り左之通御改正被仰付候事

一北浦究役　江崎　瀨戸崎　肥中

一南海同　室積　上ノ關　沖家室

一北浦御番所　大島　相島　通浦　向津具

一南海同

但前件室積上ノ關沖ノ家室を除き是迄有掛り之箇所々々

此時期に於て馬關管轄統一論は宗藩と長府藩と交渉の一問題たり馬關管轄の不統一は久しく宗藩識者の憂ふる所なりしも事容易に進まず宗藩は遂に長府藩に

照會し外國船等應援の爲め設くる所の應接場の事は一切之れを長府藩に委任し宗藩の職員は悉く馬關を去らんとの議を提出するに至れり長府藩に於ては之れに應ずること能はず切に現狀の維持を請ふ是に於て乎宗藩は前議を枉け爾後應接場は宗藩長府藩協同して之れを管理し兩藩より主任各一人及び應接員各一二人を出すの規定と爲さしむ既にして清末との交渉大に進み伊崎竹崎の地馬關の清末領を宗藩にて管理し清末には其地の收入に應じ米銀を與ふるに決し其約成る十二月七日授受を終る八月初旬越荷方役所を改修して應接場に充つ防備亦馬關の要務たり宗藩は長府藩に求むるに大に力を此に用ふべきを以てす長府記錄に依るに七月十一日桂小五郎鈴尾大夫と共に長府に赴きこれを迫れりと云ふ長府藩は其力微にして堪ふること能はざるを言ひ宗藩の依然自ら之れに當らんことを請へり八月に至り宗藩政府は遂に議を決し馬關の地は宗藩之れを保管し其收入は之れを長府に與へ而して防備は宗藩自ら之れに任ずべきの意を長府に示せり

（八月三日の政府議案）

長府御領赤間關之儀は中西國北國への咽喉にして勿論豐饒之土地柄に付御手當向嚴重に無之ては折角之利潤も他邦へ奪取られ終に衰微は必然之事に可有之然る處止戰媾和以來外國人屢〻來舶今日之如く不取締にては何時如何體之御厄害出來も難測且又彼地は神州中第一之港幕府其外列藩共注目する所に付海軍を以て屹と防禦の御手段有之度御事攘夷御手始以來今日に至る迄只今之姿にては土地は長府御領防禦筋其他外國人御取扱等重大の事件は悉皆此御方之御取捌と申候ては諸事徹底不仕不相濟次第畢竟御兩國御維持之基は馬關に有之迚も長府樣の御力にては將來の御目途相立申間敷御支藩樣其外御國中要衝之地御分配數百年御領地被成置則鎭西防禦御委任との御先祖樣深き御遺志も被爲在候得共今日之形勢數百年以前之趣に無之不被爲得止事に付斷然關市中幷田中邊市街最寄之地方共御預り地被仰付候はゞ御政道一途に出で防禦方御行屆可相成哉と奉存候尤御物成幷諸上納物等是迄之通此御方に於て御取立之分御渡方相成尙又時々御當用金等は近年の分平均に抨し相應年に被立進可

然哉左候て馬關成立之上は素より長府様のみならず御支藩様方御合力をも調進可相成哉云々

然れども馬關は長府侯の寶庫にして之れを宗藩の保管に委するが爲めには其望む所の報償亦頗る大なり先づ之れに易ふるに三萬石の地を以てし且つ馬關の諸税及び臨時市民の貢金十ヶ年平均額を錄上して其補給を請ひ而して防備の事は防長二州の力を盡して之れを經營せんことを望めり宗藩は之れを妥當ならずとし議相協はす十一月に至り事遂に寢む

（十一月四日毛利出雲より長府老臣に與へし書）

馬關之儀は御國内第一之要衝は不及申實に神州之咽喉共可申場所之儀にて舊來其御方様へ御委任被爲成置の處近來海陸之兵制も大に變換致し加之天下既に分裂之機萌も被相伺將來之形勢を致推量候ては海陸之防禦不容易事にて實に軍備之整不整は必社稷之興廢にも相係り候處今日に當り防禦方御行屆難被爲成は無是非事に候得共將來之御目途不被爲立候ては第一被爲對御先靈様候て御孝義片時も難被爲安事に付先達て將來御見込之處御相談被爲在候處此御方へ御任せ被爲成度段入々被仰建御允に被思召其詮議被仰付候處此度御申立之趣にては存外御取立之様相見名實不合之儀も有之候様被相考候元來彼地之兵備は社稷に相係る大事件にて被爲對御先靈様へ大義の上においては片時も不被爲安無御腹藏御相談被爲在候儀に候處其末私利よりして相破れ候ては實以て御不本意に可被爲思食且又被仰立之通にては海陸之防禦方將來之御目途も被相立今日より御手も可被爲下様相見候付以前之通其御方へ御委任被爲成可然御事之様被相考候付一先氣付之處各様迄申達候御同意有之候はゞ右邊之趣左京様へ申上先達て御願立之御書面御返却可致候事

顧ふに馬關統一論は當時長藩内政上の一難問題にして爲めに宗藩と長清二支藩との關係も圓滑を缺くの虞あり高井伊三士ガ殆んど非命に斃れんとせしも此事其主因たり桂の歸藩後亦大に力を茲に盡せしも纔に其一部の目的を達せしに過ぎざりしなり

當時中山忠光卿墓碑に關し桂等と長府人との間に一齟齬を生ぜり事小なる如きも亦宗支藩關係の圓否如何の一斑を推知するに足る左の諸書翰は其事を證するものなり

（伊藤俊輔より桂への書翰抄）

公子墓處より只今歸宿仕候一切相替不申更に氣付不申と相見申候墓處は海邊にて石碑持運候にも至て便利なる地に御座候今朝申上置候墓銘御書調被爲在候へば御渡可被遣候樣奉冀候只今より新地へ爲持可申と奉存候（五月二十一日）

（山縣狂輔より桂への書翰抄）

於馬關蒙仰候建墓一事二十七日と相極候處前日夕方福三より承候得ば先日姫君一件に付鴻城罷出於廟堂泉十郎へ出會種々談論之餘もはや墓も相立たるに て可有之よし縷々應接相成候よし波金佐八諸老兄へも御同席御承知に相成候との儀彼是兎ても眞密には被行不申候に付隊中より歎願之上公然相立候方可然と諸先生一容申合相決候付御熟考被爲在御取計被仰付候はゞ急速取掛可申と奉存候巨細は五郎口頭に托候間御聞取可被成遣候（六月二日）

（伊藤の書翰抄）

中山公子墓碑之事も於政府上先達て長府野々村勘九郎へ墓碑取建之儀等は於本藩決て無之事と已に御打出相成候上は强て爭ひ候程の事も有之間布と奉存候右に付狂輔抔之論も最早長府へ懸合不申ては難相建と申事にて先其儘打捨置有之由候（六月二日）

此時に起れる雜事の注目すべきものを見るに七月三日赤間關の招魂場成る翌四日政府は公の意を承け各郡をして均しく招魂場を設けしめんとし其意を令す

（令文）

一招魂場之事

右諸郡に於て一ヶ所宛清潔之地見立其宰判居合之者戰爭國事等に死するものは孰も其地に埋葬せしみ春秋兩度祭事をも被仰付候事

一招魂所開立へ對し銀三百目宛被立下候事

一春秋祭事料として金三百匹被立下候事

晦日京都の間諜谷川監物を馬關に捕ふ（監物實は京都の市醫須衛元吉の子義彦と云ふ者にして中川宮の諸大夫進藤柑模守の命を受け來ると云ふ）其自白に由り間諜の國內に潛入せし者少からざることを知り益〻關門の禁を嚴にす（監物の言ふ所に由れば中川宮の坊官鳥井小路宰相（眞宗の僧形）大谷式部卿（淨土宗の僧形）一橋の臣松井數馬（砂糖行商）會津藩西田米藏田中仙助（乾鰹魚商）中川宮の臣筒井圖書岡本文吾（藍染料商）は馬關より入り中川宮の臣山田林馬林大學（修驗）は藝州より入り中川宮の臣藤田左膳一橋の臣松尾掃部有田帶刀藤本日向は七月十一日京都を發し埴髮堂の臣大谷文藏一橋の臣中村左近の僕古林良藏は七月二日京都を發したりと云ふ其姓名等は眞僞保し難しとは蓋し疑ひなし）九月二十九日命じて萩靈社の神位を山口遙拜所に寺院の靈牌を山口興國寺に移せしめ（翌日遷移）又異變の際公族慈芳院禎之丞眞章院玉溫院芳春院の大田に移轉すべきことを定む又桂小五郎の氏名を木戸貫治と改めしめ高杉晉作（當時和助と稱す）の氏名を更に谷潛藏と改めしむ其餘當時名士の氏名を改むる者尠からず蓋し幕府の注目を避くるに因る此時期に於て有志の士の褒賞を蒙る者少からず八月三日侍儒山縣半藏小田村素太郎功を以て業家を免じ改めて平士に列せらる



（山縣小田村への辭令）

右先年已來御側儒被召仕候處兼て學術宜敷御主意筋を奉じ時務之建言も不少時勢切迫之折柄諸藩へ御使者事情探索等偏に御國家之御爲不一形遂苦勞畢竟愛國之心厚く別て御用に相立候に付是迄平役に被召遣候儀も有之旁格別之御心入を以て家業被成御免平士に被召仕候事

二十一日御楯隊總管太田市之進南園隊總管佐々木男也遊擊隊總管石川小五郎に新刀一口金五兩八幡隊總管堀眞五郎に新刀一口金十兩鴻城隊總管來島龜之進（森清藏）集義隊總管櫻井愼平に各新刀一口を賜ひ其功勞を賞す二十七日故清水清太郎に金百兩故大和國之助毛利登人前田孫右衛門山田亦助松島剛藏渡邊內藏太楢崎彌八郎に各金五十兩を追賜し以て香花の資と爲し其魂を慰す是れより先き同年五月二十三日士雇時山直八奇兵隊創立及び文久三年馬關攘夷戰爭の功を以て其班を陞せて三十人通となす直八固辭す（政府の命は直八平生國事に盡す所尠らず馬關の攘夷戰爭亦功ありと云ふに在り直八は京師の變動臣與りて罪あり藩內の動搖に際し臣亦罪あり殊に馬關の戰爭臣纔に八月四日を以て戰地に達す何等の功勳なし何ぞ重賞を辱くするに堪へん請ふ實地の功勳者及び戰死者を重賞し臣を濫賞することなかれとの意を

陳す藩内の加動搖に罪ありと云へるは諸隊の擧兵に加はりしは不臣の觀ありしを指せるならん八月二十八日に至り更に無給通りと爲す二十九日輕卒亡綿貫次郎助實兄豐吉に士格を與ふ客歲櫻田邸沒收に際し捕吏次郎助の刀を收めんとす次郎助捕吏の暴言を聞くに忍びず自殺して之れを辭す是に至り其義氣を追稱せしなり九月八日故入江九一の功を追賞し其子音二郎を以て生涯士格に準じ賜ふに從前の家祿を以てす十三日麻田公輔の功を追賞し其死を憫み金十兩を賜ふ其命に曰く

麻田公輔

一金　拾　兩

右多年廉有御役相勤御爲筋に付ては不容易遂苦勞候處去秋御國難危急に相迫り心事に堪へ兼遺書認置自殺せしめ候然處存在中抽で御役にも相立候儀に付格別之思召を以て香花料御心持にて右之通御内々拜領被仰付候事

同日又吉田稔麿在時の功を賞し其父清内に一代苗氏を稱するを許し士格に準し又曩きに明木に於て非命に斃れし櫻井三木三香川半助冷泉五郎に各金五兩を賻す

## 第十一章　長薩和解の進行幷銃砲軍艦購賣談判

鈴尾桂の馬關出張○井上伊藤の長崎行○海援隊士及び薩藩士等との會談○井上の鹿兒島行○銃砲購入○内部の紛紜○海軍局の抗議○桂の苦心○藩議の確定○蒸氣商船一隻蒸氣砲艦二隻購入の議○薩藩士來關の報○桂の馬關出張○小銃輸送○井上の歸藩○蒸氣商船購入の豫約○伊藤の歸藩○海軍興隆物産疏通の議○馬關論○井上伊藤の潛伏

六月下旬桂小五郎の鈴尾大夫に從ひ馬關に在るや（前章參看）青木群平は長崎に於て幕吏の爲めに妨げられ小銃購得を果さゞりし報に接す因て高杉井上伊藤等と議し小銃購入亦汽船と均しく薩藩の名義を假りて之れを遂行せんとし鈴尾大夫に稟して二事共に政府に申告し井上伊藤二人長崎に赴くに決す（當時阪本石川より在京薩藩士の意向の通知ありしならん而して井上伊藤二人が太宰府より長崎に同行せし楠本文吉は其前京都より馬關を經て太宰府に歸りしとあれば其通知は蓋し楠本の齎らせし所ならん）若し二人長崎にて小銃汽船購入の事を果し得ずんば上海にも至らしめんとせしなり此事稍桂の

擅斷に渉る所ありしを以て鈴尾馬關を發せし翌日卽ち七月十四日桂は書以て之れを山口政府に報じ且つ擅斷の罪を謝す蓋し此銃艦購入の事は固より當下の急務なりしと雖ども獨り是れに止まらず坂本龍馬石川淸之助等が熱心に幹旋せる長薩和解に關聯し事極めて重要にして旣に逸すべからざるの時機に到着し鈴尾大夫上申の結果を待つことを得ずとなせしものゝ如し桂の書に曰く

御手紙拜見委曲承知仕候段々相迫り彼是不一方御配慮と奉察候孫七郎は先日出立致し鈴尾大夫も昨日出立被致今日は歸山に相成候事と奉存候然處逐々外國船に相賴置候ミネー等甚ふきまり千萬に付先日幸便有之早速に崎陽ガラバと申夷人之方に懸合有無相尋候處一昨日返答有之幕よりも英國女王へも深く相賴越候趣も有之定て將軍より直書も參り候歟之趣に相聞必竟長州之妨をなし候事が第一主意にて兎も角も幕は條約之國に付如何とも難致依て於長州此後武器を相求候手段決て無之ガラバどもにおゐても氣の毒之至りに候へども致し方無之右に付外國商船へも餘程嚴令を出し自然武器等を馬關にもたらし



候ものは船をとり上げ其人を罰し候趣及布告候由乍去其餘之品物にて日本船にて積越し候ても不苦ものに御座候得ばいか樣とも御世話可仕段申越し候於于此ガラバ之一氣付に長州公之御船にて上海邊へ參り御買得に相成候事は不苦自然蒸氣船等にても無之候事に御座候はゞ上海へ一兩人微行候て蒸氣船を御買得可被成其節右船に御誂丈け之小銃を竊に積込候て御渡し申候儀はいか樣とも盡力可致との事にて誠にガラバは於此事は餘程心痛之趣に被相察申候然處不容易企其外云々も壬戌丸一件且武器一條等之事より相起り候事にて微行論も餘り公然となり過候ては此節柄之事に付又俗耳を驚し申候事も可有御座然しいか樣密々に微行仕候とも終には露發致し候事は必然にて必竟其とて袖手に居候時は一挺之小銃も相調候目途無之微行論も背にはらはかへられぬ譯にも御座候得共是は行詰候處にて無據策に付最初より旋し申候もいかゞ哉と存居申候然處兼て薩へ內々手を付け置候事も有之少々は趣之相分り候邊も有之候付獨斷にて明日より聞多春輔兩人を崎陽に差遣し申し候其都合九州邊

周旋仕千慮萬考相盡し候上終に手段無之時は微行之外策有之間敷と奉存候か
く申上候は甚奉恐入候得共兎角愚考申上とも十の九は思召とも相逆ひ不堪恐
懼譯にて此度一條も推て取計らひ候次第多罪何とも難奉謝儀に御座候得共此
期に臨み候上は銃丈けなりとも取込置候はゞ又一益と存込右之次第に及び候
事に御座候間他日御嚴罰之處はいか樣被仰付候とも不苦候間左樣御承知被成
遣候樣奉願候先は御返答迄如此に御座候恐惶謹言

七月十三日　　小五郎

政事堂
各中樣

井伊二人は七月十六日馬關を發し翌日太宰府に達し三條卿等に謁し又薩藩士と
會見し十九日三條卿の隨員楠本文吉（土藩浪士谷晋）を伴ひ長崎に向へり發するに臨み書
を政府員に寄せ豫め藩議の變動なからんことを切言せり蓋し二人帶ぶる所の使
命は藩内種々の反對論を惹起すべき事情あること二人の既に豫期せる所なり是
を以て此書あり（此行井上は薩藩山田新助伊藤は同吉村莊藏と假稱せり）

（井上伊藤の書翰）

爾後御清適可被爲入欣躍之至奉存候小生共一昨十七日太宰府迄無恙到着仕候
間乍憚御放慮奉願上候條公樣方御英然可被爲在候間此段被爲達君聽候樣奉願
上候竊に拜謁仕縷々事情申上候處大に御安心被爲在候處別段相變候事も無之
當節五藩御警衛之人數も交代彼是にて至て少人數之樣子に承り及申候○崎陽
行則今日より當地出發の覺悟に御座候當節は小松帶刀崎陽に相滯居候由にて
旁都合宜敷多分被相行可申と奉存候當地出張篠崎彦十郎と申者より崎陽出役
之者へ添書仕吳候に付土の楠本氏同行可仕候薩人を一人同行を相賴候へ共當
節少人數に付一人も難差越由に付不得已三人にて罷越可申と奉存候右に付て
は銃艦共買求之相談相決次第金は從崎陽慥なる町人にても差出可申候に付此
書相屆次第金高凡十二萬兩位之御手當被成置前廣馬關迄御差出被下候て從崎
陽一書差送次第何時も御渡相成候樣奉願上候此度は如何樣之事有之候ても御

違約不被下候樣奉願候薩州人へ對し候ても自然違背仕候事出來候ては僕等面皮は差置國辱不可雪と奉存候此段偏に御忘却不被下候樣奉冀候爲其急飛を以如此に御座候誠惶謹言

七月十九日

山田新助
吉村莊藏

尙々山口某は太宰府より日田邊へ罷越候由に付其儘差置申候大に虛喝を吐き候とて御附人數等も大に笑居申候位に付强ての事も有之間布候へ共多分處々流落仕候中には被縛可申歟と懸念仕候以上

山田宇右衛門樣
兼重讓藏樣
廣澤藤右衛門樣
前原彥太郎樣
桂小五郎樣

二十一日長崎に着し楠本の紹介を以て先づ海援隊の士千屋虎之助高松太郎に面し來意を陳べて周旋を依賴す千屋高松は同志の士上杉宗次郎（近藤昶次郎）新宮馬之助等を會して之れを謀る皆曰く先づ二士を薩邸內に潛匿せしめ然る後銃艦購入の手段を定むべしと乃ち小松帶刀を訪ふて其意を告ぐ小松之れを聞き直ちに二人をして薩邸內に潛匿せしむ二人の小松に面するや長藩の事情を陳べ將來開國勤王の方針を以て國是を一定せざるべからざる所以を說き且つ銃艦購入の事を依賴す小松之れを諾す是に於て二人高松太郎を伴ひ夜間ガラバと會談し小銃購入の交涉を始む時に小松帶刀は新たに購入したる汽船に乘じて鹿兒島に歸らんとす上杉等其機に乘じ二人中一人をして小松と共に鹿兒島に至らしめんと謀る井上乃ち鹿兒島に赴き伊藤は長崎に留まるに決す井上の發航に先ち二人書を政府員に寄せ事狀を具陳し苦衷を披瀝し幷に汽船購入は二人身命を犧牲とするも累を政府に及ぼさゞるべきの決志を示し必らず速に之れを決行すべきを說く蓋し當時異議內に起り藩議動搖の報二人に達せるを以てなり

（井上伊藤の書）

以飛書御答申上候銃艦一條被仰越候委曲致拜諾候拙生共過る二十一日崎陽到着薩藩小松帶刀其外面會之上一々及示談候處案外に都合宜敷參り薩州買入之名前を以周旋致吳候との事に相決既に當節夷人へも及懸合銃は殆不殘相調申候左候て艦之儀も御買入相成候義は必然御決着相成居候事と相考只得其名候へば仔細無之事に付何卒買求候方略色々苦心仕候て薩人へも急迫に談し込依賴仕候處固より於今日は唯吾藩之寸益にも相成候事に候へば幕府への嫌疑等之事に更に眼を注ぎ候譯に無之故いか樣之事にても盡力可仕との事則銃買求之儀も速に相運び候如く毛頭嫌疑を厭ひ候樣子も更に相見不申後來之處も力之及候丈は相助可申との義に付即明後日より小松帶刀歸國新助同行蒸氣船にて一應鹿兒島迄參り候樣相決申候莊藏儀は當地に滯留小銃不足等之始末を相着申候て薩の蒸氣艦再び崎陽へ到來を待候て銃を積込直樣歸帆と相決申候就ては能々御熟考奉願候事に御座候薩にて箇樣に嫌疑を不厭盡力仕吳候へば幕府之忌諱に觸候事いか計か被推察候事と奉存候外藩にてさへ如此致周旋吳候に御座候へば諸賢臺一應御評決之事再變仕候樣相成候ては實に今日之急に應兼候而已ならず外藩へ對候ても國論一定之處は箇樣と申候言葉も有之間布と奉存候今一應君上へ御伺等之事は急務之事に候へば片時も速に被爲伺御評決可被仰越儀と奉存候只々御買求相成候と不相成との御決議相着居候へば其名を得其船を求候等之事は死力を盡し御國害を不生樣と實に焦思勞心仕候て既に薩藩等へも深重之熟議に及候折柄曖昧模稜之事にて御決斷不相着候てはいか樣にして他より扶助仕候事出來可申哉僕等外にて盡力仕候益も有之間布と奉存候則銃を求候は不慮之御備にて自然敵兵境内に差迫候て暴戰に及び可申も難計事に付御手當相成候事に候へば其不慮に御備相成候儀は人力之及候丈けは御調不相成ては相濟間布と奉存候只昔日之因循は今日之實着と而已御存付にては時勢に違ひ候事と奉存候於拙生共はいか樣共諸賢臺之貴意に任せ可申候へば中々礮艦御買入等之事も幕長關係之中は容易に再び相調候譯に無之

且薩藩と申候ても度々相煩し候譯にも參申間布且僕等當地滯在之苦慮も少し
御推察奉仰候固より束縛せられ候ても栲掠百端所不敢辭に御座候へば毛頭御
國害に相成候事は決て不仕候に付此段御推察奉冀候猶艦之儀は一旦薩人へも
依賴仕候て略相決候儀且後來の處も薩と御合一に御座候へば此方より餘り動
搖之言を不出方可然と奉存候間何卒速に君上御伺艦の御入用と御不用と申事
を急速に御答奉願候薩國論開國勤王に無之ては皇威回復は出來不申と擧國一
決と承り及申候會津抔と絶交議論異動に相成候儀は只會之論は開國にして幕
威を助くるの論にて薩と相離候由固より未だ信僞一々御氷解にも相成間布候
得共僕等一見之處に於ては薩今日之國論毛頭國家之禍害に相成候譯更に有之
間布と奉存候船之儀は御廟議御一決絶て御動搖無之處分明に被仰越可被下候
最速に無之候ては行違に相成可申に付迅速に御決斷爲邦家奉仰候餘は別紙一
ッ書を以御承知可被下候匆々恐惶謹言

七月二十六日

山田新助

山田宇右衛門様
桂小五郎様
廣澤藤右衛門様
兼重讓藏様
前原彦太郎様
覺

吉村莊藏

一ミネーゲベール短筒
四千三百挺凡挺別十八兩之積りにて
右に當る代金
七萬四千四百兩

一ケベール　三千挺
此分所々豪農其外寄組等買得申出候者餘分有之候樣承り候に付此度買得仕

候事若し上に御不用にても御國中之益に相成候間一應之拂金は上より御拂
方奉願候取締り方は私共兩人より取集候てもよろしく又上より賣拂被仰付
候とても宜敷候間右之金引當丈は當分之事故是非とも御願申上置候
右之金子五兩積りにて
一萬五千兩
合九萬二千四百兩
右は眞之荒積りに候間いづれ少々金之千二千位は餘り候樣算立仕置申候
一金子渡し方は於馬關ガラバと云異人船便にて夜中不殘相渡候條約に御座候
間必々來八月十日を限り馬關迄御繰出し置被成置候樣奉祈候若し不都合之
儀候はゞ兩人の面皮は差置二州之耻辱と立行候間深く御勘辨可被成下候
一馬關迄送り方の儀に付ても色々吟味仕候得ども多分之事故實に名を設跡を
隱滅する樣之良策無之込り入候得ども小松其外へ談候て薩州之海門丸と云
船明後二十八日より鹿兒島迄米之運送仕候上凡十日位滯留にて再崎陽へ參
り銃不殘積入候て馬關迄送り付之談決に相成候故凡來月十二三日之頃迄に
は是非とも着關之都合に御座候乍去石炭之費と水夫へ之心付等は是れより
出し不申ては不相濟事と奉考候其御心持に御配慮可被成下候兩人も歸關は
其節乘込候積りに御座候何も此度薩より至て正實に心配且餘程弟等へも念
を入呉候間相應之答禮無之ては不相叶候事
一銃は二十挺入五百箱計りも有之候故關地へ陸揚候ても無益且陸送りは餘程
之費故來月十二三日迄に必癸亥丸を馬關迄差廻し被置候て夜中に於て船を
近く寄船より船へ積込みして小郡へ被差廻候方便利と心得候間其御手都合
可被成置候
一ミネーゲベール三百挺丈餘分に相成候得ども不殘賣拂度事異人より申出
且薩人よりも度々噂有之候間都合三百位之事故辭退も難仕候故買添候是れ
も餘計之事と被思召候はゞ何時も脇方へ讓り可申候何も少々之出入は御約
束前と相違候ても必々御立腹なき樣奉祈候成丈は心配仕候て安く求候間必

々御安心可被成下候暴狂之者兩人參り候故色々と御氣遣之程奉遠察候いづれ幕よりは不係善惡罪名を付候て若し諸侯憤發ともは仕間敷かと謀計故必々小事と風說に御疑惑なく決戰と御一定候得者とても薩も見捨候覺悟は無之樣奉考候内に强實一定之論無之て外之扶助を求候ては實に外より誠實は決て盡し不申候何分御疑惑なく御實備肝要に御座候以上

七月二十七日

山田宇右衛門樣　山田新助
兼重讓藏樣　吉村莊藏
廣澤藤右衛門樣
前原彦太郎樣
桂小五郎樣

覺

一木船にて蒸氣凡長さ二十四五間位造立より七年程に相成候事凡代金七萬ドル位と申出候事

金子にして

凡三萬九千兩位に御座候

七月二十七日　山田新助

二人又別に書を桂に寄せ以て其所見を陳べ桂の勇斷を促す（井上は春山花輔伊藤は花山春輔と假稱せしことあり此書の署名はこれを用ひしなり）

七月二十二日之御懇書難有奉拜讀候御別後嘸々御苦慮可被爲在と奉拜察候私共崎陽到着隨分當節は苦慮盡力仕候九州邊事情可申上樣被仰越候處別段委敷儀は未だ承知不仕候へば荒增承り候處近來は平戸大村兩藩殊之外正義凛然之模樣に承り及申候渡邊昇人も當地滯在小松帶刀抔追々面會之由にて餘程よき人物と賞居申候肥前國論更に如例不相分肥後筑前久留米擧國俗論横井之門人登庸握權之由薩は實に當節は幕府の嫌疑を受居申候當節は小松崎陽に滯在蒸

氣船四五隻宛相泊居候に付肥後人抔より長崎鎭臺へ薩より長を助くる爲め小松當地滯在抔と上言仕候位最薩にては區々之事に不係海軍を盛にして武備を充實させる事而已に專力を盡申候土藩新宮高松千屋上杉等之士と面會候色々議論も有之候得共歸來可申上候先達て馬關へ參り候爪生□□と申越前人既に賢臺へも御目に懸り候もの至て姦物にて肥後庄村某と結合追々諸方之探索を以幕へ申込候由也既に賢臺馬關にて英之ミニストルと御應接相成候攘夷勅諚之事に付ては當節一册之書に綴り色々誹議を加へ英ミニストルと賢臺之論と故之英ミニストルとの論を三等に分ち爪生之註を入れ有之由未一見仕候○船御買入之事は箇樣切迫に政府諸彥申越候へ共決て御氣遣被成下間布候いか樣にても相成可申候事に付周旋可仕候最是非乘此時相求置度候に付何卒政府に論迫被下候て御買入相成候樣御盡力奉願候年越にて金を拂候事等は此度は餘り不面白と奉存候不被行儀には無御座候得共僅七萬ドル位之事且危急存亡に相備候事に候へば金も一應相拂候方可然と奉存候私共別懇なる英人ガラバと申もの兩人商買等相始候へば百萬ドル位の事は何時も借吳候に付決て何も不可憂と申位に付いか樣にも此先は御手傳可申上候御氣遣被成間布候樣奉願候船之御答を速に政府より御申越奉願上候賢臺へ而已責を歸候ては奉恐入候に付政府諸賢へ當て書翰差送り申候御推讀奉願上候先は爲其申上候恐惶謹言

七月二十七日

花輔
春輔

桂盟臺侍史

井上既に小松帶刀に伴ふて鹿兒島に赴き伊藤留りて長崎に在り小銃購入の事を周旋し將に井上の歸るを待ち薩船にて之れを馬關に運送し之れと共に薩人馬關に來らんとすることを山口に報ず會〻桂より政府愈〻汽船購入の議を決したるの報至り且つ薩州よりは小松若くは大久保小銃運送の船に搭じて馬關に寄港せんとするの聞ありしを以て伊藤は桂への答書を裁して委細を報じ桂をして馬關

に出で之れを待たしむ

（伊藤の書）

本月二日從鴻城御送被下候尊書昨七日相達謹奉拜讀候先以老臺御英然可被爲入爲邦家欣躍仕候當地相變候事も無御座小銃も未だ少し半途に御座候得共兩三日中には皆濟可仕と奉存候間不被爲懸御念頭候樣奉祈候山田當節鹿兒島行留守中に御座候得共六七日中には必ず歸帆と相待居申候當地着次第直樣積込揚帆之覺悟に御座候に付不出十日必定歸關可仕候間其節は蒸氣艦直樣上坂仕候事故長滯難仕尙小松帶刀大久保市藏兩人之中是非右船便にて上京可仕且馬關へも多分立寄候て御相對可被成御都合可相成候に付其以前より關地へ御出浮被成下置候樣奉願上候

蒸氣船御買入に付藤井正之進長嶺豐之進兩人點檢之爲薩船乘船可被差越其上にて御買入と御決議相成候段奉承知候然處薩船上坂にて直に崎陽へ罷歸候程相分り不申候に付樣子に寄候へば右蒸氣船馬關へ參候樣相談可仕候最態々參



候譯には六ヶ敷候得共横濱へ罷越候序に立寄吳候樣相談仕見可申其節右兩人へ點驗仕候樣可被仰付候方可然歟と愚考仕候當節鐵船は澤山御座候へ共木船甚少く只一艘丈け參り居申候蒸氣釜極新敷無御座從今兩年位は用立可申と奉存候右に付自然御好に御座候へば直樣上海へ差越新釜を入替差上可申都合に仕候ても不苦と申居候最只今之直段六萬ドルと申船にて隨分下直なる方と奉存候釜を入替候ても七萬ドル位にて御買入相成可申候其餘善惡新古は兩人之點驗に御任被成候て可然と奉存候

一ゴンヌボートの義被仰越委敷取調罷歸候樣可致候間左樣御承知奉願上候薩にも凡七十門位のフレガットと申軍艦を誂へ有之申候由に御座候未だ出來仕間敷と申事に承り及申候幕より米へ相賴候軍艦此節出來に付旗下の士乘歸之爲罷越不遠中には取歸可申との義承り及申候

一先般横濱へ御遣被成候書簡答書今以爲何事も不申參候へ共兎角申參候へば直に可申上樣可仕とラウダより申上吳候樣相賴候事

一小銃之外に前以及注文置候帆木綿百十五反幷馬具二十五掛當節從上海到來仕候付受取持歸可申都合に仕置候間御承知被下候樣奉願上置候最代金至て僅なる者に付御氣遣には及不申候事（帆木綿晉て癸亥丸より入用とか申事にて山田注文のよし）

一老臺は（傍書に此より以下贅言也）外國ミニストール迄馬關奉行と申事を書翰に認送且其他之外國人にても致承知居候事に付眞之馬關奉行に無之ては甚不都合に可立至と奉存候已に東行先生昨年戰爭後應接之節宍戸刑馬と申大夫にて應接有之其節戰爭に參り候者逢さへすれば大將宍戸は如何せし歟と尋ねられ虛明を申樣有之ては如何と甚込入申候且外國人應接は一度より二度二度より三度と申樣に不仕ては其人每度替り候ては其國の信僞難計に付眞實之情は言し不申と奉存候迫々此度西洋人よりも其事を被責返答に込申候何卒此以後は人に委任が第一じやと切々氣付申居候外國に在ては宰相よりして武官は素より容易に遷職仕候事無之故我國之風を大に怪み居申候由也

八月九日早晨　　莊藏拜

松菊賢臺　玉座下

銃砲船艦購入の談判及び長薩感情の融和は斯くの如くにして大に其歩を進めたり然れども事の玆に至れるに際し內部の紛紜は頗る志士をして泣かしむるに足るものあり而して事端は海軍局の抗議に發せり始め鈴尾駒之進の桂に先ちて馬關より山口に歸り桂等の稟申する所を公に聞し允可を請ふや政府員山田宇右衛門等は銃砲購入船艦購入及び之れが爲め必要なる海外行共に允可を得たりと思惟し之れを桂に報告し事に從はしむ

（山田の書）

殘暑酷烈に御座候處御堅勝被成御滯關珍重奉賀候鈴尾殿も今日歸山相成英艦應接其外近來之景況委曲致承知候處小銃之一條不測之儀出來幕吏之奸計實可惡之至御座候就而者春山花山兩人崎陽罷越薩邸入込買得を計候策其外蒸氣一條等大夫より委細被及御聞候處いかにもして小銃は買入不致候ては不相成候付可然取計候樣にと被仰出候由崎陽にても二千三千之銃は可有之早々出帆何

卒手に入候樣兩人へ可被成御授候尤代金之儀加何致可然哉期限を約し置候へば買入は可相成併し手付金は入り可申樣にも被相考申候爰元より萩申越候て埒明不申都合役座へ先達差越有之やう承居候へ共是れ又如何哉御疎無之儀には候得共內藏淸兵衞被仰談候樣存候いづれ總之代金丈けは參り居申間敷不遠內入用之儀に付萩御藏元役へ可申越と存候旁之趣申進候樣右田大夫鈴大夫被申付如是御座候恐惶謹言

七月十四日　　山田宇右衞門

尙々本文兩人最早出帆も難計候得共其內申越候樣にと鈴大夫被申事に御座候此段御含迄得御意候以上

桂小五郎樣

今日休日北條中文も留守其外遠方態々自小弟申上候

此書と相逸して山田は桂が同日付にて馬關より政府に出したる書前に出すを得旣にして又其十五日付の書此書今散逸を得たるを以て更に十六日を以て書を桂に送る其文に曰く

十四日十五日連日之御狀相達し拜見仕候彌御淸榮被成御滯關珍重奉雀躍候小銃手に入兼候付聞多春輔兩人崎行旁委曲之趣一昨日鈴尾大夫より承候就ては早速飛脚差立是れよりも委細得貴意候處行違に相成候樣被察申候其內先書は蒸氣船之件々不申上樣覺申候

一蒸氣船之儀最前極密申上候分其節貴兄にも同策有之尤薩船借用之御含之趣被仰聞候付靑木より手を着候儀は其儘に相成居申候夫は兎も角も近來一隻之蒸氣船無之故幕吏之我を侮候事も亦甚敷有之殘念之至に御座候何卒御買入相成度奉存候一昨日鈴尾大夫申上相成候節不得止候へば上海行蒸氣船小銃買入等之儀可然取計候樣被仰出候由に御座候へば已に御免許被爲在候付其段は御掛念被成間敷候只私式大因循輩前以案じ居候儀は是れ迄有志之氣儘に有之輒もすれば船將士官多人數乘込登樓携妓之諸費船之雜用に打込候行形にて迚も是れ迄之次第にては國力不續一隻之船も持續不相成傍と右等

諸費之爲め陸軍之軍須も乏敷武備充實も不相成是等之弊已み不申ては蒸氣船は持續不相成候付傍書に「此語否むには無之實境を申演候迄に御座候」其處は尊兄之御高配是祈申候且又一難は金之拂底に御座候年賦等之談判に相成候樣有之度奉存候尤蒸氣船も小形の商船可然夫にても砲之四門は被居緩急之節相應之奏功は出來可申候

一ミネー六百挺代金二十一兩隨分高價諸家諸郡より買得願之分へは振向候樣にも不相成乍爾外に無之候へば致方無御座被着御手候樣奉存候

一先日萩町人梅屋なる者崎より歸り其節ミネー手本もの取歸る代は銀錢三十枚之由尤彼地へ持參にて相渡候へば銃は馬關へ持付候由數は千挺の約束に仕置候盆後には再崎行之筈其節彌取極させ可申由萩より申越候へ共例之幕計にて梅屋再行仕候共手には入り申間布聞多春輔周旋買入候樣被仰越候樣奉存候

一騎銃も大抵賣捌候由近日代金取縮差送候樣爲仕可申村藏引請に候へ共今日迄は留守歟と相考申候

一應接場役員御心付之義も明日出局之上御藏元役へ傳達早速其運可仕候其內御說諭被成置候樣奉存候

右之外又々可申上候一昨日より今日迄休暇御米銀方先生も留守御國政方諸賢も留守掛の弟方も無人彼是都度々々相談も難相成不取敢御答草々得貴意候其內爲國貴體御自愛專一奉存候恐惶謹言

七月十六日　宇右衛門

尙々別紙鈴尾大夫馬關便之節尊兄へ返し吳候樣被相托候付差送申候其他は新宮より未だ下り不申候以上

小五郎樣

井上伊藤は十六日を以て程を發せり而して十八日に至り山田宇右衛門は更に書を桂に寄せ前書の精確を缺けることを記し言ふ鈴尾が公の允可を得たるは小松購買の事にして汽船購入と海外行とは更に允可を仰かざるべからず三事共に允可を經たりと爲せるは自己の誤聞なりしと

（山田の書）

一筆致啓達候然は一昨十六日御地より被差越候飛脚歸便を以海外行蒸氣船小銃御買入之儀鈴尾大夫より申上相成候付御掛念被成間敷段委細得貴意候處過日鈴大夫より被申上候節は侍御柏村居合にて其節現場之趣承知之儀に有之候處海外行蒸氣船等之件は全く申上相成候辻を御聞屆被爲在候譯にては無之薩邸へ相賴於崎陽小銃買入之儀御聞屆被爲在候由左候て崎陽に小銃無之海外行且蒸氣船買入等に立至候はゞ崎陽より其段相伺候か又は兩人一先歸國相伺候歟其上にて御評決も可被爲在御都合に御座候由右之次第に候へば先書は不都合之儀申上恐縮之至奉存候乍爾實は十四日爰元より飛脚差立候跡にて鈴大夫より蒸氣船之事は申越候哉との事に付其儀は不申越崎陽に二千三千之小銃は可有之段申遣候趣相答候處左候へば不申越哉と之事に付いかにもして小銃不買入候ては不相濟趣被仰出候段をば申越候と相答候處大夫安心之體に有之幸十五日御地より被差立候飛脚十六日到着に付十四日出之書狀不盡所を演候心得にて前顯蒸氣船之事屹度申上候參り掛にて畢竟大夫於御地御談合之辻申上相成候意味私野取違に相當り可申歟尤右は尊兄へ迄之儀にて兩人は已に出立之後に御座候へば事の利害得失に相拘り候儀には無之候へ共於御地鈴大夫御談合之趣に不喰合候樣御案じも付可申に付前斷違却之次第申上候間右樣御含置可被下候且又爲念申上候前顯にも相見候通海外行蒸氣買入等之次第にも立至候はゞ今一應御伺相成候樣奉存候萬一兩人入はまり崎より直樣海外行致候ては不相濟候間海陸之間孰れにても飛脚被差立其段兩人へ被仰越候やう奉存候爲右態と飛脚を以得貴意候恐惶謹言

七月十八日　　宇右衛門

尙々蒸氣船御買入之儀に付ては海軍局より大に激論と相成候趣も有之候付是又御含迄得貴意候以上

小五郎　様

（杉の書）

一書敬呈仕候殘暑去兼候處彌以御健剛可被成御起居奉恭賀候別後不相變御配念不少奉察候就中崎陽より小銃一件申遣候に付ては早速山田へ被仰越候由承知仕候爰元之議論も同人返書にて御承知と奉存候然處船御買求之儀に付ては少々海軍局掛り之者より逐々歎願致居候事有之候其意者ゴムボート船御注文相成候樣との事候なれども商船御買入にては不宜と申儀は無之造船心得居候者鑑定に無之ては壬戌丸癸亥丸之如く一兩年にして御普請其外諸雜費多く不御爲候間何卒此度も海軍局に居候內功者之人御選にて御遣し相成間布哉との事に御座候一通尤之論に候得共貴地差掛り候事に付其取計も難相成候間急便有之候はゞ聞春二人へ御書翰御贈被成壬戌船之覆轍不蹈樣被仰越候ては如何可有御座や是れは定て不平に可有之候得共念を入候上へ意を用ひ候儀宜布と相考候二隻船も航海心掛候者鑑定不致故乎實に大損相成候事は於老兄御承知と奉存候傍書に「壬戌は始より蒸氣釜破れ候位なり」異人と申ても商人は引當には不相成と相考候

七月十八日　孫七郎

## 小五郎樣

（山田の書の二）

十七日夜半被差返候飛脚之者昨夜半歸着三通之御狀相達し申候右之內御付紙に聞多俊輔兩人事十六日出立之由御本書にては蒸氣船之一件をも篤と被仰聞候御樣子に相見申候左候へば鈴大夫於御地御談合之次第も右件御決定にて有之たる樣相見申候然處爰元にて申上相成御聞屆被爲在候參り掛りとは及齟齬申候爰元之趣は昨日飛脚を以申上候通に御座候當節は鈴大夫も領分留守之儀にて困窮罷在申候縮る處昨日申上候通海外行蒸氣船等之事に相成候ては今一應御伺相成不申ては如何に御座候間聞春兩人へ急速被仰越候樣奉存候無左候ては他日內輪之破に相成可申歟と被案申候右申上度急に飛札差出申候間幾重も御領掌被成下度是祈申候恐惶謹言

七月十九日　宇右衛門



二陳來書之趣は評議之上御答可申上候へ共前件昨日申上候付御疎は有之間

布候へ共尚又爲念申上候

一萩より金二萬四千兩餘送方之儀今曉爰元へも申參候右は御地へ小銃持參と申儀評判有之兼て待兼居候事に付用意之金早速送り出候儀と相見如何之謬傳に御座候哉不相分候

小五郎様

海軍局は嘗て汽船購入を建議して未だ容られず常軌より論ずれば艦船購入は宜く海軍局に委任すべきに似たり今や此事馬關に於て桂等數人の間に議せられ將に實行に就かんとす事外間に漏る則ち勢議論を生ぜざるを得ず井上伊藤が太宰府より痛切の書を寄せて廟議の動搖せざるを冀ひしも之れが爲めなり而して政府は自ら公の裁可を得たる範圍を明晰せざるを得ざるに至れり是れ政府員が其誤聞を桂に通知するに至りし所以なり井上伊藤が帶ぶる所の使命にして變更あらん乎桂等の計畫は水泡に歸せざるを得ず桂等の一身を賭して爭ふべきは明なり而して海軍局は質問書を提出して爭へり政府員は其間に在りて百方調停を謀れり其苦辛も亦察すべし政府は質問に答辯せり而も言辭の間勢曖昧の痕あるを免れざるなり

（海軍局の質問書）

御國内海岸三面兼々懸念に有之追々海軍方より海軍御興隆之儀歎願仕候得共當今多端之御費用有之儀に付御許容不被爲遂無餘儀差控居候折柄今般他向より夷艦御買入之御窺等相濟せ候由然處兼て被差置候海軍局之者共一圓不承知實に驚愕之至如何之次第御座候哉後來之心得も有之儀に付篤と被遂御詮議御沙汰可被下候事

海軍各中

（政府之答辯書）

本書蒸氣船御買入之儀追々御評議も有之候得共莫大之御物入にて申出通り當今多端之御費用御繰卷難相調不得止事先被差止置候處當夏以來風説通り萬一も四境へ敵兵相迫候節防戰御策略も有之年賦等にて御買入容易に相整事に候

得ば其詮議被仰付度との深き思召之旨有之候得共素より御決議相成たる儀には無之候然處此度之儀は右御詮議筋とは意味違ひ於馬關斷然取捌候事に付被差留候程之儀全く公然と御窺相濟候事にては無之候後來迚も御繰合相調ひ御買入をも被仰付候節は何分之趣海軍局へも沙汰可被仰付候事

而して政府は又海軍局員に命じ七月二十二日之れを長崎に派し井上伊藤と交渉せしむ其言辭又頗ぶる曖昧にして船艦購入は之れを中止せしむるが如く亦否らざるが如く要するに局員をして井上伊藤の爲す所に參與せしめ因て以て買否の如何に拘はらず海軍局の感情を疏通せんと謀りしものゝ如し政府が一方には桂高杉の抗議を受け一方には海軍局の反論に遇ひ大に其處置に苦みたるの狀を察すべきなり

（海軍局員河野留之進佐藤彌三左衛門へ の内訓）

申含之覺

於馬關桂小五郎見切を以井上聞多伊藤春輔兩人崎陽薩邸へ差越銃舟御買入一條篤と御評議相成候處蒸氣船一艘裝條銃四千挺相添現金拂切御買得之儀は斷然被差止との御事にて態と崎陽迄被差越候間參着の上聞多春輔へ相對其由申聞せ以往御手煩無之樣申談可被取計事

但聞多春輔馬關出帆後日數相移り候事に付萬一も於崎陽先達て薩人等申合年賦御買入談判相濟居候はゞ申合篤と可被致見分候勿論追々海軍局より申立も有之候通り小船新造剛堅なる分にて以往御持續相成候程之見込有之候得ば御買得相成候て宜敷事に候年賦迚も高金之事に付又々容易に御買入難相整は必然なる儀當時勢ゆへ買得差急候得ども右適意之船に無之分者斷然可被相斷候假令前件之通談判相濟居候共現金拂切御買得は一切不相調候事

既にして七月二十六日の井上伊藤の書桂に達す前に出づ言辭悲壯人を動すに足る且つ購入交渉の大に進めるを見る桂之れを携へて山口に歸り政府員山田廣澤前原等に說き速に斷案を下さしむ山田等爲めに動く

（前原の書）

（前略）蒸氣艦之一事廣澤書面相認申候廣澤之論素好論にて御座候此餘は唯一統之決斷耳に御座候然處山翁今日も出勤無之甚煩念罷在申候右故事頗留滯に相成申候間老臺よりも早々出勤相成候樣御進奉願候翁出勤廟議一決候得ば此餘は唯御親斷に有之申候何れ隔靴搔痒氣味不能無之多事中眞の御請耳申上候

萬在拜青敬答

初秋晦日

木　圭　君　誠　拜

幾も無く政府員等の議蒸氣商船一隻蒸氣砲艦二隻を購入し商船は井上伊藤の斡旋する所を取り砲艦は海軍局に命じて調査せしむるものとし費用は撫育資金を以て本勘を補給し十五萬兩を支出するに決し案を具して八月三日公の裁可を得たり意ふに撫育資金は歴世嚴規あり容易に費消すべからずと雖ども今や藩國浮沈の大事に臨めるを以て遂に此議を決せしなり

（政府の議案）

海陸御手當向之儀先年來篤く被遂御詮議猶又今般御軍政御改正被仰付今日之處陸軍御急務之事にて歩兵共追々隊伍編制被仰付只今之形にて一兩年相立候得ば屹度御目途相附可申奉存候然處海軍之儀は去々亥冬海軍局御創建御買入等相成候丙辰庚申壬戌癸亥之四船にて屹度防戰可相成程之御艦にても無之折柄當春右壬戌丸をも沈沒せしめ今日に至り候ては蒸氣船無之猶更海軍も名のみにて徒器と均く只々學術修業迄之雛形同樣に付蒸氣船御買入之事局中よりも願出候得共御繰出し御難澁と申筋にて被差留置歎敷事に御座候勿論神州は環海にて始終之處海軍第一に付當今之形勢迫年海軍相開候は必然之事且又神州中御兩國は三面海岸之御國柄允海軍御興隆之御目途相立居不申ては幾年經候ても海陸御手當向御全備之期有之間布依ては外夷の侵凌は扨置今日之勢已に列藩割據之姿にて以往自然も分裂海軍を以襲來等致し候節は防禦決して無覺束近來幕府及列藩にて薩州仙臺肥前越前等武備之事には餘程心を用ひ外夷へ賴多分之銃を求め軍艦をも致注文候由畢竟遠大之見込有之候ての事に可有

之兩三年之後幕府其外海軍興張は必然に可有之其節御手後れ相成候ては自然兵威を以壓倒せられ土地之利潤も外より可被制樣成り行可申哉に付即今斷然被着御手可然哉と詮議仕候就ては蒸氣商船一艘（凡長二十間位堅剛にて價五萬兩餘）現金拂切御買入（同艦二艘凡同斷海軍局に於て取調圖面を以可伺）御注文被仰付度左候得ば商船にても御手に入次第時に臨では庚辛癸亥丙辰三船を組合假成海軍之御備立も可相調無事之節は御國產爲交易對州北國等へ致運用候得ば又富國之御手段も可有之今日より漸次被着御手候得ば終に海軍大成之期も可有之御事かと奉存候右御買入之儀勿論莫大之御金にて於御本勘御繰卷は決て不相調孰れの道御撫育方御本勘申合御要用金之內十五萬兩御引當之外何共御手段有之間敷右御撫育金は英雲公御創建以來御代々樣深き思召も有之容易に御遣拂難被仰付御事に候處前段之次第將來天下之形勢如何可相成哉難決候得共乍恐實に神州之興廢御當家存亡に係る大事件に付此餘は利害得失篤と被遊御洞察何分之趣御親斷を以て御決定被仰出度奉窺候

但當春以來種々幕府之御嫌疑に觸れ候趣も有之本文御買入其外御決定相成候筋に候はゞ薩藩へ御賴も可然哉詮議仕候

政府の內議決するや桂は直ちに人を長崎に遣り之れを井上伊藤に報ぜり而も桂は頃來の事態に見て心頗る感ずる所あり事に托し將に萩に赴かんとす實は退隱の意を漏せるなり（長薩和解開國論等に就ては藩內の物議あり又馬關統一論に就ては長清二支藩の反對あり此等の事皆桂の意に滿たざりしものあるが如し）會〻伊藤の書至り小銃は薩船を以て之れを馬關に廻送し薩人之れと共に馬關に至らんとすと云ふ政府員は百方桂をして其意を翻さしめんとし且つ薩人の應接は桂にあらざれば其人なしと爲し切に其事に當らんことを慫慂す桂亦遂に其言に從ふ

（山田の書）

今日は度々御來駕被成遣難有奉存候扨明日より御歸萩之義に付愚案も有之廣前中三人へ申越候處右三人よりも是非共暫く御抑留仕度薩來關之節御配慮被成下候やう懇願仕候聊御嫌疑も被爲在候へば別に一人被差添候て可然且又餘之儀は御差置薩應接之事而已被爲任候得ば相濟儀に可有之他藩を賴に仕候義

は引當に難相成事哉にも可有之候得共今日之勢薩に結候へば幕威を挫する之一策に可有之是畢竟之處皇國之御爲に相成肝要之大事件に付何卒少し御見合右相濟候て御歸萩に相成候樣是祈申候爲右草々頓首

八月五日

二陳及深更御面倒申上候へ共今日は廣澤其外留守にて唯今委曲申越候付無餘義夜中御妨申上候以上

木　圭　君　　山　迂

（林良輔の書）

奉謹誦候過刻は御賁臨辱仕合奉多謝候山翁御談合御歸萩御決定被成候由兎に角馬關之件においては老臺を奉煩候之外手段無之と於微生相考唯今より同僚申合せ又々何分可申上候爲其草略復上恐々頓首

仲秋初五

（山田の書）

今朝は御妨仕候又々乍御苦勞いづれ馬關御出張不被爲成候ては不相濟由明日は御沙汰相成可申候尤今朝拜話之趣は侍御同局三四人之胸中は相決申候付右樣御含置可被遣候左候て御賢慮之處一ッ廉にても御調御登局被成下候はゞ其分を以御前會議相成御評決に相成可申候其内別段に御氣付も御座候はゞ又其取計も可有之何卒明日は御登局被成下候樣奉希候右爲旁草々敬白

八月六日　　宇右衛門

小五郎樣

既にして桂の命を受けて馬關に至るや八月九日の伊藤の書に接す（前に出づ）桂は直ちに其旨を山口政府に報じ政府員之れに答ふる所あり心頗る喜び藩議確守を誓ひ小松大久保等待遇の事の如き用意甚だ力む

（山田の書）

本月十三日之芳書昨夜相達致拜誦候爾後御清榮被成御滯關之由珍重奉存候此内崎陽へ被差越候飛脚罷歸候由にて其後之趣都合相分薩船も着關之上は直樣

上坂致し此度は小松歟大久保歟兩人之間乘組可致趣に御座候由左樣とも有之候へば國之幸に有之兼て御決議之趣を以何も御應接專要奉存候就ては進物之儀被仰下候處一昨日歟在合御國鍔差送り其外何こそ品柄も無之案し居候處當節大納戸御道具山着之分混雜に付部類選分け取掛り居候付詮議致候得共未着の品多く尤在合之内吉岡一文字（銘は一の字計り小松來り候節之引當）此品は上物にて追々出掛候を植木抔惜み留置候由尤折紙有之候へ共山着不仕萩に有之此度之間に合不申候間追て幸便御送方之御挨拶等被成置候場合も有之候はゞ御樣子次第又々差送り可申折紙代料は金七十枚と歟申事に御座候新刀肥前忠國（大久保來候節引當て）此品は些と不充分（大久保へ對して也）尤研少々手間掛り明夜より飛脚を以送り出可申候乍爾席上之案と違ひ現場御談判之餘此品は難贈氣味も可有之趣次第にて小松は不來大久保來候節吉岡を被贈候ても可然被相考右等之義は何も其場の御都合次第に御座候其外は此間送候鍔にて相濟可申奉存候何分爰元在合無之大に込り申候

一先日之蒸氣船は四萬兩も出候樣覺居候處此度來書之趣にては釜其儘に候得ば三萬ドル釜を仕替候へば四萬ドルと有之左候へば下料に有之別て仕合申候横濱通船之節少々馬關へとゞめ置點檢相成候得ば至極都合宜敷藤井長嶺へ早速出關之沙汰可仕候釜は序に新釜に仕替もらひ候方可然と御内慮も被爲在於僕等も其議に罷在申候尤二三ケ月にて相調候樣有之度奉存候

一中島四郎儀も如來諭出關之御沙汰可相成候

一代金少々不足仕候由萩へ可申越候福龜よりも申越候儀と相考申候其内少々之儀にて現場差掛候はゞ於御地御配慮是祈申候

一與右衛門相賴先達て米買得有之賣拂之儀相授置候處場合を見合候由大抵ならば早く賣捌候樣御授可被成下左候て右金を暫時不足之處へ御遣被成候はゞ追て御本勘へ差引談仕可申候

一小銃萩廻し之儀明日當り正木市出鴻可仕に付申合後便何分之趣可申上候萩之配り方條理不相立爰元御軍制方にも目途を失し候樣相成候付大抵ならば

少々物入有之候ても一先づ山口へ取寄候上にて萩送り相成候へば都合宜敷
様に被考申候

一ゴンボート之論昨日委細に被聞召候爰元にて考候儀は二十間計りにて六十
馬力之分可然相見申候（代金四萬ドルと云）公意も右様に有之申候海軍局より申立候處も
蘭人レーマンと歟申す尊兄於馬關御應接被成候者より承り候由右レーマン
と歟於崎陽藤井勝先生に仕居候士官之由に御座候同間數にて六十馬力と百
二十馬力之輕壓重壓は無之由申事に御座候委細中島藤井等出關御直に御聞
可被成下候

一前原より與右衛門へ相賴六丸銃山口差越候筈之由右銃は私方迄可參に付預
り置吳候様前原申置候此飛脚歸便差越候様與右衛門へ御授可被遣候

一アメリカ製六丸短銃（本込にて筒折る分也）有之候はゞ一挺御願申上候只今一挺古き分所
持仕候得共別に新ら敷分求度存候玉は二三百添候様是又奉願候

右御答且御願旁草々如此御座候他は追て仕立候脚便又々可申上候其内爲國御



自重專一奉存候恐惶謹言

宇右衛門

八月十五日午夜

尙々今日休日又々例之通大に不便利御入湯も被爲在旁狼狽漸一文字丈差送
り不心配無申譯候得共實に致方無之候尊書は昨夜木彦へ渡し入御覽候付書
中趣廣澤へ申越候處別紙之通返答差越申候此内之不始末大ごりに御座候今
朝又々公意相伺素より御確定に被爲在申候

小五郎様

（廣澤の書）

難有奉拜誦候崎陽飛脚歸關桂小より來翰之趣委曲奉承知候薩一件何も都合能
様相見へ爲國家大幸不過之一段之事奉存候小松大島抔（山田傍書に大久保との違也）被下もの
は御思召之通三處物（同傍書に今曉乞合辻に候へ共宜敷品無之に付刀送候也）可然御同意奉存候蒸氣商船も釜仕
替論は大きに御同意少々二三ケ月後れ候ても新釜相成可然事に奉存候右艦點
檢は追々海軍局申立之趣も有之藤井其外被差越可然尤海軍御興隆論は素より

此内御決議通り聊御動揺有之間布併折角海軍局御創建相成居候事故（同傍書に以下は御含置可被下候）疎外之體無之様有之度孰も一致なくては不相濟次第なり迚も此度御買入艦之儀は深重之御旨意有之事に付決て暴論事を破る様之儀は何處迄も押へ不申ては不相叶事と奉存候昨日之圖面（同傍書に昨日ゴンボート圖を以海軍局より申上候也）明朝迄には精選差出筈に付彌六十馬力軍艦二艘は御決定被仰付度左候て其趣を以篤と桂小へも申越置其節藤井其外一同出關被仰付可然事歟と奉存候爲御答草々他は明日拜青萬可申上候頓首

八月十五日

宇右衛門老臺　　藤右衛門

（山田の書）

昨日得貴意候通肥前忠國之刀只今出來上り候に付態と以飛脚差送申候研揚候へば隨分見事に有之申候是は先書之通大久保來候節之引當てに御座候今夕研揚候位に付飛脚着仕候はゞ直様一應御拭被成下候様奉存候無左候得ば鏽出候も難計奉存候

一軍艦御決議之趣旁に付中島藤井出關被仰付候就ては書狀今日廣澤相認候處今夕仕出候哉否存知不申候兩人出着之上委曲御直に御聞取可被遣候先は右刀差送候付夫而已申上候他は先書尙今夕廣澤より仕出之書に悉し候に付不具候草々頓首

八月十六日夜

二陳先書尾御願仕候通六丸短銃（本込にて筒の折れる分）有之候はゞ宜奉願候以上

桂小五郎様　　山田宇右衛門

（山田等連名の書）

益御清適御奉職奉敬賀候薩船も最早着關にては無之哉相考へ小松大久保之間乘船罷越候由至極御都合能事扨々御配意之御儀爲國家御盡力奉懇願候陳ば蒸氣船御買入可相成分近々横濱乘廻之節於其御地點檢爲致可申との趣にて被仰越候通中島四郎藤井勝之進長嶺豐之進三人共御地被差出候段令沙汰候間諸事

着之上御差引可被成候釜之儀は何卒新釜仕替有之度左候ては餘程下直もの木製彼是御都合能事と存候先達て御決議軍艦ゴンボート之事海軍學校より圖面共委敷取調へ逮御聞先只今にては六十馬力長さ十二丈幅三丈深さ一丈小形之分可然との儀被仰出尤老兄より夷人へ篤と御讃談之趣も有之此餘少々之大小は現談判之上相決候て可然委曲四郎其外より御聞取可被下候猶又彌御注文にも相成候はゞ手附金相渡置不申ては請合候間敷凡の入用金相分り次第可被仰越候左候得ば御金局之繰合も可有之御注文之御手組粗相整候はゞ其節何分之趣被仰越可被下何卒右軍艦二艘御誂へ中勝之進其外一兩人仕調場所被差越置候はゞ造立其外屹度見窮も出來造船術於御國成り立可申彼是御含置程克御談判可被成候右爲可得御意如是御座候謹言

八月十六日

藤右衛門
誠一
宇右衛門

小五郎様

井上は七月二十八日小松と共に鹿兒島に赴き屢〻薩の老臣桂右衛門及び大久保一藏伊地知壯之丞等と會談し兩藩間沮隔の事情を陳辯し將來提挈の必要を論じ從來の感情を融和するに力め開國勤王の必要を說き滯留十餘日にして再び薩藩の汽船に乘じ長崎に歸れり（八月二十日前後なるべし）井上の長崎に着するや伊藤と議し購入の小銃は薩人に依賴し上國に往くべき薩船蝴蝶丸に積載して三田尻に直行運搬し（三田尻とせるは一は揚陸後の便利を思ひ一は世上の耳目を避くる爲めなり）購入計劃の木製蒸氣ユニオン號は其横濱行の途上馬關に寄港し海軍局員の檢査を受くることゝし井上は蝴蝶丸に便乘して積載物の宰領を爲し伊藤は銃艦購入其他長薩間の交渉事件に頗る力を盡したる上杉宗二郎と共にユニオン號に便乘して馬關に赴くことゝし八月下旬蝴蝶丸先づ揚錨しユニオン亦其後を追て開港し一は三田尻に一は馬關に着せり（桂の書翰に據れば伊藤は二十六日夜馬關に着し井上は二十七日三田尻に着せし筈なり但し林良輔の書翰に據れば井上も二十六日三田尻に到着せしなり蝴蝶丸は豫定よりも早着せしならん伊藤上杉井上と別船に分乘したることは左揭の諸書に考證すれば自から明白なり又當時薩の海門丸も長崎より馬關に來れり蝴蝶丸に積載の殘餘の小銃は別船にて送るとの協商あり其用に供せること明なり十月十八日の佐々木俊藏の書中に「小蝶丸幷

跡二艘も無別條御同慶之至奉存候二艘出帆無間御兩兄潛伏」とあり二艘は卽ちユニオンと海門なるべし桂は直ちに之れを山口に報ぜり廣澤山田直ちに答書を桂に寄せて井上伊藤の盡力を稱揚し賀意を表し且つ力を藩議の鞏固に盡すべきことを誓へり

（木戸より廣澤への書）

彌御壯榮に御奉職奉敬賀候漸昨夜春輔も歸關聞太も今日は薩船にて三田尻まで罷歸候都合に御座候先々安堵仕候大略は宇翁へ前々より之行かゝりも有之候に付申越置候間御承知可被遣候實に前途の處は中々尋常にては六ヶ敷昨年の止戰の甲斐も屹度相立是非勝ちおふせ不申ては正も邪も分明には相成申間敷乍此上一御盡力奉祈念候さてまた海軍局軍艦論且薩關係の事實に弟の力にて往々の處甚無覺束奉存候間心事宇翁へ申越歎願仕候譯に御座候間何卒御盡力被成遣御免被仰付諸彥の內よりどなたか一人御引受にて御出關可然奉存候誠に薩等の事業の目途の相立候には實にぞく々々仕候せめて他日の勤王丈けなりとも人々に餘り後れぬ樣是非々々有之度奉存候肥後の論は實に□□言のみに御座候處武備の方は國をかたむけ盡力致し候由肥前閑翁は益油斷は不相成先達ても崎陽へ微行奉行も一圓不知位にて軍艦其外商人へも大家之部へは被罷越候由尤船將等とは餘程議論も被致拙者も當時は隱居にて世事は嫡子に讓り無事に罷在候事に付何卒英國へも罷越女王にも御面會致し色々御相談も仕度日本も此なりにては懸念などゝの噺しも被致候由夷人ともゝ大に感伏致し上陸之時は王侯之禮を以て二十幾發と歟祝砲相發し候處直に肥前臺場よりアドミラールの禮を以十七發相發し候由奉行を始崎陽の者大に驚き致し候由一奇談に御座候翁も高年に付さほど恐るゝ事も無之候得共乍去油斷は相成不申此節肥前人來訪□□□甚不審千萬に御座候いづれ今明日には面會可仕と存居申候先は右御願旁申上候間何卒弟之處は御憐察被下御了簡奉願候諸彥の內是非々々御任し可被下候先は爲其匆々頓首拜（八月念七）

尙々不惡御推了何卒可然奉願候拜

（廣澤の書）

昨二十七日之御書翰相達委曲奉謹讀候先以御剛健被成御滯關奉恭賀候扨銃御買入一件も無別條相調既に昨今三田尻迄來着聞多乘組罷越候由一統大安堵仕聞春兩人共不容易苦心之程致遙察候薩一件も不一方次第孰れ是迄之行掛も有之難相解者も不少は尤之事幷彼藩正氣之者之心を採候得ば漸次一藩之氷解も可相調何分老兄之御配意千々萬々御苦心之至奉存候追々山宇迄被仰越候趣承知仕聞春兩人共崎陽行に付て海軍局より彼是申立之趣等にて兎角駈違之儀も有之畢竟政府其外不徹底より差起り候次第奉恐入併先達て御歸山之上海軍御興隆軍艦御注文をも被仰付候迄に彌御決議相成り以往は毛頭齟齬之儀は有之間布に付海軍局之俗論は何處迄も御敎諭屹度海軍之大規則相立候樣有之度奉存何卒右薩一件軍艦御注文等之事丸に御委任被爲在度爲國家只管奉願候己往之處は御涵容被成下此内御出足前被仰付之御用筋都合之御目途相立候樣幾同も御盡力是願候銃取捌き一件に付山宇翁正市只今より三田尻へ罷越前件行違之趣篤と聞多へ宇翁より辯解仕筈に付聞多歸關の上委曲御聞取可被下候肥前閑叟公之崎陽行實に愉快之事油斷不相成次第薩之遠大之見込抔可恐事御當家においても屹度將來之策略相立不申ては多年之御正氣も相貫き不申次第確乎御不動無之ては元より御維持無覺束事と奉存候得共御存之通僕輩力之及所に無御座誠以奉恐入併居官中は此内御決議通りは屹度貫徹仕候樣御手傳仕度奉存候間老兄御奉之御用筋は無御辭退御盡力偏に奉願候廟堂之小動搖は畢竟僕輩之罪にて老兄より先達て退き不申ては不相濟次第御憐察奉願候右御答迄に匆々申上縮其中御自重第一奉存候謹言

八月二十八日　　藤右衛門拜

小五郎樣

（山田の書）

二十六日二十七日之尊翰今朝相達し拜誦仕候聞春兩生も追々歸着小銃其外御積り通相運爲國家奉御同慶候

先達て崎より申來候木製蒸氣船着關に付ては點檢之人柄兼て被仰越候通勝之

進出關仕居候付何も御駈引可被成下候長嶺事は萩へ申越有之候へ共此度之間に合候程は無覺束奉存候機關新古善惡等之儀は都合之處は誰にても相分り可申候

海軍論に付ては御斷之趣追々被仰下御腹入に無之儀を達てと申も御無理を申上候やう御座候得共些と意味違も有之彼是之趣は私今日三田尻罷越聞多迄直に可申談奉存候間聞生より御聞取可被成下候薩西肥其他武備興張之趣承候ては只足すり仕候而已に有之爾し御國之儀は隔海而對敵候事に付足すり而已には被居不申千慮萬辛何と歟して此大難を相凌不申候ては死て不瞑次第に候

萩町人梅屋一件に付ては正木より書狀差上候樣申候付委細私よりは不申上候全以御武具局より梅屋を差越候譯にては無御座候間右樣御聞濟可被下候

別紙兩通差返申候只今より三田尻罷越候付眞之御答迄草々申上候他は又々可得貴意候其内御自重御盡力是祈申候頓首

八月二十八日　宇右衛門

二陳小銃來着待兼居候處一統相競申候尤政局のみならず御兩國一統之人氣も被想像申候以上

小五郎樣

三田尻に着したる小銃はミネー四千挺にしてゲベール銃は後ち別船を以て之れを廻送し（十月四日山田宇右衛門より桂への書翰中「劍銃其外後仕出之船只今同着之義小郡より申越候二千餘之農兵實物に相成雀躍之至御座候」とあるもの此れなるべし）而して汽船購入の一事は海援隊上杉宋次郎委托せられて主として斡旋することゝなりたり

（林良輔の書）（此書は山田が三田尻より山口に出せる報告の轉報を得て後ち林の桂に送りしものなる如し當時林は山口には居らざりしならん恐らく一時萩に歸り居りし歟）

別書相認候後山口報知中に薩船へ托候ミネー筒四千挺三田尻へ過る二十六日來舶聞多乘組候由船將は格別時勢談出來候仁に無之小松大久保等は不參趣申越候誠に御盡力之功驗相顯れ國家の幸甚不過之定て御承知可被成とは奉存候

得共爲國於僕等奉謝候ゲベールは一同にては見目いかゝ敷に付近々別船にて送候由尙亦木造商船は近々春輔乘組其地へ廻り候由萬々相運御愉快之程想像仕候

八月二十九日

木圭老臺梧下

二木

此時に當り政府は海軍興隆物產疏通に意あり而して桂等は之れに因りて長薩融和の助長に意あり桂高杉が前後馬關駐在應接方越荷方對州物產取組に任ぜしも之れが爲めなり（前章に詳なり）其對州物產と云ひ薩摩を云はざるは外嫌を避けしものにして其實薩藩と意志を通ぜし所ありしなり故を以て九月九日藩內に令して薩船の來るものは之れを厚遇し其薪水缺乏品を請ふものは之れを供給せしむ銃砲船艦購入の事件の爲め勞を取れる薩藩老臣以下に物を贈て之れを謝せしも亦此時に在り（桂右衞門小松帶刀市來六左衞門大久保一藏伊地知壯之丞等十人に紙綿紗等を贈ること各〻差あり又銃器運送船の艦長士官水火夫等に贈る所亦各〻差あり）

（令文）

他國船入津締り方に付ては追々嚴重御沙汰相成居候處此度薩州と御取結之趣有之御彼方蒸氣船其外商船等追々可罷越に付諸事手厚く取扱薪水其外缺乏の品買得申出候はゞ賣渡可申候此段心得の爲め達被仰付候事

銃艦購入の事是に於て一段落を告げ長薩融和の議も亦大に其歩を進めたり然れども井上伊藤の二人は潛伏の已むを得ざるに至れり彼等が唱導せる開國進取の論は未だ廣く人の爲めに容られず馬關統一論は長清二藩士の爲めに嫌はれ長薩融和說は壯士等の忌む所たり又其鋭意從事せる銃砲船艦購入策は海軍局員の屑しとせざる所たり隨て人身攻擊的非難も發生せしならん當時長藩進取の論策首として桂を中心として馬關に集れる高杉井上伊藤等一團の志士の謀議に出づ井上伊藤二人の潛伏は蓋し馬關の進取論と諸方面との衝突の結果なるべし而して其主因は長清二藩士の反對に在るに似たり加ふるに此時期に於て馬關統一論は藩議大に其歩を進め長府と交渉中なるが爲め其論の張本と認められたる二人にして政務の表面に立つときは二藩士の感情を激し事を敗るの虞ありて故さらに

此の如くせしものならん歟但し二人陽に潛伏と稱すと雖ども井上は山口に出で伊藤は馬關に留り仍陰に國事に盡瘁せり（此頃井上より在長崎の越前人瓜生某に寄せ井伊二人の苦境を述べ或は長崎に赴かんとせる旨を記せる書翰あり古谷氏の藤公餘影に出づ）

（井上より桂へ の書抄）

如命成敗利鈍は臣子の云所にあらず前途の目途相立人事盡し不申ては今日邦家を維持の良策此外に無之何とぞ老兄には根元御堅め東子は馬關と力を合せる樣相成候はゞ弟等假令粉骨碎身するも恨むる所無之候關地も本藩へ相屬し候都合之由誠に弟之病根に候處實に大慶至極最早此上何も兄弟の如く親交片時も早く武備も充實致し候樣相成度渴望仕候云々

一御出足前弟伊藤兩人之處當分隱遁之事實に弟も其意有之候間進退如何可仕哉老兄や東行子を師とも親とも思ひ候故實に年は取りても不相變向不見之人故手綱のゆるまぬ樣御指揮偏に奉賴候只弟等之死生二兄之命之まゝ何ぞすまぬ事とも有之候はゞ死をすゝめられ候ても立腹抔は思ひも寄ぬ事に候士は知



已者之爲に死すと云事實に兩國中に我心事を克知り吳候者は他に無之遺憾に候弟等之不德乍去爲邦家なら未だ死すら辭じ候事迚は無之候何も御推察候て進退如何可仕候哉御答是祈候○且又處々隱れ臺場も弟より長府へ命じ候ても甚以如何敷候間是は奇隊へ被仰付申合せ人力等は本藩より御出費有之候樣奉祈候云々（九月二十五日）

（高杉より桂へ の書抄）

新地兩先生之事も佐世と御談示被下候樣願候云々（十月二十一日）（著者曰く當時井伊共に居を新地に構へ閉居したりと聞けば兩先生は卽ち井伊二人なることと明なり）

（伊藤より桂井上へ寄せたる書抄）

尙拙者は依舊潛居仕申候間御放慮伏而奉冀候井老臺は御用事相濟候へば片時も速に御歸關奉待入候自然上杉右蒸氣船へ乘組來候も難計と奉存候（十月二十三日夜）

（伊藤より桂へ の書抄）

私儀は依舊逸居候間御放念思召可被遣候（十月晦日）

（高杉より桂への書抄）

新地兩先生事も能々案じ候得ば唯今之處にて少く被慎候はゞ人の噂も七十五日強て動搖には非及かと存候爾し此邊は前原へ態と御談奉願候（十一月二日）

## 第十二章　慶應元年冬期の大勢

將軍の辭表○京攝の騷擾○外國使臣の要求○西鄕等之歸藩○大久保の兵庫開港反對の建議○條約勅許○各國軍艦の退去○將軍辭表の不認可○二條城中の集會○糺問使派遣の幕令○再征反對の衆論○幕府の內情○糺問使の派遣○再征軍の部署○廣島應接○諸侯召集の議○防長の主張

十月朔日將軍家茂德川玄同小笠原壹岐守をして其將軍職辭表と意見の奏疏とを齎らして上京せしむ辭表の意は家茂幼弱不才其任に堪へず因て之れを辭し慶喜を以て後任となさんことを乞ふに在り奏疏は條約の勅許を請ひ此事容れらるゝに於ては外は外人制馭の實備を立て內は防長追討の功を遂げ上宸襟を安んじ奉り下萬民をして其堵に安んぜしむべき志なることを言ふ翌二日其明三日を以て大坂を發して伏水に一宿し陸路江戸に歸るの旨を公示す一橋慶喜は京都に在りて德川玄同小笠原壹岐守が將軍の上疏を齎らし上京するの報を聞き松平肥後守

と共に之れを伏見に迎へ就て其故を問ふ玄同命ありと稱し語るに實を以てせず慶喜等空く歸京せしも玄同の語氣に由り其概略を推知せしが故に慶喜は關白に謁し玄同等の使命は之れを斥けんことを請へり玄同等は二日を以て京に入り將軍の辭表と上疏とを關白に呈せり關白は上疏を以て單に條約勅許に關するものと豫想せしに其事は之れを別紙に載せ本旨の將軍の辭職にありしを以て大に驚き慶喜玄同及び松平肥後守松平越中守に命じ將軍の歸東を止めしむ三日將軍大坂を發し伏見に至る陸路東歸せんとせしなり卽夜慶喜以下四人馳せて之れに赴き辭職の不可を論じ且つ說くに單に辭表を上りて直ちに歸府の途に就くは恭敬を缺くの嫌ひあるを以てす將軍其言を容れ翌四日二條城に入り病と稱して朝せず而して慶喜は小笠原壹岐守松平肥後守松平越中守と共に參內し兵庫の開港は之れを拒絕すべきも條約に至りては速に勅許あらんことを奏請す蓋し兵庫は京畿に接近せるを以て開港の勅許を得るは容易に望む可らず加之會津藩士の極めて之れに反抗する者多ければ姑く之れを止め先づ條約の勅許を得是れに由り外國公使等をして兵庫先期開港の要請を撤回せしめんと計りしものゝ如し朝議紛々多く勅許を不可とし夜を徹して猶決せず五日に至り決答の期限既に迫れるを以て慶喜等は書を傳奏に上り力を極めて勅許を請ふ諸卿の議論是に於て稍寬に赴くと雖ども尙諸藩の議論を慮り更に之れを在京の諸藩士に諮詢し然る後事を決定すべきの議を發し急に諸藩士を宮中に召集し國事掛議奏傳奏幷に一橋慶喜松平肥後守松平越中守小笠原壹岐守等列席し其意見を諮ふ此時參集せるは薩藩大久保一藏內田仲之助井上大和熊本藩神山源左衞門上田久兵衞淺井新九郎岡山藩伊藤左兵衞澤井宇兵衞花房虎四郎土州山田駿河荒尾勝作喜多村彥三郎津田斧太郎久留米下村貞二郎久德與十郎鳥取安達精一郎會津野村左兵衞大野英馬依田源次外島機兵衞上田傳次廣島富次郎芝太一郎桑名岡本作三右衞門森彌一右衞門三宅彌三右衞門立見鑑二郎高野一郎右衞門筑前本鄕吉作加州里見甚三郎柳川宮川登三郎津藩戶波明次郎澤井半左衞門越前小林賢次郎佐賀長森傳次郎藝州熊谷兵衞なり是れより先き薩藩は列侯召集の議幕府に容られず反て防長再征の師を出さんとせしを見て兵力を京邸に備ふるの要を感じ西鄕吉之助俄に藩地に歸り大久保一藏留て京に在り一藏は越老侯慶永に說き共に謀る所あらんと欲し前月下旬福井に至る會〻外國公使等兵庫開港を迫り一橋慶喜爲めに大坂に下れる飛報に接し急に京都に歸り關白に上書して九月二十八日兵庫開港は苟も聽る

す可らず宜く諸侯を召集して意見を問ふべし公使等若し疎暴の擧あらば速に之れを討伐すべしと陳す其意主として諸侯召集の素論を遂げんとするに在るもの、如し既にして五日宮中の列藩會議あるに及び薩藩は公使要求拒絶の議を執り岡山藩之れを贊す而して他の諸藩は兵庫開港を拒絶し條約を勅許せらるべしとの議を協贊せしを以て（土佐肥後久留米三藩專ら之れを贊すと云ふ）議遂に決し即日傳奏より朝旨を幕府に下し其請を允し條約は勅許し而して條項改訂を命じ兵庫開港は之れを允さず其文に曰く

（勅許文）

條約之儀御許容被爲在候間至當之所置可致事

（別紙）

此度兵庫へ夷船渡來に付昨四日大樹より一橋中納言松平肥後守小笠原壹岐守等を以段々遮て言上有之徹夜至今曉諸藩をも被爲召御諮問之處十に八九御許容にても可然と衆說暗合誠に不被爲得止別紙之通被仰出候事

## 大樹へ

（別紙）

別紙之通被仰出候に付ては是迄之條約面品々不都合之廉有之不應叡慮候に付新に取調相伺可申諸藩衆評之上御取極可相成事

兵庫之儀は被止候事

翌六日將軍老中松平伯耆守に命じ兵庫に赴き事を處せしむ伯耆守即日大坂に至り外國奉行山口駿河守と共に直ちに兵庫に赴き先づ英國公使に談ず聽かず因て佛國公使ロッシュに就き事情を陳述して斡旋を依賴し遂に閣老連署の書を裁して之れを與へ纔に四國公使の承諾を得たり是に於て各國軍艦九日を以て皆兵庫を去る顧ふに各國公使の要求は條約勅許兵庫先期開港關稅率改定の三項にして之れに對し馬關事件償金の三分二を減ずるにあり而して幕府は條約勅許の一事のみ裁可を得たり關稅の事は初めより朝廷に奏せず因て條約勅許の事は明に公使等に答へ兵庫開港の事は朝旨を明示せず關稅は改正に同意し而して馬關償金

は低減を求めず以て一時を糊塗せしなり朝廷既に條約勅許の旨を幕府に傳へ同時に將軍の辭職を許さゞるの旨を令したるを以て將軍書を上りて命の辱きを拜す會〻軍艦奉行兼外國事務取扱栗本瀨兵衛急命を帶びて江戸を發し十月三日夜京都に着す將軍命じて江戸に歸り外國公使に面し兵庫先期開港を拒絶せしむ瀨兵衛命を奉じて江戸に歸り尋て十一月外國奉行に任じ諸公使と議し遂に其承諾を得たり十一日將軍二條城に於て政務補翼を一橋慶喜に政事相談を松平肥後守に命じ二十五日在京の諸侯及び幕臣を城中に召し告るに朝旨の優渥なるが爲めに東歸の念を止め黽勉して宸襟を安んぜんと欲するの意を以てす二十七日將軍參內して罪に伏し恩を謝す朝廷之れに勅答を賜ひ天下の耳目を一洗し公平の政を行はしむ時に幕閣は我長藩に對し糺問使派遣の議を決し是日小笠原壹岐守は藝藩家老野村帶刀を召し命を傳へしむ其文に曰く

毛利大膳父子伏罪之處御疑念之廉々有之候に付右爲御糺大目付永井主水正御目付戸川鉾三郎松野孫八郎陸地其他へ被遣候間最前相達候通末家幷家老共之內且奇兵諸隊重立候者三四人十一月を限り廣島表へ罷出候樣大膳へ可相達候尤自然末家幷家老同所へ罷出居候へば御目付到着迄可被差留置候

幕府既に長藩再征の勅許を得ると雖ども朝意は長藩處置の寬大を期し諸藩中薩藩以下亦再征の無名なることを論じ之れに反抗する者漸く多し當時幕府は老中阿部豐後守松前伊豆守の罷められしより閣老中前後進退あり而して小笠原壹岐守（長行九月四日老中格と爲り十月老中と爲る）板倉伊賀守（勝靜十月老中と爲る）專ら事に當れり（松平周防守康直は十月一旦罷められ翌月復職す蓋し兵庫開港事件に關し阿部松前の二閣老と稍其說を異にせしが爲めならん而して大老酒井雅樂頭忠績十一月老中本多美濃守は十二月各〻其職を辭す）幕府亦再征の不可なるを覺知せざるに非ざるべしと雖ども旗下の諸士會桑二藩士の頻りに征長論を主張するが爲めに今に及び復之れを中止するが如きは騎虎の勢復爲す可らざるものあり且閣老中亦或は幕府の威權を以て長藩に臨まば之れを壓伏すること難からずとの念其胸中を脫すること能はざるものありしなるべし是を以て幕府は我諸末家上坂の命を奉ぜざること明白なるの日に於て尙一方に於ては前役に在りて尾張總督と意見を共にせしが爲め辭職屏居せし永井主水正（尙志）戸川鉾三郎（忠愛）を

起して糺問使と爲し之れを廣島に差撥し又一方に於ては從軍諸藩の部署を定め十二月十日を期して兵を防長の境上に出さしむ幕府の意蓋し長藩に示すに恩威の二ッを以てし之れをして命に從はしめんことを望みしなるべし然れども其實は寛猛兩ッながら其活用を失し徒に自ら岐路に彷徨せるの觀を免れざりしなり

幕軍の部署を見るに攻進路を藝州石州上ノ關下ノ關萩の五口に分ち藝州口には松平安藝守藝州を以て第一陣とし松平近江守藝州末家を之れに附屬す井伊掃部頭を以て中軍先鋒第一陣とし井伊兵部少輔越後與板を之れに附屬し榊原式部大輔越後高田を以て第二とし松平三河守津山を第二陣とし松平兵部大輔明石を以て其第二とし松平越前守は大坂に出でしめ又松平備前守備前脇坂淡路守龍野を以て此口の應援に充て而して松平兵部大輔以下は後命を待て出兵するものとす中軍は將軍の本營を謂ふなり石州口は阿部主計頭福山を第一陣とし松平右近將監濱田龜井隱岐守津和野を第二陣とし松平因幡守因州松平出羽守松江を以て此口の應援に充て而して龜井隱岐守以下は後命を待て出兵するものとし紀伊中納言紀州藩主先鋒總督の稱を以て之れに次ぐ先鋒總督とは將軍に對して謂ふなり上ノ關口は松平隱岐守伊豫松山松平式部大輔松山世子伊達遠江守宇和島を第一陣とし奥平大膳大夫中津松平壹岐守伊豫今治を以て此口の應援として隱岐守以下皆後命を待て出兵するものとし下ノ關口は細川越中守熊本立花飛彈守柳川小笠原左京大夫小倉小笠原近江守小倉支藩小笠原幸松丸播州安治を第一陣とし松平美濃守筑前松平肥前守佐賀を以て第二陣とし松平美濃守松平肥前守は後命を待て出兵するものとし中川修理大夫岡松平主殿頭島原を以て應援とす萩口は松平修理大夫薩摩を第一陣とし有馬中務大輔久留米を第二陣とし諸侯各〻之れに附するに幕府より派遣する所の軍監を以てし松平安藝守松平右近將監龜井隱岐守小笠原左京大夫は防長と封境相隣接せるを以て獨り兵を出し其身は留りて國邑を守り臨機の計を爲さしめ將軍旗下の兵は先づ一番隊を廣島に發し後隊之れに繼ぐものとす全體を通覽するに從軍を命ぜられたるは越前及び彦根以西の諸侯の大部分を網羅し其他江戸より將軍に從

へる數諸侯を交へたるものにして略、前役と同じ翌年四境戰の部署は卽ち之れに依りたるものにて唯將軍は大坂以西に進まず紀州侯廣島に在りて從軍諸藩を總督し隨て紀州兵は主として藝州口に出て一部を石州に分遣し又薩藩は辭して一兵を出さず藝藩は先鋒を免され專ら國境の守備に任ぜし等の差あるのみ

既にして永井主水正等廣島に至り宍戸備後助等と應接し十二月二十七日を以て大坂に歸り翌日城に上り其顚末を復命せり是に於て幕府は我長藩に下すに何等の處置を以てすべきや長藩は頻りに國情を訴へ極めて寛大の處置を受るに非ずんば到底其命に服すること能はざるの決意を示せしを以て幕府若し加ふるに嚴罰を以てせんと欲せば勢死守の敵に對して戰端を啓かざるべからず若し長藩の請ひを容れ寛大の處置に出んとすれば幕府の威嚴を損するのみならず旗下及び會桑二藩士の如き必ず之れに甘んぜざるべし是に於て乎幕府次第に窘む此時に當り非再征論は殆んど天下の輿論と爲り諸侯にては薩藝備筑大村對州等の反對あり親藩にては尾州越前あり公卿中の名望家は皆同情を我に表し草莽の有志も亦再征を非擧とし反て幕罪を數へて民間に流布するに至れり再征を非とするの論者は諸侯の集會を唱導し外藩に在りては其意之れを以て幕府の失政を暴露し政權を王室に回收せんとし又親藩に在りては之れを以て幕府の積弊を匡正せんとし之れに反する幕府の旗下及び會桑二藩士の如きは再征の一擧に依りて幕威を天下に煙かし漸次に抗命諸藩を壓服し幕府の權勢を挽回せんと希圖せり而して幕府の內議は薩越等の主張する諸侯召集は之れを避け長藩の處置は其封十萬石を削り公父子をして老せしめ別に其嗣を立て以て事局を結ばんとするに決し之れに對する防長二州は飽くまで其主張を貫き死生以て其寃を雪がんとせり

飜て五卿の動靜如何を觀るに此年正月三條實美以下五卿の筑前に移るや當時の總督府は松平美濃守（筑前）細川越中守（肥後）有馬中務大輔（久留米）松平修理大夫（薩摩）松平肥前守（肥前）に命するに一たび筑前に至るの後三條實美を筑前に三條西季知を肥後に東久世通禧を久留米に壬生基修を薩摩に四條隆謌を肥前に交收すべきことを以てす既

にして又筑前封内の一處に於て共同守衛すべきを命す蓋し分居は五卿の初めより好まざる所にして薩筑二藩は其條件を以て渡海を慫慂したるを以て分居の命は遂に決行し得ざるの勢ありしを以てなり

（兩肥薩久留米への總督府達）

三條實美始五人の輩松平美濃守へ受取候上一人づゝ引渡候筈の處内情運び兼候次第も有之候に付當分の間は美濃守領分に被指置候條相受持の心得を以て守衛の儀とも宜取計候事

是に於て二月十三日筑前藩は五卿を太宰府延壽王院に置き他の四藩と共に之れを守衛せり而して幕府に在りては總督德川慶勝の意に反し毛利氏を江戸に召致せんとし五卿をも亦之れを江戸に護送せしめんとし二月五日其事を五藩に命ず

（幕命）

今度三條實美始五人の者共江戸表へ被召寄候間銘々御預の者家來共に嚴重爲致警衛早々指越候樣可致候

然れども幕府の力毛利氏を召致すること能はず五卿の護送亦均しく總督等の反對ありて事遂に等閑に歸し（同天實記二月二十二日の條に曰く尾州より五藩留守居呼出にて五卿樣御事は過日も達しにも相成候得共長州父子之儀に付幕府へ申出候儀も有之候間右落着候迄は五藩申合程克取計置き可被申五卿御身上の處は勿論尾州家には幕命とは最初より見込替候事なりと口述を以て申達候由）七月に至り幕府は更に五藩に命ずるに五卿の警護を嚴にすべきを以てせり

（筑前への幕命）

防長御所置の儀追々御取掛り相成候に付ては先達て御預被置候三條實美始五人の者共取締筋の儀忽に不相成樣尙又格別嚴重可被申付置候尤細川越中守始四家へも相達候間得其意夫々申談取締向行屆候樣可致候

尋て永井主水正等を以て糺問使と爲し廣島に下すや幕府は警護監督を名とし目附小林甚六郎を筑前に派遣するの儀を決し十一月十二日更に之れを五藩に令せり

（幕命）

長防御所置之儀御取掛相成候付ては兼て松平美濃守へ御預被置候三條實美始五人之者共ゆるがせ之儀無之樣先達相達候通相心得猶此上人數等相增取締向精々行屆候樣可被致候尤爲御取締御目付小林甚六郎筑前表へ指遣候間可被得其意候

蓋し糺問使廣島に至り其復命に由りて毛利氏の處分を定め和戰の決近きに在るを以て諸藩勤王黨の推崇せる五卿を其附近に置き幕府に反對せる薩藩等をして其守衛に當らしむるを屑しとせず乃ち小林甚六郎に因りて五卿を收管し行〻之れを大坂に召致せんことを圖りしものなる可し（續再夢記事所載に七月朔日京都に於て一橋慶喜の松平慶永に告る所によれば筑前藩五卿滯在の爲め出費の多きを以て幕府に其召致あらんことを請ひしと云ふ當時筑前藩は佐幕黨要路に當りしを以て或は此の如きことありしなるべし）是時に當り筑前藩に在りては勤王派蹉躓し加藤司書月形洗藏等前後皆非命に斃れ佐幕黨要路に立ち政權を掌握せしを以て（五卿の初め筑前に移りしとき該藩には月形洗藏鷹取養巴等の勤王黨勢力を得て薩藩西鄕吉之助等と力を合せ征長解兵五卿移轉に盡力せり其後佐幕派勢を得慶應元年六月洗藏等の勤王黨斥けられ尋て獄に投ぜられ十月二十三日洗藏等十四人獄せられ廿五日老臣加藤司書等四人屠腹を命ぜられ其他相次ぎて刑せられたる者五十餘人に及ぶと云ふ）五卿に對する動作も自ら前日と其趣を異にする所あり曩に守衛を嚴にすべきの幕命あるや直ちに其衛兵を增加し尋て小林甚六郎派遣の幕命あるや筑藩は幕意に迎合せんとするの狀あり而も慶應元年は未だ何等の實迹を露はすに至らずして終を告げたり（上に擧げたる小林甚六郎派遣云々の幕命は翌慶應二年二月十四日筑藩より五卿に通知したりと云ふ）

# 第十三章　慶應元年冬期の毛利氏

要衝地の代官助員○用所藏元兩役所○驛傳法○萩士民への公示○井原宍戸一行の發程○越荷方等の改革○軍艦の移動○有栖川宮○泉十郎等の處罰○對敵規則○親書類の編纂○成器塾○諸兵の配置○防戰の根據地○遊擊隊の稟申○德山老侯の逝去○在藝使への訓令

十月三日敵衝に當る五郡に代官役助員を置き代官役と協議し軍務に從事せしむと爲し郡奉行役所も亦山口に移轉せしむ五日有事の日急報の準備を定め驛傳の方法を近境の諸代官に令す

上關大田源藏大島郡青木三郎兵衛吉田佐世彥七奥阿武郡田中庄左衛門熊毛石部錄郎　四日令して用所藏元兩役所は山口を以て根基

（令文）

一小瀨川口より起り本往還筋山口迄

一大島郡より起り本往還へ出山口迄

一野坂口より起り生雲通り山口迄

一佛坂口より起り北浦通り萩迄

一先大津より起り萩迄

一赤間關より起り本往還山口迄

右敵兵隣國へ臨み戰爭に可及樣子相聞候はゞ前書之通場處より起り山口萩へ急飛脚を以注進被仰付候右注進一度有之候得ば其道筋宿驛其外見合凡一里より一里半程之間へ人足三人宛晝夜共差出置諸注進其外御用狀等之往來急速繼送りにして相達候樣被仰付候右起の場所御代官所又は程遠に候得ば兼て役人等差出置無拔目聞繕申出候樣手筈被仰付候事

右之通被仰付候條前段起り之場所幷道筋之御代官所へ沙汰被仰付候事

六日萩城の士民に示すに公父子孫幷兩夫人山口に定居するの意を以てし而して萩の防備は之れを嚴にし有事の日は公父子間一人親ら臨みて指揮すべきを告げ以て士民の心を安んず

（令文）

御詮議之趣有之御國中防戰之御手組急速堅固被仰付候就ては兩御前樣幷興丸樣共先當分山口御往居被成尤萩地之儀は昔年來御城地御先代樣方御墳墓之地にも有之事に付御手當向之儀は尤嚴重に被仰付異變之節は御兩殿樣御間被成御越御指揮被成候事

七日公井原主計を召し親く上坂を命じ又山縣半藏に氏名を宍戸備後助と賜ひ中老雇と爲し命じて主計に副たらしむ是れより先き半藏等以爲らく幕府兵を以て我に臨むも我は先づ言辭の及ぶ所を盡して我が執る所の事理を詳にし以て名義を天下に明にすることを力めざる可らずと半藏乃ち兼重讓藏赤川又太郎小田村素太郎杉梅太郎と共に命を受けて幕府が我れに詰問すべきの條項を臆測列擧し各〻附するに答辭を以てし一冊子を編し名けて擬對問錄と曰ふ試に幕府の問條を測定したるもの十三とす左の如し

第一ヶ條　亥の五月十日夷船へ妄りに及砲擊候はいかゞ之心得に候哉

第二ヶ條　亥の八月御親征之儀及內建白大和行幸之儀被仰出候次第いかゞに候哉

第三ヶ條　去冬尾州總督下向にて申渡之旨有之三條實美其外筑前表へ渡方相濟候得共最前亥の八月十八日七卿之儀は朝廷より御咎被爲蒙候を乍承知私に國元へ連歸候はいかゞ之心得に候哉

第四ヶ條　十八日屋敷へ引取候樣御沙汰之處大佛迄引取直樣國元罷歸候儀いかゞ之心得に候哉

第五ヶ條　御使番中根市之允朝陽丸御船乘組被差下候節赤間關砲臺より及發砲加之着岸之上右御船拜借之儀申懸多人數猥りに御船へ乘移居竟に市之允一達之內を及暗殺候次第いかゞに候哉

第六ヶ條　亥の十二月二十四日於赤間關松平修理大夫手船へ及砲擊候次第いかゞに候哉

第七ヶ條　先年有馬中務大輔家來眞木和泉事天幕より御沙汰之趣有之候處領

内へ潛伏致させ置猶又諸藩浪士等數多國中へ團置候儀も有之よしいかゞ之心得に候哉

第八ヶ條　夷船へ砲擊幷に御親征建白等之儀は其旨趣相分り候處私に公卿を國元へ連歸候は朝憲に相觸れ不憚王威次第に候猶幕使暗殺之儀は不任心底とは乍申領政不行屆して右樣之儀も致出來候筋にては無之哉

第九ヶ條　山口新館築造幷に關門造營等は不始末に付去冬尾州總督下向之節破却申渡監察を以て見分をも爲致置候處其後又々修覆等いたし候哉に相聞候間いかゞ之心得に候哉

第十ヶ條　夷船砲擊之儀は追々被仰渡之旨も有之所種々難題申立改心不仕候所去年八月京師變動後に至り俄に外夷と和議取結候由相聞へ前後不都合之次第に候間いかゞ之心得に候哉

第十一ヶ條　去冬尾州總督下向之節京師暴動首謀之もの嚴科に處し恭順罷在御沙汰奉待候段申出候處其後領内鎭靜方不行屆よりして激徒再發爭鬪に及び候次第如何之心得に候哉

第十二ヶ條　去年八月於馬關止戰媾和之儀幷に領内爭鬪之次第等は前條申立にて相分り候へども其後私に家來外國へ相渡大砲小銃等之武器多分取調其上密商せしめ剩さへ關東御爲不宜儀等種々外夷と相謀候よし相聞候間いかゞ之心得に候哉

第十三ヶ條　先年於其方横濱にて買入いたし候蒸氣船始末に付御不審之廉有之候間右船之儀は當節いかゞ相成居候哉

既にして使節派遣の議決するや半藏奮て自ら其任に當らんことを請ふ老臣毛利備前亦進言する所あり公之れを嘉みし遂に半藏を以て備前の養子とし宍戸備後助と稱し井原に副たらしめしなり

宍戸子爵（璣卽ち半藏）の直話に據るに老臣派遣の議あるや宍戸備前宜く其任に當るべし會、半藏其任に當らんことを請ふ備前以爲らく身を以て君國の難に殉ふるは固より予の辭せざる所なり然れども予にして往くも樽俎折衝の功決して

期すべからず人才を選で之れを遣るに若ず予固より予が家を惜むに非らず之れが爲め予が家を犧牲に供する亦可なりと因て之れを公に進言し家を半藏に讓り以て往かしめんと請ふ公其誠意面に溢るゝを見て之れを許るし遂に命じて半藏を備前の養子と爲し名を宍戸備後助と稱し井原を正使とし備後助を副使と爲す後ち使事終るに及び備後助以爲らく一旦の故を以て名門の祀を換ふ心に於て安からずと因て本に復せんと請ふ公曰く以て意と爲す勿れ予思ふ所ありと幾も無く備後助に祿千石を賜ひ（備後助固辭の故を以て五百石に改む）別に一家を興し仍宍戸を以て稱せしめ備前の家は其嫡嗣をして之れを襲がしむるものとし而して互に宗支の關係を結ばしむ半藏身業家に起り而して此事あり當時人以て異數の榮と爲すと云ふ

上坂使節既に定まる乃ち九日を以て發程の期とし赤川又太郎（當時幕府及諸藩用掛り醫師松村玄仲をして之れに隨はしむ其他從者百三十餘人とす（備後助等の從者は概ね輕卒中より新に選命せしものなり）同日林良輔を德山に福原藏人を長府淸末に遣はし報ずるに此事を以てす又大津四郎右衛門を藝州に野村範輔を筑前及び田代に小田村素太郎佐伯太郎右衛門を備前阿波因州に井上兵部を津和野に遣はし報ずるに老臣上坂の事を以てし且士民の情狀を告げしむ九日朝公先づ井原主計宍戸備後助に謁を賜ひ親く使命を授け終て酒肴を賜ふ赤川又太郎松村玄仲之れに侍す又諸從者を庭上に召し之れに酒を賜ふ蓋し異例の遇なり既にして一行公に辭し直ちに途に上る政府諸員送りて御堀村に至り離宴を福田屋に開き山口駐在の諸兵は御堀より氷上に至る（距離凡十二三町）公道の兩側に整列し凱歌を奏して之れを送る是れより廣島應接の事あり（事は別章に詳なり）翌十日令を士民に下し以て非常を警戒す

（令文）

今般從幕府御達之旨有之井原主計宍戸備後助登坂被仰付候就ては幕府御處置振如何程之事體に立至り候哉難計當夏以來再度當役中演說書を以布告被仰付置候通則御國家危急存亡之秋に付孰も彌以不覺悟無之樣可被相心得候事

此月七日丙辰丸庚申丸癸亥丸の乘船員に命じ三田尻濱中ノ關西泊小田浦等の港

口出入の船舶を檢査せしむ八日越荷方の權限を擴張し營利を專らとして藩外通商の事務を擔當せしむ是れより先き越荷方を馬關に再興し北國廻送貨物の荷爲替等の事に任ぜしむ産物方亦其支局を馬關に置き撫育局又別に蠟紙等數種の事業を掌り櫨實製紙の購入及び蠟紙販賣等の業を營む爲めに一局を馬關に置けり是に至りて國産品は産物方より之れを越荷方に賣與し藩外への販賣は一切越荷方の擔任とし獨り蠟紙等の管掌は大概舊規に依らしむるも仍越荷方の指揮を受け是れ亦主として意を利殖に用ひしむ且つ越荷方は從來本勘の經費を以て置く所なりしも自今藩主の手元金を以て之れを支持して特別の會計と爲し本勘より越荷方に資金を投ずるときは其金額に應じて越荷方の利益を本勘に分與するものとし本勘より置く所の別局は之れを廢し三者互に氣脈を通じて其業を進むるものとし餘裕の金は必要に應じ互に貸借することを許るすも償還期限の如き之れを嚴守せしむるものとせり此くの如くにして越荷方の得る所の利益は一切海軍費に充つるに定め其十七日越荷方事務を兼掌せる木戸貫治高杉晋作を陞せて越荷方頭人を兼勤せしむ

越荷方常務の主管は大塚正藏なり越荷方制度改正の日又撫育局に命を下し大に製蠟の業を擴張せしめ漸を以て製蠟局の數を增し白蠟製造場蠟燭製造場製紙局製油局を置き遂に製鐵所造艦局織工局染工局を建るものとし其計畫を示せり其方法は初年に水車製蠟場一場を設け次年より利潤を以て增場し三十年間順次に增加し既に設くる所のものは漸次之れを民間の資本家に賣却し貸す に營業の運轉資本を以てし其利子を收め又賣却する所は搾取木の數に應じて運上金を納めしむるものとし其計算を示せり此計算に依れば第二十五年以後に至れば貸與資金六十萬兩未賣却製蠟場四局の建設費一萬二千兩四局の購入櫨實代價二十萬兩の外に年々六萬八千兩の利潤を得るなり之れを以て先づ製油局を建設し漸を以て他の諸工場をも建設するの目算なりしなり

九日公老臣御神本主殿益田根來上總に各〻其采邑に歸り（御神本の采邑は阿武郡須佐根來は同郡高佐にして共に石州境に在り）毛利讃岐守を輔け戰守の準備を爲さしむ十三日世子三田尻に赴き十六日山口に

歸る十八日海軍頭取財間百合熊に命じ庚申丸癸亥丸丙辰丸の三艦を馬關港に碇泊し海岸の防禦に任ぜしむ二十一日志道安房の國用方を免じ毛利筑前をして國政方國用方を兼理せしむ時に佐波郡富海浦大和屋政介と云ふ者先きに上國に至り有栖川宮幽居の狀を聞き歸りて之れを政府に告ぐ公聞て甚だ之れを悲み政府をして爲めに圖る所あらしむ二十五日政府政介に命じ平野屋嘉兵衛と共に竊に京都に至り金二百兩を宮に上り以て其欝を慰し幷に其諸大夫粟津右馬助前川太宰大監妙法院宮家司山口筑後丸茂庫司に各〻金十五兩を贈らしむ二十六日長府藩内軋轢の餘波泉十郎野々村勘九郎なり死を賜ひ其他數人嚴譴を蒙る白石日記十一月二十七日の條に「大庭大變事承る昨二十六日夜御谷に逢候由三十人計持筒にて入來御上意と申て繩をかけ候由然處今朝に相成同格の者四五人來り繩を解張番致居候由泉十郎は召捕修禪寺にて割腹爲致候由」云々とあるもの是れなり尋て長府より宗藩への報告書あり十郎の罪狀を數ふ其重なるものは(其一)今年三月二十五日壯士を指揮して林郡平を暗殺せり(其二)井上聞多伊藤俊輔二氏の暗殺を教唆せり(其三)宗藩の命に依り嚴譴に處せられながら屢〻外出せる等なり且つ梶山鼎介遠藤三郎等泉に黨せし故を以て各〻譴罰に付することを記せり是れより先き泉は井上等の暗殺を教唆せしことに關しては宗藩の命に因り既に閉禁を命ぜられ其事は局を結びし如くなるも藩内に軋轢ありて其結果遂に此に至りしなり當時高杉は泉を救ひ寛典に處せんことを冀ひ其意を木戸に告げし書翰あり又十二月朔日付の山田宇右衛門より木戸への書翰中に「泉十郎一條幷長府往々分裂御掛念の儀委縷被仰聞奉敬承候爰元にても折角其氣遣も有之幸西小豐後出山近日之内罷歸候付寛大御處置可然段御思召之處御達に相成候間御放慮可被成遣候」と見ゆ泉は其前已に自盡せしなり泉は長府の報國隊長にして馬關開港一條に付ては高杉等と所見を殊にし遂に暗殺を企るに至りしも其他は元來高杉等と寧ろ類似の黨派にして高杉が筑前より歸るに際しても之れと同行せり是れ高杉の彼が極刑に陷るを救はんとせし所以なるべし但し彼れの末路藩内に於て勢威に驕りたる迹ありて遂に反對派の爲め陷られしなりと云ふ晦日高祿の諸臣に令し戸主嫡庶を問はず男子七歳以上皆自費を以て山口小學校に入り文學を修めしむ時艱にして猶文教を怠らざるなり十九日令して敵兵來侵の警報に際する約束を定む

（令文）

異變之節相圖之儀大鐘二ッ切或は發砲受繼等追々沙汰被仰付候趣も有之候處右相圖之儀は諸郡とも向後被差止候に付左之通相心得候樣被仰付候事

一敵兵發途之樣子相聞候段沙汰被仰付候得ば御國中諸兵其他軍事に相携候者他行止宿被差留候事

一沿海御代官所諸隊等より最寄見切宜敷場所は斥候差出し敵兵來侵候模樣に候はゞ斥候急速其外陣に報知し其外陣より山口幷左右隣接の本陣へ致報知候樣被仰付候事

一敵兵隣國迄も相迫候樣子相聞向々出張沙汰被仰付候節は萩表に限り五ヶ所鐘樓に於て板二ッ切幷最寄々々提板をも御打せ被成候付諸兵出張にて御下知相待候樣被仰付候尤も揃場之儀は追て沙汰被仰付候事

一右之通諸郡之儀は出張之沙汰無之諸兵は前條之通他行止宿被差留御下知次第急速出張相成候樣致用意候樣被仰付候事

時に幕軍は將に翌十二月十日を期し我が境上に迫らんとす二十五日令して士民を警戒す二十六日清水美作に第二奇兵隊總督を命ず政府は益〻國内人心の統一を圖るの要あるを以て公初政以來の親書幷布令等の時事に切なるものを編輯し之れを諸臣に頒布し以て遍く公の意を知らしめんことを請ふ公之れを許す

（令文）

御家來中一致仕兼候儀も畢竟御思召之被爲在候處を於干下琻と不奉得伺より して或は疑惑之思を生じ或は偸安之計をなし遂に銘々之得手勝手に流れ候樣相成候儀に付御代初以來之御意書御直書付其外當役限り諸沙汰物之内迄委く穿鑿仕總て報本反始尊王攘夷文武御興隆風俗御立直し人民御憐恤等世道人心之關係之部抄出仕一冊として遍く布告被仰付候はゞ三十年來御誠意之被爲注候處を奉仰孰も方向定り御奉公之目途相立人心一致可仕に付其取調被仰付候事

但一先殿樣御代之分相調候上は御先祖樣方之分も引續同樣詮議被仰付候事

二十九日成器塾（老臣以下大祿を有する者の子弟を教育する所なり）の規則を定む

塾則

一御座陣之圖を以大規則となす故に朝夕出入再拜諸將之功業を厚く考へ續其志他日爲國家御補佐可申上候事

一沈勇果敢寛張大度洋海まで乘出だすの志を以て常に經史に通じ忠孝之德を養ひ國家之用に供し次には二州之矜式と成風教に補ふあらんは可爲要務候事

一御軍役被仰出候通に付十五歳迄に凡胸臆之方向を決十五歳以上は國相軍將之心得を以修業可有之候事

一修業中平士之心得を以禮讓正しく可有之候事

一須臾の間たりとも大度量を以遊戯可有之尤遊息はあれども古人寸陰可惜といへり思はざるべけんや

一言行一致之道を守らずして何ぞ相違之廉有之は尤武士之大耻辱たるべく候事

一暮六ッ時を以門限とす其限過候時は先其事之由を達し出入有之べく候事

一付添家來之面々時勢を辨へぬによつて事をなさず相勵各其主之補佐を專とし武士道を貫き其主をして往時十九將之一人たらしめ夜白遂無二忠節之志可爲專務候事

一其主之怠慢は其臣之怠慢により起る故先己が苦學苦節を以其主を責む可し己其行を不顧して妄に口舌を以て責むるは不謂女第なり

一付添家來一人と被定候得共其主之苦學に從ひ補佐仕度段情實を以て願出候輩は付添家來之外一人入校不苦尤言行一致無之時は退校之事

一幼年方々に付飲食にて千一鄙吝に染候段も難計候間付添家來之面々申合時々其養可有之事

一會業定日禁出入

晦日令して國中諸兵其他軍事に關する者の他方に止宿するを禁じ幕軍の來侵に對して戒嚴せしむ又諸兵守戰の部署を定む

小瀬川口

遊撃隊

南第一大隊　宍戸備前人數

同第二大隊　毛利隠岐人數

上口大隊　農兵

同　砲隊　同

熊毛在住散兵隊其外諸兵共

上關邊

第二奇兵隊

南第三大隊　清水美作其外千石以上之者人數

同第四大隊　佐世仁藏其他人數

上の關在住散兵隊其外諸兵

花岡邊

干城隊の内

但小笠原彌右衛門の部下浩武隊

南第五大隊　毛利筑前堅田健助人數

都濃郡在住散兵隊其外諸兵

德地

干城隊の内



但諫早作次郎等同志團結するものなり

德地々方狙擊兵其外諸兵

山代

膺懲隊

山代地方狙擊兵一隊

三田尻

御楯隊

第三大隊足輕隊

南第六大隊　毛利筑前人數

三田尻大隊　農兵

同第二砲隊　同前

三田尻在住散兵隊其外諸兵

小郡

八幡隊
萩野隊
嘉川屯兵　浪士
南第八大隊　粟屋帶刀其外千石以上人數
小郡大隊　農兵
同砲隊　同上
小郡在住散兵隊其外諸兵
船木邊
南第十大隊　鈴尾五郎家兵
同第十一大隊　毛利能登其外人數
椙杜駿河其外一隊
船木吉田在住散兵隊其外諸兵
赤間關



奇兵隊
南第十二大隊　高田健之助山内梅三郎人數
但長府御引請之事に付時宜次第出張
石州口
清末様御一手
南園隊
福原又市其外一隊
第四大隊
北第一大隊　御神本精次郎人數
同第二大隊　志道安房其外人數
奥阿武郡在住狙撃兵其外諸兵
南大津
北第三大隊　毛利豐之進其外人數

南大津在住散兵隊其外諸兵

山口

干城隊

鴻城隊

集義隊

第一大隊

第二大隊

一番砲隊

南第七大隊　毛利出雲人數

同第九大隊　益田孫槌其外人數

山口大隊　農兵

同半砲隊　同

山口在住散兵隊其外諸兵



萩

御手廻之儀は兼て御手組之通（干城隊鍾秀隊北第四大隊同第五大隊同第六大隊第五大隊二番砲隊萩大隊同砲隊東西教練場臺場掛中鶴江臺場同斷萩四峠内外在住散兵隊其外諸兵）

右近日於藝州小監察へ應接被仰付候に付萬一及急變候儀も難計に付前書之通御手組被仰付候條一左右次第出張之覺悟無油斷候樣被仰付候事

當時吉川氏亦其戰備（吉川周旋記所載）を定むること左の如し

小瀨口先鋒

大組一組　足輕二組

大砲四門　戢翼團二組

村々狙擊

外に關門固

士三十人　足輕二組

大砲六門
伊勢ヶ岡游軍
大組一組　足輕二組
山用砲四門
外に
士一組　足輕一組
右は小瀨口室木口へ應援
室木口先鋒
大組一組　足輕二組
大砲四門　敢從團二組
村々狙擊
小瀨界より坂上
足輕二組　北門團



其外狙擊
右之外諸組又團兵大砲四十門餘城下固め時宜に依て先鋒に應援す
急報
一先鋒請持之處より幟を以諸所へ報知村々是れを受て領内に及す
一號砲號鐘
一夜中篝場左に
伊勢岡　愛宕山　大應山　塔ヶ森　松尾山
十二月三日高杉晋作をして赤間關伊崎新地都合役の事務を聞かしむ後ち又此月十九日内藤清兵衛に代り應接場の指揮を兼務せしむ四日松野四郎右衛門を長府に村尾治兵衛を德山に乃美仙吉を岩國に遣はし各〻其軍監と爲す五日令して各地守戰の根據地を定む
一熊毛宰判岩城山邊形勝之地
一都濃郡宰判須々萬邊同前

一船木宰判吉部邊同前
一前大津宰判西市邊同前
一前大津宰判大寧寺同前
一奥阿武郡宰判生雲邊同前
一山代宰判廣瀨邊同前
右御座所駈隔候場所根據の地前書之通被定置候敵之形勢に因り方角々々其手々々申合應援防戰之上勿論一時之勝敗は可有之候得共持久第一の事に付機に因り孰も根據之地へ先引揚げ居一團進戰之英氣蓄置候はゞ何分之御指揮も可有之候條諸事無油斷覺悟可有之候事

九日遊擊隊書を上り緩急進軍に關し數項の機宜を候し且つ之れを岩國に通ぜんことを請ふ政府之れに指令し且つ岩國に報じ其措置を爲さしむ

（遊擊隊の上書事項併に指令）

御一左右次第當隊岩國領御莊迄出張之事

付り陣屋之儀は町家借用之事

（指令）本書一左右次第出張陣屋等之儀は岩國へ達可被仰付候尤地下民間之迷惑に不相成嚴重軍律可相守樣被仰付候事

一砲隊二門二小隊位斥候として小瀨近邊罷出岩國合一之事

（指令）本書砲隊小隊とも斥候には不被仰付候一左右次第岩國と合力防戰勿論之事に候尤彌兵機相迫候報知を待ち別に僅之人數を以て斥候候樣被仰付候事

一當隊之儀は兼て先鋒之心得を以時機次第岩國領に不拘變に應候事

（指令）本書敵襲來之模樣に寄候はゞ强ち一向之先鋒とも難定事に付現場岩國申合互に正となり奇となり相戰候樣被仰付候漫に無謀の勇進を主とし於味方前後を爭ひ紛亂を釀し却て敵軍之輕侮を受け虛隙を被窺候樣之事無之心得肝要被仰付候事

十六日瀧彌太郎を以て小姓と爲し其勤務を免し清末の軍監と爲し有事の日奥阿武郡に出張すべきを命ず蓋し清末候石州口防禦總督の任に當るを以てなり此月

徳山の老侯毛利兵庫頭疾あり兵庫頭は世子の生父なり世子因て七日を以て徳山に至り十二日山口に歸る十七日又危篤の報至る世子再び徳山に赴く公亦人を遣り病を問はしむ兵庫頭遂に卒す十九日公更に使を遣はし其喪を弔はしむ乃ち令して明年正月三日に至るまで歌舞音曲を停止し尋て二十七日使を廣島に遣はし藝藩を介して之れを幕府に報じ公父子定例の忌服に服することを告ぐ此時に方り廣島の應接既に其局を結び廣澤藤右衛門松原音三其報告を齎らし此月二十一日山口に歸る是に於て政府は以爲らく幕府は蓋し我藩處分の裁決を下さんとし必ず支侯をして藩主に代り上坂せしむるの命を下すべし而して我若し請ふ所あらば幕府は老臣を以て支侯に代ふることを許すべし然りと雖ども若し幕府我が四境の兵を撤するに非ずんば支侯老臣併に召命に應ず可らずと乃ち二十四日を以て政府員より書を在藝使員の隨行員小田村赤川に送り以て其意を傳ふ二十七日書廣島に達す其文に曰く

（前略）然ば藤右衛門事本月十三日夜於其御地令評議候件々歸山之上委曲御當役方申達し及御聞候處都合其筋にて可然尤此往結局御汰沙下候節幕府兼て之御規格も有之爲御名代御末家樣御登坂御達も可有之の處元來此度大小監察下藝御應接も既に御末家樣御病氣代之事故矢張此往迚も御同樣御代りにして可相濟勿論之事に候得共是迄右御應接中は兎も角も結局御沙汰有之節只今之通四境へ諸兵出張中右御用召と申候ては闔國意外之御沙汰下し候は必然之儀故見す々々大夫其外一人にても死地に投候ては遺憾至極に付諸兵引取に相成候得ば登坂をも可仕段別紙之通先達て藝藩まで御演說被成下候樣にと存候且結局付方見込においては是迄御應接中追々國情張込置候通實に擧國意外之癈削等不思寄御沙汰被仰出候節は不得止決戰之外致方無之就ては至其節乍恐天幕へ御直訴等可仕と申邊之歎願書可被差出乍併一旦右存外之御沙汰下し候上は幕奸吏輩不承知段は眼前之事故前件之通四境之兵不退して登坂之御沙汰下候節は其御地より右歎願書被繰込時機に寄速に御歸國決戰必勝之御手傳有之度存候旁之趣可得御意との御事に御座候間其含を以御地御取計振可然候樣御當

役方被申付候間此段兩大夫へ被仰達度爲右如斯に御座候恐懼謹言

十二月二十四日

別紙

此度於御當表大小監察御役向方御尋之件々委曲申上候處尖に被聞召屆難有奉存候然處此餘結局御沙汰可被仰出其節には末家々老之中大坂表御用召にも可相成候哉に候得共四境御攻口其外御出張等日々被相增候形狀奉窺長防闔國士民彌以不安堵に存込唯今之形勢にて自然登坂之儀被仰出候共一統疑惑之餘情より押ても御當藩罷出可相留樣子にも相聞候に付至其節往掛り何歟と御斷立申上候ては奉恐入候次第に付先達て貴藩迄申達置候間篤と御推察被成下公邊向へ程能被仰入度致御賴候

而して廣島應接進行の間に於て長薩和解の交渉は長足の進歩を爲し公遂に木戸貫治に命じ潛に京都に赴き薩藩士と會合せしむるに至れり事は別章に詳なり

## 第十四章　廣島應接の準備

井原宍戸の着藝○井原の歸國○松原音三の歸國○藩政府の議○幕使下藝の通知○小田村素太郎の歸國○木梨彦右衛門の差遣○戒嚴令○諸隊使の差遣○幕使の着藝○使節の國泰寺出向

十月二十二日我使節井原主計宍戸備後助廣島に入り將に更に進で大坂に赴かんとす是れより先き使節の一行は同月九日を以て山口を發して上坂の途に就き公命を奉じて十五日吉川監物に岩國に謁す監物賜ふに短刀各一口を以てす翌日一行は岩國を發し關戸に淹留して其行を緩くし獨り大津四郎右衛門小田村素太郎の二人十六日拂曉海路岩國を發して先づ廣島に赴く是れ當時外國軍艦攝海屯集の事上國に起り將軍又歸東の途に就くの報俄に至れるを以て或は時局の變あらんことを察せしが爲めなり十七日朝藝藩士寺尾生十郎大津等の旅舍に來り告ぐるに上國の變を以てし且つ二使廣島に着せば藝藩は直ちに政吏一人をして上坂

せしめて具さに形勢を探聞し其報を得たるの後護衛の兵を二使に付し共に大坂に往しむべきの旨を告ぐ因て大津等は急使を關戸に派して井原宍戸の行進を促す二人乃ち十八日關戸を發し二十日市に至るべきを復し期に及び二十日市に着す時に山口より別に派する所の松原音三亦廣島に在り大津等と共に上國の情勢を探聞するも其事我使節派遣の方針を變ぜしむるに足らず且つ山口政府亦使節に訓諭する所あり使節一行乃ち二十二日を以て二十日市を發し廣島に着し各其旅館に入れり

案ずるに使節岩國に至るに際し世子三田尻に在り攝海の變を聞き一面は山田市之丞野村靖之助をして使節を追ひ言ふ所あらしむ使節は二十日市に到り後命を待つべきを答ふ一面は太田市之進をして山口に到り別に一人を廣島に派遣するの議を政府に進めしむ政府乃ち之れを松原音三に命ず音三奉ずる所の使命は要するに上國の變報ありしが爲め使節上坂の猶豫を請はしむるに外ならざりしものゝ如し音三は十五日舟三田尻を發し草津に上り十八日廣島に入り大津小田村に會し又二人と共に藝藩吏人と會談する所ありしも實は上國の變も豫想の如く紛糾に至らざりし爲め音三等亦强て使節の行程を變更するの說を主張すること能はず山口政府も亦使節二十日市に滯在して後命を待つの報に接し之れを不要とし豫定の如く廣島に到ることを命じたるを以て使節は廣島に入りしなり

藝藩は毛利氏の兩大夫既に廣島に到着したるを以て藩士植田乙次郎をして上坂せしむるに決し二十六日を以て發途の期とし翌二十三日井原に通告す（後に出す所の井原の待命書に據る此事前日寺尾言ふ所と符合せざるに似たりと雖ども藝藩は故さらに使節をして荏苒廣島に滯らしむるの名義に苦みしなるべく且つ藝藩亦當路者間素論必らずしも悉く一致と云ふに非らざれば寺尾の前言に關せず此事ありしならん歟）越て二十五日井原主計は歸藩して更に公及び世子の意を承くるの要ありと稱し突然書を藝藩に致し卽夜歸國の途に就けり其書に云ふ

今般御達之旨に付上坂被申付當月九日國元出足二十二日御當地迄着仕候然處寡君父子へ伺度儀致出來候に付一應國元へ折返し用筋伺取候上速に御當地迄

可罷越候間此段程能御取計置被下度奉願候以上

十月二十五日

井原主計

因て宍戸備後助は同日書を藝藩に致し病の爲め上坂發程の猶豫あらんことを乞ひ松原音三は之れを政府に報ぜんが爲に卽夜草津を發して海路國に歸り小田村素太郎は別に書を山田宇右衛門廣澤藤右衛門中村誠一國貞直人に寄せ告ぐるに井原主計歸國の事を以てし且つ曰く

兩大夫の上坂を强て御勸仕候には無之候得共藝人見込にては孰れ不被差登て不相叶儀に候得者當節上國變動の砌兩閣老の邪魔物も消除候はゞ旁被差登候好機會の樣申居候主計殿歸國を藝人痛く相拒候ても致方無之候處を品能折合吳候はゞ大夫上坂事も此餘藝人之辭に被從候も可然歟と奉存候

二十六日朝寺尾生十郎上坂の途に上る是れ豫定に基くの外新に井原歸國及び宍戸發程延期の請あるが爲め兼て之れを幕府に具狀するが爲めなり松原音三は二十七日山口に達し翌朝公に謁して委曲を上申す政府乃ち議を定めて使事は宍戸



一人をして擔任せしむるに決し二十九日之れを廣島に書報す其文に云ふ

一筆致啓達候先以御兩殿樣益御機嫌克被遊御座恐悅至極に奉存候宍大夫を初め各樣愈御堅固被成御滯珍重存候松原音三一昨二十七日夜歸山にて此度井大夫折返一件委曲致承知何も不一方御配慮之次第御苦勞に存候然處今以井大夫歸山無之昨夜宮市止宿にても可有之哉に相聞へ候得共都合之趣音三より君上へも申上廟堂においても內評議仕候處最前於其御地右折返一件井大夫より宍大夫へ相談も無之一端奉命越境候處中途より君上へ奉窺度儀有之俄に折返抔と申事獨斷にて被相決候次第實に言語同斷畢竟疑惑より差起にもいたせ魂亂勿論之事にて此度之大任往先き引當に不相成右邊之儀其御地發途以後登坂迄に差起候ては大に御國辱にも立至り不相濟次第に候處未だ場所柄も宜敷各樣方之御盡力にて假成都合相整居候事故井大夫は歸國氣分相にて急速登途も不相調候處彼是登坂只樣及延引候事に付備大夫一人にて被爲濟度左候得ば藝之都合次第にて何時も其御地より發途爲仕可申との大意品能條理を立是非一人

にて相濟候樣仕度との御内議にて彌一兩日中御決定相成候上は右御斷立御賴
として早速御使者被差越可申候其中こゝ許之御評議振如何哉と御煩念も可有
之に付眞の御含迄に得御意置候其外此内被仰越之件々右後便委曲可申越候旁
之趣各樣迄申進置候樣御當役方被申付候間被成御承知備後大夫へ被仰上可被
下候恐惶謹言

十月二十九日

廣澤藤右衛門
山田宇右衛門
木戸貫治

大津四郎右衛門樣
小田村素太郎樣
赤川又太郎樣

是夕井原主計山口に着し公に謁せんことを請ふ公聽さず因りて病と稱して屏居し書を上りて罪を竢つ

案ずるに井原歸來の理由及び事情は稍明晰を缺くものあり或は之れを以て怯懦の行爲と爲す者あるも往年伏見滯在の經歷に徵するも亦以て其の決して然らざるを知るべし表面より之れを見れば小田村松原等は之れを抑止せんとしたるのみならず宍戸も亦不同意なりしものゝ如くなるも井原隨行の用人品川市之丞岡宇右衛門より在邑の福永參右衛門に寄せたる報知書に據れば宍戸も亦同意なりし如し但し品川岡の書に據るも井原自ら宍戸と謀りしには非らず單に使者を遣はしたるに過ぎざれば宍戸は陽に異議を唱へざりし如くなるも其眞意は知るべからず畢竟未だ熟議を經たりと謂ふに至らざりしならん隨て亦井原は松原小田村等とも胸襟を開て協議するに至らざりしものゝ如し是故に井原の所爲は遂に一己專斷の狀に陷りしならん井原をして是に至らしめたるは抑〻其故あるに似たり當時井原の上坂を非とする論者なきに非らず其故は井原は殆んど世襲の大夫たり宍戸の假稱と日を同くして語るべからず假稱大夫の如きは上坂して幕吏の糾問を受け其舞文羅織に遇ひ毛利氏の罪狀を構

造するに至るも後日に至り我れ使節の資格を暴露し其責を遁るゝこと或は難きに非らざるべきも世襲大夫に至りては則ち然らず故に井原は寧ろ容易に上坂せざるに若かずと云ふに在りて藩政府中亦此說を執り竊に忠告したる者もありしに似たり要するに井原をして遽に歸藩せしめたる動機は其上坂を以て幕府の術中に陷り反て累を毛利氏に及ぼさんとすとの所見に起因し且つ世子よりは前日上國の變報ありし爲め輕易に上坂すべからずとの內諭あり而して藝藩よりは日を限りて發程を促したるを以て井原の心中惑ふ所あり一旦歸藩して更に主公の決意を質し而して後ち其進退を決せんとせしものゝ如し唯其事たるや事極めて機微に屬し且つ己れ安きに就き人をして危きに就かしめんとするが如き嫌あるを以て一行の諸氏にも胸襟を披き熟議することを得ず遂に專斷の迹を留め一行諸氏の不服を招くに至りしならん諸氏の意見は當時上國に朝幕間の一大波瀾ありしも其事既に收り幕府と毛利氏との關係は前日に異ならず故に使節は前議に因り其行を繼續し堂々幕府の尋問を受け條理を明にするにあらざれば列藩に對するも我大義を示すに足らざるべしと云ふに在りしなり又政府に於ては重大の使命を帶び殆んど死を賭して主命を果すべき決意を以て途に上らしめたる使節にして假令時期切迫するも主命を待たずして匆皇歸來するは甚だ其體を得ざるものとし且つ物議の紛起を杜絕する爲め斷然の措置を得策とし其陳情を許さゞりしならん此事情は左の三書に因りてこれを概見することを得べし

（井原の待罪書）

私儀當五月病身に付御役御斷申出候處如願被成御免候段御書を以被仰聞難有仕合奉存候知行處罷歸保養仕居候處當九月柏村數馬御內命を以知行處被差越御達旨之趣有之上坂被仰付候樣の儀も有之段被仰聞早速山口罷出右御樣子內々承候處御使者御事件重大不容易御事柄中々以私式不堪其任儀と奉存御內命御斷其筋を以申出候次第御座候左候處同二十六日番頭梨羽又次郎旅宿罷越御兩殿樣被仰付候由にて唯今出伺仕候樣との御事に付不取敢出伺仕候處御兩殿

樣御一座被召出段々難有御意被仰聞大坂表御使者被仰付段被仰聞誠以奉恐懼候此度御使者之儀は御尋之儀有之被召登候御事に候得ば御尋の趣旨御答の始末に依候ては御國家御榮辱御安危樞機之發動に相係り候事に候得ば何共御受難仕儀と奉存候得共御入割被仰聞候御事に御座候得ば御斷も難申上固より方向不相辨候得共御受申上今般廣島迄出途仕掛候處於途中上國向御模樣振も有之候御樣子飛脚其外を以て輕易に上坂は不可然段申來其後藝州二十日市迄大津四郎右衛門其外彼地より罷越一應廣島出着之上諸事取計候都合可然由申事に付直樣彼地罷越候處着翌日用人遠藤左兵衛書取を以申來候には是迄追々御歎願之趣は御手切に相成候得共當藩御依賴之御事に付早速海陸之間御決し相成來る二十六日より御乘船可然由申事に候得共此度之事件輕易に上坂仕候ては却て御國辱に立至り可申と進退相迫り狹量之私何共疑惑を生じ候に付大津四郎右衛門を以て一應歸山之儀彼地政府へ申入候處歸國可然との儀にて備後助儀氣分相に付相滯候段御屆申出私儀は直樣歸山御當役方へも彼是疑惑之趣談判之上可罷登と相心得候然る處歸山後持病之胸痛差起り大に難澁罷居申候只今の體にては早速廣島罷歸り候體に無之其内には期限も後れ御不都合にも相成可申哉と誠に以辛苦萬々奉恐入候氣分相とは乍申奉命居不相濟次第に付身柄差控罷居申候間如何體御譴責被仰付候共謹で從伏仕候間何卒其段被聞召何分之御取計被成下候樣奉願候以上

（品川岡より福永への書）　井原主計

前略此度國難に付旦那樣御使者被仰蒙候付ては御存之通り大事件に候處固より御命を捨られ御國へ被遊御奉公儀は是にて數度之事にて此度も御同樣御決心被爲在候得共政府衆中の談合之趣を案ずるに大坂表混雜し不容易其儀に付ては兩大夫之内井原大夫は先年江戸表御留守居役等も被相勤實際從前より大夫なることは幕府能々承知せし事に付大坂地方にて引付け此大夫の申立として毛利家に於て不被謂儀有之趣は此大夫の申述たるなりと幕府より朝廷へ申立

追討之御命を受んとするとの議論發宍戸大夫は今日より大夫なれば前顯の掛念なきに依て當地に差置き井原大夫は一應岩國地方へ引取らせ上國向の都合聞合せんとの密談も有之則別紙大君御直筆を以て政府衆の書狀の寫之通りに有之しを若旦那樣へ御送り方相成候間直に御差出被下度且高森御泊りへ山田野村之兩人若殿樣御内命之趣も有之由にて輕易に上坂致すまじくとの事も有之進退之御方向定り難くに付一應御歸山御伺として御歸り被成候思召にて拙者共兩人宍戸殿御宿所へ御相談として罷出候處御同意に付一應御歸山相成候間此段別紙寫一同若旦那樣被仰上候樣此混雜中に付直に御狀も御認之儀も難出來候間右御歸山之儀如何哉と御懸念も發り可申に付途中より不取敢御一報致し置候下略

（品川より福永への書）

昨日も便り有之候處外御用申越候得共此度之件は難申候處俄に大變之儀出來依之不取敢申越候一昨日爰許へ御歸り相成御兩殿樣へ御目通り之儀御申入相成候得共政府に於て如何之御都合なるや御相對不相成其内政府衆中も追々御宿へ參られ候處其内岡村熊七なる人參り大議論發り上國向之都合に依ては是非出途不相成方可然つまり井原家之事は置て論ぜず毛利家之御大事は國家の大事ならんとの意にて段々御氣付被申上衆も不少に付種々御案じ被成御滯留有之候處終に一應歸領し引籠居可申追て之御沙汰も可有之との事何とも其意相分り難く候得共右御目通り不相叫候得ば致方無之就ては一應御歸在相成候間此段態人を以て御急報候也

十一月二日木梨彦右衛門を以て中老雇となし直ちに廣島に赴き政府議決の趣を藝藩に告げ承認を求めしむ其使命に曰く

井原主計宍戸備後助兩人登坂申付先月二十一日御當地迄罷越候處主計儀寡君父子へ相伺度趣致出來歸國之上折還早々可罷越覺悟にて御承知之通同二十五日此御地出足不圖も於途中被侵風氣終に疫症相煩只今之容體にては急速快氣之程不相見甚以不都合之至就ては彼是登坂只樣延引にも相成奉恐入候事に付

備後助一人可差出候間尊藩御都合次第何時も御同道被下度致御賴候若右兩人之處備後助一人に相成公邊如何歟御取計苦敷趣も可被爲在候得ども主計儀病氣にて何共不任手段次第御亮察被下萬端都合能相濟候樣偏に致御賴候

同日廣澤藤右衛門松原音三も亦藝州に赴くの命を承く自今藝藩と交渉頻繁となるべきを慮りてなり偶〻去月二十七日在京の閣老小笠原壹岐守より藝藩に下したる大小監察藝州下向の令廣島に達し四日藝藩之れを宍戸等に傳へ別に人を山口に遣り之れを報ぜしむ其令に曰く

松平安藝守

毛利大膳父子伏罪之儀御疑惑之廉々有之に付右爲御糺大目付永井主水正御目付戸川鉾三郎松野孫八郎陸地其地へ被差遣候間最前相達候通末家幷家老共之内且奇兵諸隊中重立候者も三四人十一月を限廣島表へ罷出候樣大膳大夫へ可被相達候尤自然末家幷家老共同所へ罷出候はゞ大目付御目附到着迄差留可被置候

小田村素太郎は此令を齎らして卽夜歸國の途に就き宍戸備後助以下各〻書を裁して意見を上る

（宍戸の書）

又白幾重も々々大津小田村兩人爰元滯留にて周旋向被仰付被下候樣本文之通御詮議奉願上候以上

彌御安淸御起居可被爲在奉恭賀候扨上國模樣振少々手替候樣子にも可有之候哉今般御達面小田村氏持歸に付委曲御承知可被下候尤敵之强弱にて我藩之强弱出來候樣にては不相濟藝城應接も矢張浪華應接同樣相心得不申ては不相成事申も疎に候へども萬一御國の弊風にて又々浮足に相成一層の虛喝を生じても不相濟又々一層之安心を付候ても不相濟次第此等は申上迄も無之御事とは奉存候へども又々例の饒舌御恕察奉希上候

今般藝城應接相成候上は爰元にて周旋方公用人と歟申樣之もの有之哉は申上迄も無之頓に御氣付は可被爲在之處只今迄爰元にて應接彼是も熟し居候ものよろしくに付當分の處は小田村備前行は先被差止此地應接方公用人取計方之儀大津

小田村兩人其儘被差置被下候て右被仰渡之儀は此地に改て被仰付被下候樣にと小生より奉願候間此段篤と被仰合早々御詮議濟相成候へば萬々仕合の事に御座候爰元にて申合候廉書小田村氏持歸に付御評議被成下度奉存候尙委細は小田村より御聞取被成下候樣奉願候此度大監察罷下り候へば多分糺問之次第のみにて別段沙汰振り有之間敷候へども國情等委縷申述廢削相防候儀は申迄も無之候へども爰元一件相濟監察等罷歸候節は爲念備前等へも御使者被差立候方可然事と奉存候右は爰元之一件相濟候て直樣小田村被差越候ても可然哉左樣にては遲延にも相成候哉とも被考候間別人を御選にて監察罷歸不申內御遣し被成候方よろしくともには無之哉御疎は有之間敷候へども乍序申上置候

十一月四日午後　　備後助

二白申上候も疎に候へども監察抔罷下候風聞有之候へば又々俗論輩氣を持候氣味無之候とも難被申能々御氣を被付候樣奉存候全體爰元にて應接は彼れは上策我にては下策に候へども最早いたし方も有之間敷此上之處輕易に過不申樣有之度事と乍不及奉存候事に御座候以上

宇右衛門樣
藤右衛門樣　侍史下

木戸君にも此節は歸り候哉御序よろしく其外誠一直人兩君へもよろしく奉希上候以上

（赤川大津の書）

一筆致啓達候然者今朝御達之趣有之候に付備後助殿御客館へ重役相對之儀立野一郎を以申入有之候得共此內以來備後助殿不快中に付四郎右衛門罷出候處御用人遠藤佐兵衛致相對別紙寫之通十月二十七日於京都閣老小笠原壹岐守樣より野村帶刀へ御渡相成候段急飛を以到來致候間明日明後日之間御使者を以御地へ被申達候得共御家老御出浮之儀に付寫を以申達候との事に御座候委細は素太郎被差返候間御聞取可被下候御當役方へ可然被仰上可被下候先者爲御注進如此御座候恐々謹言

十一月四日

赤川又太郎
大津四郎右衛門

尙々別紙廉書素太郎持ち歸候間御論談可被下候大小監察被罷下候に付應接人被差出幷小吏取扱候役人一人被差出候樣御詮議可被下候事

木戸貫治樣
山田宇右衛門樣
廣澤藤右衛門樣

（赤川大津の書）

一廣島表にて對問は大坂と場所は替り候得共萬端大坂にて對問同樣は勿論に候得共御國よりも外任へ膺り候者大坂居留同樣に被思食瑣細之御駈引は無御座樣仕度候事

一隊中重立候人物現任に膺り候者根本之地へ盡力肝要に付場先迄被差出候人柄能々御評定有之度候事

一同斷廣島迄被差出候儀に決候上は藝國への御賴旁連越之御使者大夫方同樣に有之度候事

一藝州へ掛合幕吏へ往復大夫方應接下地の事件を辨候者別に一兩人專任被仰付度候事

一御領近境へ幕吏來着逗留をも仕候事故壁を堅し野を清ふし御內輪之擧動少しも他へ不洩候て御國內嚴肅待敵の勢計り隱然と相見候樣御方略被相立度候事

一御三末岩國へ前件之趣早々被仰達此又本藩同樣堅壁淸野之心得屹度御通じ置有之度候事

一幕府より最前被相達候儀とは手筈を違へ藝國迄云々之趣御家來中下々迄御觸達にても被仰付惣て御領內疑惑に至り不申儀肝要の事

一御國論最前通一定不拔に候得ば目立候役々之者藝藩へ頻に往來は不可然萬端之事御駈引を受候樣にては出先之者對問上にて取計苦敷儀も出來尙御國

之動靜を外向より偵知仕候にも到り可申候事

右は大小監察廣島へ來り候儀報知有之不取敢愚案を呈置候以上

十一月四日

追啓

此度大小監察當境被罷下候旨御達之通諸隊其外滯在之人數相益候得者萬端費用相嵩可申候間見屆旁役人衆一人被差越候樣御詮議可被下候内分此段早速御詮議之程擧て奉希候以上

十一月四日

四郎右衛門

又太郎

政事堂

各中　樣

六日夜藝藩士寺尾生十郎京都より歸り八日使節に報ずるに幕府大小監察は此月二日大坂に至り其六日坂地を發して陸路旬日にして廣島に着するの豫定なりしことを以てす因て使節は急使を發して之れを山口に報す同日木梨廣島に着して使命を藝藩に致す藝藩は頻りに宍戸一行及び木梨に要むるに井原主計に代るべき人を派遣せんことを以てす蓋し幕命我老臣二人を召致するに在りしを以て今其一人をして歸らしめしは藝藩の失態に陷るの虞ありしを以てなり使節等亦其情を諒し之れを藩政府に告ぐ時に廣澤松原二人は三日味爽舟三田尻を發せしも風雨の爲め室積に滯り五日夜小田村の歸り來るに邂逅し九日に至り風浪稍〻收まるを以て室積を發し十一日纔に草津に達し其地に於て大津木梨と會し相謀て更に書を山口に寄せ井原代人の派遣を促し翌十二日廣島に入る小田村素太郎は六日室積より陸路を取り七日山口に入り即日公館に候し又世子に謁し翌日公に謁して細に上申する所あり藩政府因て諸隊會議所をして幕令を諸隊に傳達せしめ又國重德次郎に命ずるに藝州行を以てす（在藝使より國重若くは野村靖之助派遣の請求ありしを以てなり）十一日小田村素太郎に命じて更に藝州に赴かしむ（小田村は使節と共に藝州に至りしも實は別に因備阿に赴くべき使命を奉じ滯藝中松原音三を備前に同伴せんことを請ひし等の事ありしも使節一行の事務煩忙の爲め自己特別の使命は免せられ更に藝州行を命ぜしなり）同日木戸貫治山田

宇右衛門前原彦太郎より書を廣澤松原に致して應接の事一切委任必らず掣肘せざるの意を述ぶ書に曰く

本月六日上ノ關より小田村へ御附托之御狀七日夜相達申候御發程後御堅榮致雀躍候風潮不便只樣御滯泊に相成候由乍爾頓に御着藝被成候半大津其外來書之趣尙各位御附廉書之趣等委曲致承知候則國重德次郎事御內用被成御聞藝州差越候段御沙汰相成幕吏其外他藩人等右手合且御銀管轄之儀旁御授相成り有田千葉助を被差越申候然處大小監察來る十五六日頃には藝着相成候由御出立後之小變態彼地御着之上可被成御聞右報知に付ては國重小田村早速發途之筈に御座候處兩人共支度彼是差閊候由にて兩三日は遲延に可相成候諸隊へは人數附出候樣相授有之候處未だ附出不申癸亥丸へ乘組可罷越議も有之素より一決には無之候得共其內御含置可被下候扨又小田村歸候節宍大夫より之書中藝において幕吏應接は下策と有之其意不相分候處小田村より承り候得ば御國近く候處故內より駈引可有之左候ては十分應接難相成との按じ有之候由此度之事は丸に御委任にて內より御駈引可有之筈も無之其上浪華藝國地は異に候得共何も最前之通り浪華應接之心得にて相變儀無之候間各位よりも克々御示諭被成置候樣奉存候井原歸國一條藝藩へ對候ては實以氣之毒御應接御苦慮致御察候此度幕之模樣變り候ては愈以殘懷之至御座候幕においては進發より大小監察下藝之策に至り前後四變此後又幾變か可有之我においては兼て決議之通條理と決戰を以て應之可也耳先は御答且爰許樣子も申上度旁荒々如是御座候

委曲國重小田村着之上御聞取可被下候恐惶謹言

當時藩政府は宍戸備後助一人をして使事を畢へしめんと欲したりしに在藝使節の書頻に至るを以て十四日遂に木梨彦右衛門に中老格を繼續し藝州に差遣を命じ宍戸に副たらしむるの書を作り（一筆申入候御手前事御用有之只今の御雇にて藝州被差越候條於彼地備後助申合御用筋取計候樣被仰付候條可被得其意）使者をして之れを齎らして途に迎へ其命を傳へしむ時に木梨既に歸藩の途に在りしを以てなり（井原代人は其人を得難かるべきは在藝使之れを察し木梨は既に中老格を以て廣島に使せる緣故もあれば此人に命じて可ならんと爲し木梨も亦敢て命を奉せざるに非ざるべき色あり在藝使より之れを藩政府に內申し是に決せしなり）越て十七日國重德次郎をして木梨差

遣通知書を齎らし之れを藝藩に致さしむ其文に曰く

井原主計儀歸國後病症相募急速快氣之程難計彼是登坂延引相成候ては奉恐入候事に付宍戸備後助一人にて公邊向御取計被成下樣先日木梨彦右衛門を以て得其意候處右備後助一人にては於尊藩何歟御計苦敷趣も有之候段御地差出置候者へ入々御内存被仰聞尙又大小監察急に御地迄御出張相成候付ては別段家老之者差出候も彼是隙取不都合にも可立至事に付此度木梨彦右衛門歸途より引返御地へ罷出備後助申合相勤候樣申越候間其段御領掌被成下萬端可然御取計致御賴候

同日公諸隊總管を召し幕使將に下らんとす宜く士氣を養ひ驕慢を戒め事に臨みて周章すべからざるの意を諭す其旨に曰く

此度大小監察廣島迄下向に相成於彼地及應答候付ては條理明白可申陳は勿論に候處此餘彼之形勢によりいか樣の儀出來も難計に付於諸隊も彌以士氣培養兵士之ものとも驕慢之風に不相移臨事不覺悟無之樣長官之者共格別心を用ひ

候儀肝要に候事

時に諸隊代表者廣島召致の幕命に關しては政府之れを諸隊に下し之れを協議し且つ其人を選ばしめしに諸隊は河瀨安四郎石川小五郎井原小七郎入江嘉傳次野村靖之助を選み幕命に應じ之れをして廣島に赴かしむるに決す十八日公之れを召して親書を示し戒諭警訓し且つ直目附をして之れを在藝使節に傳へしむ其書に云ふ

此度之一條に付父子多年之誠意貫徹致さず猥りに暴意を以相迫り候得ば不得止干戈を以相待候儀は元より覺悟之前に候處兎角世間には父子と諸隊と勢兩端に相成布令も行はれざるやに響居候樣被察心外之至候此度藝州差越候に付ては大夫は大夫隊中は隊中内輪之禮節等も不相亂上下一致之處明亮に相示し且先達て防長士民歎願之趣意とも區々不相成誠心鬼神を感ぜしむる處を以可及應答千軍萬馬之中へ出候と申譯にも無之卽今監察數輩之兵力なきを侮慢し或は勢威を以相壓し候等之心底有之候ては父子之誠意貫徹不致のみならず他日必戰之場に臨み無覺束に付前段之趣深く可有思慮もの也

十六日大目附永井主水正目附戸川鉾三郎松野孫八郎廣島に着す是夕在藝使節一行悉く寺町の寺院に移る十八日薄暮藝藩士植田乙次郎寺尾生十郎大津松原廣澤の旅宿に來り永井の命を傳へ告るに明後二十日國泰寺に於て應接すべきを以てす廣澤等答へて曰く頃日宍戸備後助病あり且つ井原主計の代使に關し曩に貴藩の意を諒して本藩に告ぐる所あり思ふに近日代使の到着あらん是故に今宍戸備後助のみ獨り先づ大小監察の質問を受け代使及び諸隊使更に之れを受くるが如くんば藩主の心事幷に國内の情實等根本の議論に至りては固より同一なるべきも枝葉の事に關しては其間或は齟齬なきを保せず大小監察の尋問に對する辯解は事もと重大なるを以て苟も齟齬を生ずるが如きことあるべからず故に宍戸一人尋問を受くるが如きは敢て之れを奉じ難しと植田等明旦永井の意を承けて來り報ずべきの旨を答へて去る同日廣澤等は書を藝藩に致して往年京都變動の後江戸に於て幕府の爲に幽囚せられし江戸藩邸在留者の放還を促す曰く

去秋京師變動に付江戸大坂長崎共何れも屋敷被召上候段御沙汰相成奉恐入大坂長崎等は詰居之者不殘歸國被仰付難有仕合奉存候然る處江戸表詰居之者孰れも幽囚被仰付候哉其以前彼地發途歸國懸り之者共於旅中被召捕候哉に相聞既に今日迄十五六ヶ月も相立候へ共一切音信不通生死之程不相分國元親子兄弟之情實は勿論弊藩一統日夜不堪煩念悲歎之事に御座候如何之御譯柄共不奉存彼是申上候は奉恐入候得共右東西藩邸被相毀候は無是非次第併詰居其外之者共においては京師變動一圓不存事に付何卒歸國被差免度兼て歎願仕度候得共更に不得其便無餘儀今日迄打過不本意事候處幸此度幕府大小監察御役向御當地御下着にも相成候事に付前件情實篤と御憐察被下候て折克節御役人方へ御聞合被下度御内々相賴置候事

十九日薄暮寺尾生十郎來り昨應對する事に關し廣澤等に告ぐるに永井の意は井原代使の到着を待たず宍戸備後助一人を接見せんと欲するに在るを以てす

（廣澤の日記抄）

寺尾生十郎尋來趣は今朝永井殿罷出昨夜相咄置候樣備後助一人先差出候樣に

は不相成との趣具に相窺候處永井殿返答に曰く

此度相尋度趣は防長事實種々異言之廉眞僞相尋候事にて大體相分り候事故掛念有之間布有事は有と答無き事は何處迄も無きと答候得者宜敷事との事

病氣にも有之候得者是れより押て旅館罷越自然も相斷候得ば其者を以談判せしめ身柄意內相知せ度如何哉抔之雜話かたけ之咄も有之候

最前兩人之處不圖一人氣分相にて代り之事公邊に對し藝藩是迄申立都合彼是如何にも兩人相揃候上應接都合宜敷は勿論に候得共去冬も永き中脇方より段々虛說を令注進其弊不少此度も彼是永引き候中には如何樣之浮說入候哉も難計甚心痛いたし居候事故可相成ば備後助一人早々罷出吳候樣との事

御尋抔申事は口頭にて一切不被謂應對と被申候由左候て罪人扱にいたしては不相濟段頻に告諭有



生十郎より着服供人數等相伺候處答に曰く

着服は何にても宜敷候得共先上下にて可然供之儀は如何樣にても宜敷當節恭順にも有之事に付於彼方決て疎は有之間敷相應召連にて可有之との事

右等大立候廉被相咄主水正殿意內々備後助一人被罷出樣子に寄候ては井原代り之儀も到着不及段御沙汰も可有之哉にも相見へ且來月十日限攻口出張布告にも相成居右樣之儀も都合次第品々被差止度との心事に相見へ彼是御差急之樣被相窺候との趣相咄候事

因りて廣澤等は宍戸備後助に告ぐるに此旨を以てす宍戸之れを諾し疾を力めて應接場に出づべきに決す乃ち之れを寺尾に報ず會、藝藩士遠藤佐兵衛より昨日永井の下せし命を宍戸に傳ふ曰く

今般此方共當地へ被差遣候儀は長防二州之動靜是迄種々異言有之眞僞不分明に付先頃御達相成候末家幷家老諸隊重立候者へ事實爲可承糺候條得其意尋之節衷情底意無腹藏申立候樣宍戸備後助へ通達可被致候

十一月十八日

遠藤佐兵衛殿

永井主水正
戸川鉄三郎
松野孫八郎

宍戸乃ち書を遠藤に致し答ふるに疾を力めて國泰寺に出づべきを以てす同日廣澤等寺尾に托して演說書を藝藩に致し更に國情を陳述す其文に曰く

内々演述仕置候手控

去秋京師變動に付ては主人父子不存儀とは乍申示方不行屆にも相當奉對天幕奉恐入候に付屹度謹慎罷在東西藩邸被相毀其後官位御稱號等被召放候との御議も尖に御請申上尙京師暴動巨魁參謀之者夫々處置いたし御詫申上委細之情實御酌取被爲在候由にて尾州老公御初御陣拂にも相成父子誠意も明瞭徹上隨て皇國之大義名分判然相立一統難有奉存候其後内輪役方不取計よりして少々爭鬪も有之候得共肝要謹慎中之儀に付早速父子申合せ精々鎭撫役方へ而已委任仕置候ては指揮行屆兼候も難計御屆をも申出置候通蟄居中奉恐入候得共不得止國中廻在をも仕居候體にて國内一統謹慎之次第は最前尾州老公へ御屆申出御見分をも奉請置候通相違も無之に付乍恐最早平常之御沙汰振も可被爲在歟と國内一統奉渴望居候處不計も當春以來不容易企有之との御事にて御再討之風聞も有之國内一統乍恐驚嘆怨望之折柄先達て末家幷家老之内御尋被爲在大坂罷出候樣御達も有之御尋之趣於下推量は仕兼候得共何も條理明白御答申上兼候次第は無之候處何分御再討風聞中被召登候付ては士民一統尙更不堪驚愕彼是苦心罷在候次第先日御藩迄歎願申出置候通に候付ては被仰出候期限も御猶豫相願置可也に鎭撫說得仕置候て家老之者御當表迄罷出候處道路之風說にて仄に承り候得ば九月二十日前後大樹公御上洛被爲在四ヶ條被仰立候て防長追討之勅許をも被爲願候御樣子に有之猶又同頃より夷船攝海乘込何歟切迫申立候哉十月に至り乍恐一旦は大樹公御辭職をも御願被爲在候處朝廷より御差留被爲在候末御書面を以防長追討之御成功被爲遂度との御事にて押て開港

之勅許をも御願被爲遊遂に開港之儀は改て三港勅許被仰出尤兵庫之儀は不被差免との由に候處幕府にては戊午年來假條約之儘夷人へ御免許之御約定有之たる哉に相聞何とも不取留道路之風說素より眞僞は不慥候得共如何之御次第に被爲在候御事哉と惶懼罷在候去秋京師之變動は素より奉恐入候次第は申上候迄も無之候得ども元來積年御確定之叡慮御遵奉之御次第は於幕府も追々被仰聞も有之加之聖天子賢將軍一時風雲會合之御場合にて古今未曾有之御盛典を被爲擧恐多も加茂石淸水等神明に被爲誓候御次第は天下億兆之仰感罷在候處に御座候主人父子儀乍不及平生之誠意は何卒皇國一致外侮相禦度心得罷在就ては叡慮遵奉不仕ては上已上元等其外種々之禍變出來遂に內亂にも立至り可申右樣にては皇國之御爲筋不可然との見込に付此度こそ臣子之分相立度一片愚忠之心底より國力身家之疲弊困難をも不顧期限御達を目途に掃攘に取掛り候處不被捨置監察使御下向叡感をも被下賜闔國感勵罷在候處其後御模樣振いかゞ哉と壯年之者は疑惑を生じ精々鎭撫申付候得ども遂に父子之主意に違背し去秋之變動に立至り形跡を以申候得ば誠以不容易奉恐入候次第に付幾回も恭順之條理を盡し御詫申上候儀に御座候乍併明智達才を以御洞察被成下候得ば素より僻境頑固之風習にて智愚賢不肖之懸隔は不任心底候得共畢竟皇國之御爲筋宜樣にと存込候無他之心事より差起り君臣之分華夷之辨相立度一片至誠に有之然處其末壯年之者過激に相涉遂に右樣相成候次第にて天地神明現在に候得ば其心術は御照覽も可被爲在と奉存候然處萬一も今般道路風說之通にては其根元待夷之御處置は積年之御行掛も有之候得共最早開港勅許御願をも被爲遂其枝葉にて齟齬相成候防長御處置之儀は去冬之通至誠恭順を以御詫申上一年及之今日迄も謹慎罷在候ても聊以御寬容之御沙汰は不被爲叶今般開港勅許も偏に防長御追討之ために被爲願候は乍恐如何樣之御筋合歟と闔國人心彌以疑惑不一形士民一統必死覺悟之模樣にも相見候に付父子始末家々老中其外申合心力を盡し精々鎭撫仕置候儀にて元來僻境頑固之風習旁不容易心配罷在候儀に御座候於御當藩は弊國情實は申上る迄も無之委曲御承知には